
DIFFERENT COLOR

Eris

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D I F F E R E N T C O L O R

【コード】

N O 8 6 1 T

【作者名】

E r i s

【あらすじ】

帝国最強の騎士ナイトオブブラウズに焦点を当てたお話。

基本的にオリジナルキャラの視点で書かれていますので注意。

B l o g & H P でも公開しています。

Chapter 00 - 設定 (10/14更新)

この作品について

説明文と会話文が主体で情景描写が少なめという、小説モドキです。その点を留意した上でお読みください。

短編連載の形をとっている為、基本的には各話に直接の繋がりはありません。

時間軸

・ 1章 - 無印 -

無印の頃を想定、故に“7”の席は空席扱い

・ 2章 - 空白期1 -

無印終了後、R2本編より前の空白期 “5”と“7”の席が埋ま
ります

・ 3章 - E・U・ -

R2本編より前の空白期、E・U・との戦争話

・ 4章 - 空白期2 -

R2本編より前の空白期、R2本編の直前？

ラウンズ 人物名 (固有カラー)

01 ビスマルク・ヴァルトシュタイン (白)

02 ユーリ・ウインスレット (赤)

- 03 ジノ・ヴァインベルグ (ダークグリーン)
- 04 ドロテア・エルンスト (水色)
- 05 ライ・アッシュフォード (黒)
- 06 アーニャ・アールストレイム (ピンク)
- 07 枢木スザク (青)
- 08
- 09 ノネット・エニアグラム (紫)
- 10 ルキアーノ・ブラッドリー (オレンジ)
- 11
- 12 モニカ・クルシェフスキー (黄緑)

主人公設定 (オリジナル)

- ・ユーリ・ウインスレット (Yuri Winslett)
- ・役職 - Knight of Two / 帝国技術研究所 (ETRL) KMF部門 統括官

士官学校を次席で卒業後、1年の従軍の後にラウンズに任命される。

表面的には冷淡な性格であり、些か近づきがたい雰囲気を持つ。

実際は冗談を言ったり人を茶化してみたりと案外気さくな面もあるのだが、そういった面を見るには根気よく付き合いを続ける必要がある。

立場に見合った義務は果たすが、他の同僚とは違い騎士としての明確な目標や理由が存在しない。

その為、騎士の気風を重要視するピスマルクやドロテアからの評価はあまり高くない。

逆に効率を重視し躊躇なくコックピットを攻撃する戦い方のせいか、

ルキアーノからの評価は高め。

本人としては等距離の交友関係を心がけているが、付き合いの長いモニカは例外で数少ない友人として認識している。

ただし、ノネットやモニカといった相手の世話を焼きたがるタイプには若干の苦手意識を持つ。

相手に気を使わないという考え方からアーニヤとの相性も悪くはないが、基本的にはお互いに無関心。

下位の貴族家系であり、ブリタニア人には珍しくナンバースに対しての差別意識を持っていないが、実際には興味が無いだけ。

有能ならナンバースでも構わないが、無能ならブリタニア人でも切り捨てる。

ある意味でブリタニアの国是を正しく反映した考え方を持っている。

ラウンズでの“2”という立ち位置、そして身に纏う色が“赤”という二つの点に若干の不満を持っていたりする。

共に前任者が有名な人物であり、何かと比較されがちな立場であることから常々変更出来ないだろうかと考えているが、両方とも皇帝陛下の命によるものであり、簡単に変更出来るものではないと理解していることから、諦め気味である。

幼少の頃から天才と称されており、周囲の人間は皆ブリタニアの最高学府であるアカデミーへの入学を疑っていないが、周囲の期待を裏切り軍の士官学校へと入校している。

実のところ本人は騎士になるつもりなど無く、技研や情報局を志望していたのだが、周囲からの勧めに折れる形で騎士志望とした過去がある。

ラウンズ 機体名

01	RZA - 1A	Galahad	(ギアラハッド)	
02	RZA - 2ES	Sorcerer	(ソーサラー)	
03	RZA - 3F9	Tristan	(トリスタン)	
04	RZA - 4IN	Elevator	(エレヴァート)	
05	Z - 01/B	Lancelot Club	Air Gunner	(ランスロット・クラブ・エアガナー)
06	RZA - 6DG	Mordred	(モルドレット)	
07	Z - 01/A	Lancelot Air Cavalry	(ランスロット・エアキャヴァルリー)	
08				
09	RZA - 9GR	Forte	(フォルテ)	
10	RZA - 10JS	Percival	(パーシヴァル)	
11				
12	RZA - 12SC	Risoluto	(リゾルト)	

命名について

既存の機体名と同じく、円卓の騎士から取る予定でしたが、急遽変更して主人公機以外は音楽用語から拝借。

主人公機は英語ですが、それ以外の3人についてはイタリア語となっています。

“5”の機体名については、ゲーム本編から拝借。

“Cavalry”は騎兵の意味ですが、クラブには些か似合わないので“Gunner”としています。

機体設定 (オリジナル)

・RZA-2ES ソーサラー (Sorcerer)

紆余曲折の内に中止された第八世代KMFの実証機をベースとし、専用機となるに当たって武装が追加された機体。

元々は第七世代を超える運動性能の研究が目的とされていた為、現有機の中では卓越した運動性能を有しているが武装は少なめ。

・ヴァリス L2 (VARIS L2)

ランスロッドが装備するヴァリスからバーストモードをオミットし、2挺の連結機構を追加したもの。

単独での威力は低下したものの、連結時には射程の延長と威力の向上がなされている。

リゾルトにも同様の物が装備されており、機体特性と相まって高い狙撃能力を有している。

・シュベルト (Schwert)

レーザー・実体刃複合刀、機体の全長とほぼ同じ長さを持つ長剣。

MVSの登場により価値が下がった感があるが、大型艦船を一撃で切り裂ける威力を持つ。

刀身を2つに折り畳む事が可能で、不使用時にはコンパクトな状態で保持する事が出来る。

・アーリーユニット (Early Unit)

フロートユニットの派生型であり、性能ではこちらが勝る。

細かな出力調整が可能であるが、その自由度の高さが災いして非常に操縦し辛い。

主人公機以外にも搭載する予定だったが、他のメンバーからは非常に不評な装備で結局は主人公専用の装備となっている。

その他 オリジナル設定

・ Empire Technical Research Laboratories
(帝国技術研究所)

神聖ブリタニア帝国における技術開発の最先端を担う、通称“技研” “帝国技研” “ETRL”
様々な部門が存在しており、主人公はその中の1つKMF部門の統括、端的に言えば監督役となっている。
半官半民の出資により運営されているが、所属している人員は民間人として扱われている。

・ Development and Test Command
(開発実験集団)

装備品の評価を行うための軍組織のひとつ、通称“DTC”
前線へと配備される前に、全ての装備品はここで性能評価を受けなければならぬとの決まりがある。

・ ラウンズ直属開発機関

設定上はラウンズ全員に存在する筈だが、原作ではスザクの直属である“キャメロット”しか登場していない。
本作ではランスロット以外のラウンズ専用機はETRLのKMF部門で開発が行われ、調整・整備を専属チームが請け負うという設定に変更。

・ランスロット及び特別派遣嚮導技術部

第7世代実験機という位置づけは変わらないが、エネルギー機関となる“ユクドラシルドライブ”はETRLが開発し、特派に実機による実証実験を依頼したという形に設定変更。

また、本来は別物であるらしい“フロートシステム”と“フロートユニット”に関して本作ではフロートユニットに統一している。

特派とETRL KMF部門はある程度の情報共有を行っている関係であるが、特派はブリタニア軍の技術部門でありETRLとは完全に別組織。

特派所属の研究者は軍人であるが、ETRL所属の研究者は民間人扱いとされる。（主人公のように軍人と掛け持ちの場合もある）

・Project Rosalinde（ロザリンデ）

第九世代KMFの開発プロジェクト。

類似のものとして、以下のようなものが存在する。

第八世代KMF開発プロジェクト “Project Kress mannia”（クレスマニア）

第七世代KMF開発プロジェクト “Project Auravictrix”（オウラヴィクトリックス）

・Changing Armor System（CAS）

外装パーツをユニット化することにより、1つの機体を様々な局面・状況において高い能力を発揮させるシステム。

以下の4種類が研究・開発されたが、コスト高と換装設備の問題から採用を見送られている。

高速戦闘向け “JAGER” (イエーガー)

近接戦闘向け “SCHNEIDER” (シュナイダー)

砲撃戦闘向け “PANZER” (パンツァー)

特殊戦闘向け “X” (イクス)

・Magnesser System (マグネッサーシステム)

磁気風を発生させ地磁気と反発させることにより揚力を得るシステム。

高度が高くなると地磁気との反発が弱くなる為、性能が低下してしまう弱点を持つ。

この仕組みを利用した飛行ユニットを“Magnesser Wing”と呼ぶ。

性能は下記の通り

Float Unit > Early Unit > Magnesser Wing > Energy Wing

・Mk5-E6E3 Almirante (アルミランテ)

イギリス・ドイツ・イタリア・スペインにて共同開発されたE・Uの新型KMF。

ブリタニアにおける分類では第七世代に分類され、第七世代量産産機に当たるヴィンセント・ウードと同レベルの性能を発揮する。しかし、戦時である事から生産性の高い“パンツァー・フンメル”

の生産が優先され、各国での配備数は数十機程度に留まっている。

なお、“Almirante”という名称はスペイン州軍が独自に名づけているものであり、採用している国でそれぞれ名称が異なっている。

イギリス：Valiant（ヴァリアント）　ドイツ：
Fluegel（フリューゲル）
イタリア：Orione（オリオーネ）　スペイン：
Almirante（アルミランテ）

その他 オリジナルキャラクター

・アステイア・ローグライア（Asteya Lograia）

オリジナルキャラ、幼少の頃より交友のある幼馴染。

物腰は穏やかで、軍人にはあまり向かない気質。

緩やかにウェーブがかった紫色の髪、青色の瞳、白色のヘアバンド。
同期3人組の中では、一番控えめなスタイル。

・リリシア・グットウィン（Lillisia Goodwin）

オリジナルキャラ、“くですわ”が標準のお嬢様。

ブライドの高さ故に高圧的な態度も取る事が多く誤解されやすいが、
実は面倒見の良い性格で交友関係も広い。

主人公へのライバル意識から親しくなった経緯があるが、あくまでも友人で特別な感情は無い。

茶髪のストレートにツーサイドアップ、緑色の瞳、黒いリボン。
同期3人組の中では、一番スタイルが良い。

・メリッサ・ヴィノクール (Melissa Vinocour)

オリジナルキャラ、技研の最年少職員であり主人公の副官的立場である。

主人公に対して最低限の礼儀は持つが、特別に敬意を払う様子はない。

美人でスタイル良し、しかし性格が子供っぽいのがたまに傷。

技研に所属しているだけあって優秀なのだが、子供っぽい性格に隠れてしまう場合が多い。

・フィオナ・クルシェフスキー (Fiona Kruszevski)

オリジナルキャラ、上品なイメージを与えるが意外とお茶目な性格の持ち主。

夫であるクルシェフスキー侯爵と共に主人公に対して多大な感謝の念を抱いていおり、将来的にはモニカのパートナーとして義理の息子になってくれる事を願っている。

・エドワード・ハミルトン (Edward Hamilton)

オリジナルキャラ、ブリタニア軍 准将の地位を持つ騎士出身の将

官。

アグレッサー部隊への所属経験も持つ凄腕だが、現場出身の叩き上げなので上級将校とは仲がよろしくないらしい。

既婚者であり、10代後半の娘が居る。

Chapter 01 - Bismarck Waldstein

“Knights of the Rounds”

世界の3分の1を支配する神聖ブリタニア帝国の統治者たる皇帝陛下の直属部隊。

神聖ブリタニア帝国を体現すると言っても過言では無い立場であり、「ラウンズの戦場に敗北は無い」という不文律が存在している。

そんなラウンズの中で最も有名なのは、基本的に序列の存在しないラウンズ内でも特別な地位である“1”の座を有するビスマルク・ヴァルトシュタイン卿である。

過去に起こった“血の紋章事件”において、当時のマリアンヌ皇妃と共にシャルル皇帝陛下を支持し苛烈を極める皇位継承戦争を潜り抜けた生粋の武人であり、現在のラウンズにおいて最も古株だ。

……そんな存在と同じ部屋で2人きりという状況は些か居心地が悪く感じても仕方ないんじゃないだろうか？

ディスプレイに映るETRL（帝国技術研究所）でのテストスケジュールを確認しながら私は小さくため息をついた。

いや、ヴァルトシュタイン卿が嫌いな訳じゃないんだ。

年下である私相手にも一定の礼儀を持って接してくれるヴァルトシュタイン卿はむしろ尊敬している。

けれど、大柄な身体とその顔つきのせいなのか非常に圧迫感を

「どうかしたのか、ユーリ」

「！」

「何をそんなに驚いている？」

「いえ、少し考え事をしていたもので……」

内心で考えている事が読まれたのかと一瞬焦ったものの、そんな訳は無いのですぐに落ち着く。

相手の表情や仕草から考えている事を推測するといった技術もあるが、そこまで見抜けるほどヴァルトシュタイン卿との接点は多く無い……答だ。

「何か心配事であるのか？」

「……心配事とは少し違いますが、技研の方で行っている仕事について少し考えています」

「む、技研の方の話だったか」

「……何か不味い事でしたか？」

容姿からは想像しにくいだが、ヴァルトシュタイン卿は割と面倒見がいい。

ただ、性格故なのか面倒見の良さはあまり表には出てこなかったりする。

ちょっと不器用だけど、さりげない気遣いをしてくれる大人といったところだろうか。

「いや、ラウンズとしての悩みであれば聞いてやれたのだが、技研の事となれば技術者としての考え事なのだろうか？」

「はい、現在開発中の機体の装備を実機に搭載してテストを行う予定なのですが……」

ラウンズ専用機として開発中の機体は既に仕様は固まっております、とある問題を除けば後は各ラウンズの専属チームが組み立てるだけだったりする。

無論、完成しても直ぐに実戦投入とは行かないが乗り手の高い技

量を考えれば短期間のテストで済むといったのが今のETRLでの見解だ。

「出力の問題……だったか？」

「ええ、お恥ずかしながら未だに十分といえるエネルギー機関が完成していないのです」

十分なエネルギーを供給できなければ、いくら優れた技術を詰め込んだ機体であってもただの棺桶でしかない。

現在は第7世代KMF実験機であるランスロッドに搭載されている“ユクドラシルドライブ”に改良を加えた物を搭載する予定なのだが、予定した出力には達したものの未だに安定しているとは言い難い状況なのだ。

「ふむ、確かエリア11では第7世代KMFが実戦投入されたと聞いたのだが？」

「はい、シュナイゼル殿下の影響下にある特別派遣嚮導技術部が開発した“ランスロット”ですね。正確には第7世代実験機なので第7世代に分類していいのかは分かりませんが……」

「その機体に搭載されている機関では駄目なのか？」

「“ランスロッド”に搭載されている“ユクドラシルドライブ”は、技研が開発したデータを特派に提供し実機での実験を行なって貰っ

ているのですが、そのデータを見る限り現行の“ユクドラシルドライブ”では出力不足が懸念されているのです」

「実験機とはいえ、第7世代相当なのだろう？」

「今までのように陸上運用に限定するならば十分実戦に耐えうる性能なのですが……」

「空中機動能力がネックということか」

そう、現在開発中の機体は全機に空中機動能力が付与されている。

正確な表現をするなら、“フロートユニット”という飛行ユニットを搭載することを前提としているというべきか。

KMFが登場するまでは戦場の主役であった航空機であるが、最新の装備を整えた日本をKMFを装備したブリタニア軍が圧倒したことで、航空機全般の兵器としての価値は極端に低下していた。

EUや中華連邦が航空機の調達を止めて人型兵器の、端的にいうならばブリタニアのKMFをコピーして生産していることから伺える。

だが、最近になって航空機の価値を再評価する動きも出てきている。

KMFは既存の兵器と比べて高い汎用性を持つが所詮は陸上兵器でしかないのだ。

空中機動能力を付与できれば、迅速な部隊展開や戦闘行動半径の向上などが見込まれており、一層の優位性を持つことになると期待されている。

しかし、問題はKMFが汎用の陸上兵器として作られたことだ。

量産機向けは“滞空”性能の付与が目的であるが、専用機ではそれに加えて“空対空戦闘”も求められている。

元よりフロートユニットを装備した状態での空中戦闘が想定されている専用機ではあるが、人型であるが故に従来の航空機と違って空気抵抗の大きさが桁外れに高い。

その為、フロートユニットの出力も相当高いレベルで維持せねばならず、当初予定したよりもさらに高いエネルギー消費量が見込まれているのだ。

「空中運用をする上での私達の見込みが甘かったと言わざるを得ないのですけどね」

「……まったくの素人が口出しをすべきではないのかもしれないが、少しいいだろうか？」

「はい」

「確かに見込みが甘かったのはお前たちのミスだ、だが今はそれを打破すべく行動しているのだろうか？」

「勿論です。私も他のメンバーも同じように技術者としてのプラ

イドがありますから、未完成の機体を送り出すはありえません」

他のラウンズメンバーと違い強固な意志を持ち合わせているわけではないが、ちっぽけといえども私にもラウンズとしてのプライドがある。

それは技術者としての私にも同じようにあるのだ。

芸術家が絵や音楽で自分の感性を表現するのと同じように技術者が作るものは、一種の自己表現なのだ。

それ故に上からの命令でもない限り未完成の物を世の中に送り出すことを嫌う、自分が未熟だと表しているものなのだから。

「年長者の戯言だと思って聞け」

「……」

「起こってしまった事は素直に受けいれる他無い。目の前の事実を受け入れ、いかに乗り越えるかが問題だ。それを乗り越えられる人間は先に進めるが、乗り越えられなければその場で立ち止まるしかない。方法は何でもいい、とにかく進むことだ。若いうちなら多少間違ったところで大して問題にはならんし良い経験になるものだ」

「……ヴァルトシュタイン卿も選んだ経験があるのですか？進むのか立ち止まるのか」

「ああ、悩みに悩んだものだ。私は器用でもなければお前のように頭が良いわけでもない、剣を振ることしかできん古い人間だ」

「……」

「どう行動しようが過去は覆らない。だから私は選んだ、陛下の最も信の置ける家臣となろうと。そして、陛下の道を切り開く剣となろうとな」

「……」

「まあ、そう難しく考えることはない。私の言い方が些か大げさに聞こえたかもしれんが、要するに行動し続けると言いたいだけだ」

「……」

「あくまで私の意見だかな。お前のように若い人間ならば別の術もあるかもしれん、ドロデアやノネットに聞くのも良かるう」

そう言い残して席を立つヴァルトシュタイン卿。

心なしか寂しそうに見えたのは私の気のせいだったのだろうか？

私がヴァルトシュタイン卿の心境を推し量ることなど出来はしないのだから、考えても仕方の無いことなのかもしれないが。

一人になった私はゆっくりと伸びをする。

この部屋では珍しい真面目な話をしたせいか、少しだけ疲れが溜まった気がする。

偶には技研の仕事を横に置いて、気分転換もするべきだろうか。

ああ、でも今はETRLに行こう。

これでも一部からは天才なんて持て囃された身なのだ、今なら良い方法を考え付きそうな気がする。

“考え付きそう”なんて曖昧な言葉を技術者が使うのは不適切なんだろうか、と苦笑じみた考えを浮かべながら、私は歩き出した。

e i n E N D
C h a p t e r 0 1
-
B i s m a r c k
W a l d s t

Chapter 02 - Yuri Winslet

“亡霊”

“亡き者の霊。死者の魂” という意味であり、比喩的用法として使う場合もあるが総じてマイナスイメージが付き纏う言葉であると
言わざるを得ない。

“Knights of the Rounds”

世界の3分の1を支配する神聖ブリタニア帝国の統治者たる皇帝
陛下の直属部隊。

そんなラウンズには亡霊が居る、他国からもブリタニア国内から
も言われる言葉だ。

亡霊とは何を指しているのか？

そんなお話をしてみようと思う。

彼がどんな人物であるかを言葉で表すのは難しい。

いや、ある意味一言で済むのだが、イマイチしつくりと来ないよ
うな気もする。

端的に言うならば「よく分からない人」だろうか。

「こんな所で何をしているんだ？」

ラウンズで有っても立ち入りを制限される場所、それがここET
RL（帝国技術研究所）だ。

神聖ブリタニア帝国において唯一の公的なKMF開発機関であり
広大な室内空間には、いくつものKMFが並べられている。

そんな場所に入ってきた私に対して掛けられた声に少しだけ安堵
する。

聞きなれた声に振り返ってみれば、そこにいたのは士官学校から
の付き合いである同僚の姿がある。

「ユーリに用事が有ったのだけど、連絡が着かなかったから直接出
向いたの」

「……連絡？」

「きちんと連絡したのよ？ 疑うなら携帯端末を確認してみなさい
な」

「別に疑っている訳じゃない……端末は部屋に置きっ放しだった気がする」

「携帯してないと意味無いでしょう？ 相変わらず妙なところで抜けているんだから」

この同僚は、一般的に天才に分類されるらしい。

何故そんな曖昧な言い方なのかというと、私自身がイマイチ実感しきれていない為だ。

確かに知識量は凄いし頭の回転も速い、士官学校時代は座学の成績では入学以来常に1位という輝かしい成績を残している。

おかげで私は主席の座を危うくしたことが何度も有ったのを今でも鮮明に思い出せる。

座学で1位、実技で2位というのが彼の士官学校時代の成績。

座学で2位、実技で1位の成績を残したのが私だ。

基本的に座学よりも実技の方が評価の比率が高いため、主席として卒業することが出来ただけど……。

「技研かラウンジのどちらかに居るんだから、携帯しなくてもいいと思わない？」

「変な言い訳しないの。第一、ユーリだってラウンズなんだから緊急の呼び出しとか受ける立場でしょうが」

「立場的には間違っていない筈なんだけど、任命されてから緊急の連絡を受けた記憶なんて無いな」

「もしもの時に対応するのが私達軍人の役目なのよ」

かくいう私もラウンズに任命されてから緊急の連絡を受けた事は無い。

その為、携帯端末は同僚の居場所確認の為に使うのがもっぱらの用途だったりする。

この端末、一応支給品だから私的な用途には使えないのよね。

「まあ、モニカの小言は横に置いておくとして、何か用があったんじゃないの?」

「小言って、ユーリは何時も」

「ほら、横に置いておくって言っただろ?」

「もう、分かったわよ。用事っていうのは」

私の知り合いが、彼の事を「性格以外は完璧な人」と称したことがある。

頭もいい、容姿もいい、子爵とはいえウィンズレットという貴族の当主でもある。

だが、性格に若干の難があるのだ。

普通に接している分には真面目なのだが、彼は人をからかって楽しむ趣味がある。

かくいう私も何度も被害に遭ってきたので、彼の性格については身に染みているといってもいい。

「この用事なら、私じゃなくてフランクス特務総監に提出すべきじゃないのか？」

「あら、そうなの？」

「技研は要求されたものを作るだけで、配備計画は管轄外だ。総監の判断を仰いだから出直してきてくれ」

「ヴァルトシュタイン卿があなたに渡すように言っていたのだけど……」

「……ちょっと待って」

傍にあった端末のキーを叩いている彼の様子を私はじっと見つめる。

銀髪に碧眼という珍しい容姿をしているせいか、人前に出ると注目を浴びやすい。

それ故、いや単に面倒だからなのかもしれないが、社交の場にはほとんど姿を現さない。

ラウンズであり貴族でありながら公的な行事にだけ、なおかつ最低限しか出席しない様を揶揄して“亡霊”なんて言われているのだが。

私の実家であるクルシェフスキーは侯爵という地位にあるので、その娘である私も社交の場には出ざるを得ないのだが、そういった場で彼を見掛けたことが未だに無い。

私の両親も彼には興味を持っているようなので、ぜひ出席して欲しいものなだけ……

「……ああ、なるほどね」

「如何したの？」

「いや、額面どおりに受け取ったのが間違いだっただなと思って」

「……意味が分からないんだけど？」

「分かんなくてもいいよ。大して重要な内容じゃ無かったみたいだし」

「余計に気になるじゃない」

小さな笑みを浮かべた彼に無駄だと思いながらも問うてみる。

笑みを浮かべている以上、どうせ答えてくれないことは今までの経験から分かるのだけど、気になるものは仕方がない。

「駄目、秘密だから」

「秘密？」

「この話はおしまい。 用件はこれだけ？」

答えが返ってこないのは予想の範疇だったので、別の話題を振ってみることにする。

彼との会話は私から声を掛ける事が多い。

彼は気分屋とでも言うべきなのか、自分から積極的に話すこともあれば最低限の受け答えしかしないような時がある。

一般的には付き合い難い部類の人間なのだろう、現に士官学校時代はそこまで他人との付き合いがあるように見えなかった。

……彼の人付き合いが無いように見えるのは私が傍に居たのも一因だと友人が言っていたけど結局どういう意味だったのだろうか？

昔の事はともかくとして私は彼の事をとても気に入っているし感

謝もしている。

物足りない感覚に苛まれていた私に上の存在を見せてくれたのだから。

「先ほどの話とは関係の無い話題で悪いけど、私達の専用機つてどれくらいで乗れるの？ 見る限り、完成している様に見えるけど」

「……………」

「ユーリ？」

「…………… 全機が作戦投入できるのはおそらく一か月後、機体は完成しているから各パイロット用の調整とテストが終了すれば正式に就役かな」

「その割にあまり嬉しくなさそうね？ 自分の作品を世に送り出すつていうのに」

「別に嬉しくないわけじゃないさ。でも結局アレを搭載するのは私の機体だけなんだなと思って」

「ああ、アレね……………」

彼の専用機を視界に収めながら、アレを装備した状態でのシミュレーションを思い出す。

私たちがアレと称しているのは、“アーリーユニット” (Ear

ly Unit)”と呼ばれるものだ。

端的に言えば、“フロートユニット”と同じ飛行用の装備なのだが、そのスペックには大きな違いがある。

細かな出力調整や、高度に関係ない性能の発揮など性能的には“アーリーユニット”が大きく上回るのだが、出力調整の自由さが災いして非情に操縦し辛いのだ。

戦闘機動を取る以前に飛行という行為自体に気を使う必要が有るため、私と同じようにシミュレーションを試したメンバーは一樣に“フロートユニット”を選んでいた。

彼と同じ高速戦闘を得意とするジノでさえ、乗っついて気分が悪くなりそうなんて口にする有様だ。

当然ながら、私も“フロートユニット”を選んだ。

同じ3次元的な機動が可能になる装備とはいえ、扱えなければ意味が無いのだから仕方がない。

先ほど、ジノと同じと評したが二人の戦い方は少し異なる。

ジノはトップスピードを重視した“高速戦闘”であるのに対し、彼の場合は機動性を生かした“高機動戦闘”である。

実は、これが亡霊と呼ばれるもうひとつの所以だったりする。

ジノの場合は速度により攻撃が追いつかないと分かるのだが、彼

の場合は本当にギリギリ、かつ僅かな動作で避けるものだから、まるで攻撃がすり抜けるように見えるのだろう。

故に対峙した敵から“亡霊”なんて噂されるのだ。

「結局、使いこなせたのはユーリだけだもの。活躍期待してるわよ、亡霊さん？」

「……」

「ふふっ、どうしたの？」

「褒めてるのが、それとも貶してるのか」

「私がユーリの事を貶すなんて真似をすると思うの？」

「モニカの性格からすると無いとは思っけど、笑いながら言われると……」

困ったような表情で返す彼を見ると、どうにも微笑ましい気分になる。

同い年でむしろ私よりも大人びた思考をしている筈なのだが、時折幼く見える一面が有ることを知っているのはおそらく私だけだろう。

私だけに見せてくれる一面を想い多少の優越感に浸りながら、私は願う。

願わくは、この大切な日常が続きますように。

C
h
a
p
t
e
r

0
2

-

Y
u
r
i

W
i
n
s
l
e
t

E
N
D

Chapter 02 - Yuri Winslet (後書き)

元々主人公として想定していたキャラはLOST COLORSの主人公であるライ君でした。

途中でオリキャラを主人公に変更した為、容姿設定がほぼそのまま引き継がれています。

瞳の色は完全に私の好みです。

私からすると“ブルーアイズ”は典型的な外国人を連想するんですが、どうでしょう？

“騎士”

皇帝陛下の直属であるラウンズは完全な実力主義だ。

ブリタニアという国自体がそういう仕組になっているのだが、その中でもラウンズはその傾向が顕著なのだ。

KMFのパイロットとして高い戦果を出せば、性別も年齢も問わない。

現にラウンズは9人中4人が女性、同じく9人中4人が10代で構成されている。

34

「へえ、これがコーラって奴なのか」

「コーヒーと似たような色」

私も10代であり若い方に入るのだが、そんな私よりも年下がラウンズには2人居る。

今、私の目の前で興味深そうに炭酸飲料を見ているのが、その2

人の訳なのだが……

「見たことないって本当だったんだな」

「おいおい、私が嘘を言っているとも思っていたのか？」

「嘘だと思っていた訳じゃないんだけど……ジノは貴族なんだよなあ
あと思つてね」

「……？ 当たり前のこと」

「じゃあ、アーニヤは普段のジノを見ていて貴族の子息だと思える
か？」

「……見えない」

「だろう？」

「いや、2人とも酷くないか？ まるで私に問題があるみたいじゃないか」

“ Knight of Three ” ジノ・ヴァインベルク
“ Knight of Six ” アーニヤ・アールストレイム

ブリタニアの未来を作る若き騎士……なんて事を雑誌に書かれていた気がするが、本人達は実に呑気なものだ。

というか、私やモニカがラウンズに任命された際は取材とか受け

なかつた気が……

任命式はテレビ中継されていたが、就任後の取材も無かつたのでこの対応の差に若干の文句を言いたい。

そういえば、任命式の数日前にモニカが「私に任せて置いて」とか言っていた気がするが、あれは何を任せれば良かつたんだろうか？

「正直、ジノの普段の行動からは貴族らしさを感じ無いからな」

「同意」

「ユーリとアーニヤは相変わらず厳しいな といつか貴族らしさって何？」

「行動といつか振る舞い？」

「ジノはうるさい」

「アーニヤは唯の文句じゃないか……ユーリは自分が貴族らしいって思ふのか？」

ヴァインベルク家は公爵階級であり、ラウンズの中ではもっとも高い貴族階級だったりする。

次いで侯爵であるクルシェフスキー家、辺境伯であるエニアグラム家と続くのだが、まあ横に置いておこう。

「いや、私は領地を持たない弱小貴族だからな」

「子爵も貴族」

「ユーリが私に貴族の印象を持たないのはパーティーとかに出席しないせいだろ、ああいった場ではきちんとしているぞ?」

「つまり、普段はきちんとしてない訳か」

「自分で認めた」

「……2人はどうしても私を苛めたいのか?」

どうも、この3人で居るとジノが被害者、もとい弄られる役回りだったりする。

私は人“で”遊ぶのが趣味の1つだし、アーニヤが弄られる光景がイマイチ想像出来ない。

「ところでアーニヤ、コーラの写真なんて撮って楽しいのか?」

「楽しくない」

「……じゃあ、何故撮っているんだ?」

「ブログに書く」

「ああ、あれ続いてんだな」

さきほど貴族らしくないと評したが、ジノの性格は殺伐としがちな軍人生活の中では有り難いものだったりもする。

悪く言えば空気が読めない、よく言えば周囲を明るくしてくれる、といった感じだろうか？

まあ、終始低いテンションを維持するアーニヤとの組み合わせは案外いいコンビなのではないかと思う。

「そういえば、ブログを書くのは良いけど軍機に関わるような事や写真を載せるのは止してくれよ？」

「分かってる、そんな事しない」

「技研の事で前科があるんだけど？」

アーニヤは好奇心旺盛なジノと違い周囲に興味を示さないのだが、携帯は常に肌身離さず所持している。

最初は、余程気に入っている携帯なのだろうかと思っていたが、理由は別にあった。

なんでも自分の記憶を信用していないとのこと。

その為、写真や文章で物事を記録する事で記憶の替わりとしてい

るらしい。

正直な所、今でも理解し難い考えなのだが本人が冗談を言っている様にも見えず、加えてデータが消えた時に泣き出すなんて光景も見ているので今は深く考えないようにしている。

そんなアーニヤだが、ETRLで開発中の機体を撮影しブログに記載したことがあった。

偶然ブログを見ていた職員の連絡で気づき、直ぐ様本人へと抗議して削除してもらったのだが、あの時は本当に肝を冷やしたものだ。

ETRLはブリタニアが躍進する切欠となったKMFの唯一の公的開発機関であり、ETRLの重要性は軍のみならず国民にも知られている。

そのETRLから最新技術の情報が漏れたなんて事になれば、どんな反応が起こるかは言わずもがなだ。

さすがに隠し通すわけにもいかず、私とアーニヤでヴァルトシュタイン卿へ判断を仰いだのだが、嚴重注意で済んだのは本当に幸いだった。

「一般兵士だったら、間違いなく首を切り落としているが」なんて言われたことは忘れたい記憶だけだ。

「つつい」

「ヴァルトシュタイン卿にまた怒らりたい？」

「……それは嫌」

「じゃあ、気を付けるように」

「わかった」

そういえば、同時にラウンズ加入した為なのか、この2人は基本的にセットで扱われる事が多い。

基本的に一緒に居るので丁度良いのだけど、この2人には些か困った特性がある。

「そういえば、ジノとアーニヤは勿論報告書の提出は終わっているんだよね？」

「……」

「……」

ラウンズは一般の騎士達に比べれば、個人の裁量が大きく認められている。

だが、皇帝陛下直属とはいえ軍人である事に変わりはないのだ。

出撃したなら報告も必要だし、平時であっても訓練を行うなら申請が必要になる。

KMFに限った話ではないが、兵器には総じてお金が掛かる。

本体だけでなく、エネルギーも弾薬も整備費用も、何をするにしても資金を湯水の如く消費するのだ。

当然ながら、資金は無限ではない。

故に兵器本体と関連物はしっかりと管理しないと、資金が足りなくて整備できませんなんて笑えない状況になりかねない。

……消耗品に関しては整備担当が報告するので騎士は関わらなくて良いのだが、それでも出撃報告は如何なる階級においても必須だ。

私達の場合は、フランクス特務総監に報告書を提出する義務が存在している。

「2人とも、視線を逸らしてる理由をぜひ聞かせてもらいたいんだが」

「あっははは、何でだろうなー？」

「……何ででしょう？」

おどけた風に言う2人に若干イラツときたが、こんな事で怒るのも馬鹿らしいのであえて無視することにする。

この2人に書類仕事を期待する事自体が間違いなのだと最近思い

始めたが、軍民間わず働いている限りは報告書との縁は切れないだろうから、どんなに嫌がっても強引にやらせるのだけだ。

だが、この2人でも自発的に報告書の作成を行わせる魔法の言葉が存在している。

それは

「……今度から、ブラットリー卿と同類なんだなと思うことにする」

「それは嫌」

「私も嫌だぞ」

「でも、報告書の提出が滞るのは2人とブラットリー卿だけだからな？」

「……仕方ないから、今から書く」

「さすがにブラットリー卿と同類扱いはご免だかな」

心の中でブラットリー卿に謝罪しながらも、どれだけ嫌われていたのだろうかと少し心配になった。

既に3回はこの方法を実践しているのだが、全てにおいてこの作戦は成功を収めている。

ヴァルトシュタイン卿には若干の呆れを滲ませながらも迅速に報

告書を提出させた事を褒められたのだが、モニカには微妙そうな表情をされた。

この話をモニカから聞いたらしいノネットさんには大笑いされ、エルンスト卿もモニカと同じように微妙な表情だったのが印象的だった。

「ユーリ、少しお願い」

「手伝わないからな」

「……そんな即答しなくても、後輩を助けると思って手伝ってくれないか？」

「ああ、そういえばブラットリー卿は」

「自分でやります！」

「よろしい、さっさと作って提出してこい」

御免なさいブラットリー卿、悪気が無い……訳ではありませんが、これが一番効果的なんです。

報告書の作成のため席を立った2人を見やりながら、心の中で今一度謝罪しておく。

……ブラットリー卿はあんまり気にしなさそうなんだけどね。

Chapter 03 - Zino Weinberg & A
ny Earliest
END

“ Noblesse Oblige ノーブレス・オブリージュ ”

この言葉の解釈は幾つか存在するが、私は“ 立場に見合った責任 ”と解釈している。

高い身分を持つ者が持つべき道德観であるが、現代の皇族・貴族にはこの道德観が欠けている者も多い。

素晴らしい概念ではあっても、数百年の時が過ぎ政治・経済の体制が変わった現在では形骸化するのも無理がないのかもしれないが。

私達ラウンズは全員が貴族である。

皇族の数の多さに隠れがちだが、貴族の数もそれなりに多い。

皇族・貴族は俗的な言い方をすれば“ 特権階級 ”であり、多くの恩恵を受ける立場にあるが、その恩恵に釣り合う程の働きをしている者は本当に極僅かだ。

第2皇子 ジュナイゼル殿下、第4皇女 コーネリア皇女殿下な

どはその僅かな者に分類できるが、大半の皇族・貴族は時間と資源を無駄にしているだけである。

「という事で、頼む！」

「お断りします」

先程、時間と資源の無駄と言ったが、それは毎日のように開かれているパーティーの事だ。

良い言い方をすれば、他の皇族・貴族の交友関係を深めるため、悪く言えば腹の探り合いの場であるパーティーであるが、私の所にも頻繁に招待状が届いている。

それは、私の目の前に居るノネットさんやエルンスト卿も同じだろう。

「随分きっぱりと断ったな？」

「曖昧な返事をするや強引に連れて行かれそうですから」

「ああ、それは言えているな。ノネットはそういう奴だ」

「……」

事の発端は、ノネットさんに届いた招待状だ。

招待状が届くなど日常茶飯事であり、大半の誘いを仕事を理由に断るのが私達ラウンズの常識になっているのだが、2つの問題があった。

1つは招待したのはノネットさんの親の代から付き合いのある家で、無下に断る訳にも行かない相手であること。

そして、2つ目の問題は相手の子息がノネットさんにご熱心だという点である。

「どうしても、駄目か？」

「私がノネットさんと出席したら、そういう関係なのかと思われるじゃないですか」

「所詮は演技だぞ？」

「ああいった場での話、瞬く間に広がるから嫌です」

皇族・貴族の横の繋がりは馬鹿にできるものでは無く、噂話は瞬く間に広がっていく。

当たり障りの無いものから、明らかに他人を貶めるための誹謗中傷など噂の種類は様々ではあるが。

演技とはいえ、パーティーの場でそんな関係だと匂わせれば、面倒事になることは容易に想像が出来る。

「偶には社交の場に顔を出すことも大事だと思わないか？」

「必要な時には顔を出しますけど、今回がその時だとは思いませんので。それに、ノネットさんの誘いに乗ると、後からお小言を貰うことになりそうなので余計に遠慮します」

「お小言？」

「ええ、以前ジノからの誘いを受けたときに、モニカからお小言を貰いましたよ。“私の誘いは蹴ったのに、ジノの誘いは受けたのね”と」

「モニカという壁が有ったか……」

「クルシエフスキーからしてみれば、自分の誘いを拒否しているのに他人の誘いを受けるのは癪だろうな。一番親しい相手だろうに」

「元々出席する予定のパーティーだったんですけどね、その辺の事情を把握しないでジノから誘われたという点だけを問題視してきましたから、対応が非常に面倒だったんですよ……」

あの時は本当に面倒だった、“大変”ではなく“面倒”だったのだ。

仕事の事以外は会話しない、これは別に良いのだが同じ部屋に居るところこちらを睨んでくるし、モニカが仕事で些細なミスを連発して私はその対応に追われるなど、精神的に疲れる時間を送ったのを今

でも鮮明に覚えている。

さすがにこの状況は不味いと思い始めた3日目であるが、モニカは普通の状態に戻っていた。

結局、3日目で何時も通りの関係に戻ったのだが、その理由は本人が教えてくれないので未だに不明である。

正直な所、理不尽としか思えないのだが、藪蛇は御免なので深く追求しないようにしている。

「……埒があかな。 ネット、諦めて他を探したらどうだ？」

「自慢ではないが、候補に挙げられるほど男性の知り合いが居ないな」

「本当に自慢になりませんね…… エルンスト卿に協力してもらえば良いのでは？」

「生憎だが、私も知り合いは多くないぞ」

「いえ、エルンスト卿ご自身に協力してもらえば良いんですよ」

「……おい、まさか私に男装しるでも言つつもりなのか？」

本人には失礼かもしれないが、エルンスト卿やネットさんにはその辺の男性よりも男らしい面がある。

ただし、ノネットさんの場合はスタイルが良いので男装しても直ぐに気づかれるだろうけど。

「ドロデアの男装……似合いそうだな」

「おい、待て」

「男装の麗人という言葉もありますからね」

「ええい、待てと言っているだろうが！」

気分を害したのか、それとも単に恥ずかしがっているのか判断が付きにくいのが、さすがにこの流れは許容できないらしい。

男が女装した場合、見るに耐えない事が多いが、女が男装した場合合は結構似合うことも多いし、悪くは無いと思うのだけど……。

「何だ、ドロデアは不満なのか？」

「当たり前だ！」

「ですが、現状だと最良の選択肢ですよ？」

「お前が出ればいいだろう！」

「仮に私が出たとして、モニカへのフォローは行ってもらえるんですよね？」

「うっ、それは……」

エルンスト卿には悪いが、フォローできるとは正直思っていない。

それ以前に、出席する気が無いのだから、何としても断る。

……その為には、先輩に当たるエルンスト卿を犠牲にしても仕方ない筈だ。

「言葉に詰まったということは無理ということですよ？ 現状で、ノネットさんの頼みを聞いたのは私とエルンスト卿だけです」

「そっ、それがどうしたと言っただけ？」

「そして私は出席できない、となると残るはエルンスト卿だけとなるわけです」

「待て、お前は出席できない訳では」

「ノネットさんが、私達を頼って相談してくれたのにエルンスト卿はそれを無下にするのですね……」

自分の事を棚に上げて、といった言葉が聞こえてきそうだが気にしない。

無茶な事を言っている自覚はあるが、面倒事はなるべく回避する

主義だ。

このあたりが、モニカから詐欺師とか言われる所以だろうか。

「くっ、だが、男装というのは……」

「一時の恥と、期待を裏切る事への罪悪感、どちらが上ですか？」

「……」

「ユーリ、その辺にしておけ」

さあ、最後の一押しという所で中断が入る。

エルンスト卿は助かったとも思っているのだろうけど、先程からノネットさんの唇が微妙につり上がっているので、決して助けたわけではないと思いますよ？

「嫌がっている者を強引に連れて行く訳にいかないからな、無理を言つてすまなかつたな2人とも」

「こちらこそお力になれず……すみません、ノネットさん」

「……」

「パーティーには大人しく1人で出席することにするよ、まあ何とかなるだろう」

「こんな事しか言えませんが、頑張ってください」

「……」

「うむ、気合を入れて出席してこよう」

そう言って、席を立つノネットさんの背中にエルンスト卿の声が掛かる。

……最後の仕上げかな。

「ノ、ノネット!」

「声を張り上げてどうした?」

「どうしても言うなら……その、男装してやっても構わないが……」

普通の凛々しいエルンスト卿からは想像できないぐらい、弱々しい物言いに少しだけ驚く。

ただし、エルンスト卿はもっと周りを見た方がいいと思う。主に相手の表情とか。

「いや、無理はしなくて良いんだぞ? 嫌がる者を強引に連れてい

く訳にもいかないからな」

「だが、困っているのだろう……普段から世話になっているのだし、本当に困っているなら協力するさ」

「エルンスト卿……」

「ドロデア……本当に良いのか？ 辞めるなら、今だぞ」

「ああ、口にしたことを翻したりはしない」

こうして、哀れにもエルンスト卿は捕まったのでした。

「そうか……そうか！ やってくれるかドロデア！」

「えっ、ああ、協力はするが……」

「ノネットさん、男装する際の衣装とかどうしますか？ 無いなら、私の物を貸しますけど」

「そうだな、さすがに男物など持ち合わせていないからな。素直に借り受けよう！」

「あー、ノネット？ それにウインスレットも、何故そんなに」

「よし、そうと決まれば屋敷に戻るぞ、ドロデア！」

「衣装はノネットさんの屋敷に手配しておきますね」

「うむ、任せたぞ！」

「な、なあ、2人とも少し聞きたいことが」

エルンスト卿を引っ張って、強引に連れて行ったノネットさんを見送りながら思わずため息をつく。

「ごめんなさい、エルンスト卿」と心の中で謝罪しておくのも忘れない。

後日、エルンスト卿の男装写真を見せて回っているノネットさんを見かけた。

次いで、「エニアグラム卿には将来を約束した麗人が居る」なんて噂が流れていたので、作戦自体は成功したらしい。

エルンスト卿の羞恥心という犠牲を払って、だけどね。

e t t e
E n n e a g r a m
D E N D
C h a p t e r 4
-
D o r o t h e a
E r n s t & N o n

文章の頭にある、前書きらしきものは本編とはあまり関係無いです。

本来は先頭に書いた言葉の内容のお話を書くつもりで各人にキーワードを割り振ったのですが、やけにシリアスな内容が出来上がったので取り止めました。

“吸血鬼”

人の血を飲む、空想上の生物である。

ルーマニアに存在した通称“串刺し公”が“吸血鬼”のモチーフとして知られているが、あくまで空想上の存在であり、人に対して使う場合は当然ながら比喩表現の意味合いだ。

血というイメージが纏わり付く“吸血鬼”という言葉、当然ながらあまり良い意味では使われない。

今回は“ブリタニアの吸血鬼”についてのお話。

「おや、珍しい場所で会うじゃないか、ウインスレット卿？」

「私も騎士ですので、稀には身体を動かしたいのですよ」

“Knight of Ten” ルキアーノ・ブラットリー卿

通称ブリタニアの吸血鬼

射撃訓練場に私が居ることが珍しいのか、愉快的物を見たといわんばかりの表情だ。

「運動不足か？」

「ええ、最近は技研の仕事ばかりで騎士としての仕事が無という有様です。」

元々は技術者志望だったので現状に文句は無いのだが、あまり実践から離れると感覚が鈍りそうで少し怖い。

加えて、そろそろ騎士としての仕事もしないと、私がラウンズで在ることを疑われそうだ。

「ブラットリー卿は随分とお忙しいようですね？」

「ほう、何故？」

「最近、本国でブラットリー卿の姿を見かけませんでしたので。

それに

「それに？」

「随分ご機嫌のようですから」

分かりやすいぐらいにご機嫌な様子を見せられれば、この人が随

分と楽しんできた事は容易に推測できた。

“ブリタニアの吸血鬼”という異名を持つブラットリー卿だが、本人は“殺人の天才”と自称している。

どちらにせよ不吉極まり無い名であることは違いないのだが、この人の嗜好を考えると丁度いいのかもしれない。

人の命を奪うことに快感を覚えるという、歪んだ嗜好をしているのだから。

「ああ、とても楽しんだよ」

「……相変わらずですね」

「ふむ、ウインスレット卿には理解できないかな？」

「ギリギリの戦闘を楽しいと思う事はありますが、態々パイロットを殺す事に拘るのは理解し難いです」

「戦争は人を殺すものだろうか？」

「事実ですけど、戦争はあくまで“手段”であって“目的”ではありませんよ。効率を考えてコックピットを狙うなら私も変わりありませんが、わざわざ悲鳴聞くために狙うのは如何かと」

戦場に出てきている以上、他国の軍人も覚悟は済んでいる筈なので容赦する気は無い。

高速戦闘の際には一撃で沈黙させる事が望ましいので、コックピットや動力部といった部位を狙うことが多いことは事実だ。

無力化だけで十分だと発言する自称良識派が稀に居るのだが、実際にを行うにはそれなりの技量が必要になる上に手間が掛かる。

加えて、そんな戦いをされた相手の心境を考えると私はあまり取りたくない手法だ。

「ウインスレット卿なら、分かってくれると思ったんだが」

「むしろ、その根拠が聞きたいのですが？」

「先程コックピットを狙うと言っただろう？ 他のメンバーはそんな事言わない」

コックピットを狙うなんて発言するのはブラットリー卿を除けば、確かに私ぐらいか。

エルンスト卿は私の考えに近い気もするが、はっきりと口にはしないだろうし……

「それに、ウインスレット卿なら分かるだろう？ 戦場の真実を」

「“日常で人を殺せば罪になるが、戦場ならば殺した数だけ英雄となる”でしたか」

「ああ、その通り」

「日常で人を殺せば殺人罪、戦場で殺せば称賛される。確かに、真実なのかもしれませんが……」

「幾ら言葉で取り繕うと戦争は如何に効率よく相手を殺すか、この一点に集約されるだろう」

「……ブラットリー卿の戦い方は効率を考えているというよりも、楽しんでるように見えますが？」

敵パイロットの悲鳴を聞くのはどう考えても無駄だ。

加えて、人間の悲鳴なんて不愉快にしかならない気がする……一般的な感性からずれた嗜好を持たない限りはだけど。

「私にとっての戦争は公に人の大事なものを、命を奪えるとは最高の場だからな」

「……私が言っても説得力が無いかもしれませんが、愛国心ってありますか？」

「意識した事など無いな、戦場は公に命を奪える場に過ぎん」

「……予想通りのご返事で何よりです」

ブラットリー卿から愛国心なんて言葉が出てきたら、それはそれで怖い気もする。

かくいう私も残念ながら愛国心には欠けていたりする。

国家の為に戦うというのはイマイチ理解し難いのだが、それを口にするほど愚か者でもない。

「そういえば、後ほどグラウサム・ヴァルキリエ隊が卿の元に行く筈だ」

「理由は？」

「卿が要求されていたデータを提出する為だ」

「……こうして会っているのですから、ブラットリー卿が提出するという考えは？」

「有る訳がない。……私はそろそろお暇しよう、これ以上居るとあの連中に文句を付けられそうだ」

「ジノとモニカですか？」

「ああ」

「……2人がブラットリー卿に隔意を持っているのは事実でしょうが、ブラットリー卿もあの2人に思うところがあるのですか？」

「心底、気に入らないからだ」

「……綺麗好きな面があるかもしれませんが、実力が無ければ今の地位に居ませんよ」

「説教でもするつもりか？」

「いえ、あまり険悪だと同じ戦場の時に作戦行動が取りにくくなりますから」

私にとってのブラットリー卿は、若干性格の悪い同僚というだけで、あまり興味が惹かれない。

それでも一定の交友関係を持つのは、戦場で共同作戦を取る際に邪魔になつて欲しくないから。

我ながら打算的な考えだと自覚しているが、今更な事なので特にどうとも思わないけど。

「そういう打算的な考え方は好きだぞ？」

「……褒められたと解釈しておきます」

言葉を残して去っていくブラットリー卿の後ろ姿を見送ると、同時に視界の端に奇抜な衣装の二人組が映る。

相変わらず、着ていて恥ずかしくないのがと問いたくなる格好だ。

「お時間宜しいでしょうか、ウインスレット卿」

「構わない……リーライナで良かったかな？」

「はい、名前を覚えていただいて光栄です」

“リーライナ・ヴェルガモン”

既に何度か顔を合わせているので顔と名前は一致する。

派手な衣装の割に落ち着いた子で、私の周りには居ない純粋な子という印象を受ける。

「さっきブラットリー卿から聞いたけど、データの提出？」

「はい、ウインスレット卿に提出するようにと」

「確かに受け取った。……ひとつ聞きたいことあるんだけど、い
いかな？」

「……？ はい、構いませんが」

「君の後ろに居る子は新人さん？」

リーライナの斜め後方で、こちらを伺っている子には見覚えが無い。

格好からグラウサム・ヴァルキリ工隊の所属だとは分かるのだけ
ど。

「士官学校時代の後輩なんです、先日からヴァルキリ工隊に配属に
なりました。 マリーカ、ご挨拶をなさい」

「はっ、はい。 ええっと、先日よりグラウサム・ヴァルキリ工隊
の所属となりました、マリーカ・ソレイシィです、よろしくお願
いしましゅー！」

「……」

……慌てすぎて噛んだ？

いや、実は地方独特の語尾とかいう可能性もゼロではないか。

「あっ、あっ、あの」

「マリーカ、あなたって子は……」

「……」

「うっ、リーライナ先輩すみません……」

「謝る相手は私じゃ無いでしょうが！ 申し訳ありません、ウィン
スレット卿」

「もっ、申し訳ありません」

女の子2人に頭を下げさせている構図は、傍から見るとどういう状況に映るのだろうか？

実にどうでもいい事な気もするけど。

「2人とも頭を上げて、別に怒ってはいないから」

「ほっ、本当でしょうか！」

「ごら、マリーカ！……本当に申し訳ありません」

「いや、本当に気にしなくていいよ。ただ、幾つか質問を許して欲しいんだけど、いいかな？」

このままだと謝罪の繰り返しになりそうなので、強引に話題を変えらる。

話を先導するのは、あまり得意ではないのだけど。

「はい、幾らでもどうぞ」

「わ、わたしも大丈夫です」

「とりあえず、ソレイシィさんはもう少し落ち着いて欲しいんだけどね」

私が話すたびにビクビクと怯えられる、流石に傷つく。

小動物っぽくて可愛いとは思っけど、軍人としてどうなんだろうか。

「がつ、頑張ります」

「昔からこういう子でして……」

「そういう事しておくよ。それより、ヴァルキリ工隊に入ったということは、それなりに実力があると考えていいんだよね？」

「マリーカは士官学校の陸戦線機科で最優秀生徒だったんです、普段の態度から想像が着かないかもしれませんが」

「リーライナ先輩、それは酷いです……」

「最初の挨拶で失敗した子が文句を言わないの」

「はい……」

「成程ね。それともう一つ質問、さっきみたい事をブラットリー卿の前でやった経験は？」

「……」

「先日もブリーフィングの時に思わず……」

「そう……どんな反応が返って来た？」

「えっと、無言でした」

「無言？ 怒られたとかではなくて？」

「数秒ほど無言でマリーカの事を見て、直ぐにブリーフィングに戻りましたよ。私もあの時はどうなる事かと……」

「……ブラットリー卿も案外寛容なのかもね」

「えっと、どういう意味でしょう？」

「小首を傾げながら、聞いて来るソレイシィさんに思わず苦笑を返す。」

視線を移せば、リーライナも同じような表情なので、考える事は一緒らしい。

「いや、何でも無い。あの上官の対応は色々大変かもしれないけど、2人とも頑張ってる」

「はい！ 帝国軍人として恥じぬ活躍をしていきます！」

「……ウインスレット卿、何か面白がっていませんか？」

何かを探るような目でこちらを見るリーライナには悪いが、とても面白い事を見つけたと内心は喜んでいいる。

それを口に出してしまえば、余計な火種になりかねないので口に出さないけど。

「気のせいだよ、リーライナ」

「だったら良いのですが……そろそろ時間ですので、この辺りで失礼します」

「失礼いたします!」

「ああ、お仕事頑張って」

仲よく歩く2人組を見送ると、少しだけブラットリー卿が羨ましく感じる。

仕事が片付いたら、私も部隊所有の申請でも出してこようかな？

……本国待機が多いお前に必要なのかと問われて突っ返されるのがオチだろうけど。

N
D
C
h
a
p
t
e
r
0
5
.
L
u
c
i
a
n
o
B
r
a
d
l
e
y
E

Chapter 05 - Luciano Bradley (後書き)

ルキアーノのお話の筈なのに、半分がヴァルキリエ隊との絡みになっている件。

リーライナとマリーカの場合、アニメ本編では出番少なすぎて人格が掴めないので、名前と容姿だけ借りたオリキャラって扱いです。

モニカやドロデア、ノネットも似たようなものですが。

ドジっ娘マリーカについては二次創作の読み過ぎでこんな娘になりました。

元々は次のChapter 06にて終了の予定なんですけど、ナイトオブセブン就任のお話や、皇族との絡みも書いてみたいので、おそらくもう少し続きます。

タッチパネル式キーボードを叩きながら、情報を入力していく。

最近はタッチパネル式のキーボードを採用する製品が多いのだが、どうにも使いにくい。

静穏・省スペース・簡単に掃除ができて衛生的などが売りらしいが、個人的には低評価。

やっぱりキーを押し込む感覚が無いと入力しづらい。

ETRLの同僚は特に違和感を覚えていないらしく、「アナログ人間？」なんて聞き返される始末だった。

ブリタニアの最先端技術を担っているETRLの一員がアナログ人間とか冗談じゃないんだけどね。

「へえ、鏡みたいで綺麗ね」

……何か聞こえた気がするが、放置する。

客人を招いた覚えも迎えた覚えもないのだから、他人の声が聞こえる事などありえない。

視界の端に柔らかそうに揺れる金髪が見えたのも、ほのかに甘い

香りがするの、きつと錯覚だ。

ちなみに、キーボードは鏡面加工なので鏡そのものと言っても過言ではない。

「いい加減に、こっちを向いてくれない？」

仕方なく視線をずらせば、ラウンズにのみ許される白を基調とした礼服を身に纏う同僚の姿がある。

「……モニカ、ここ私の執務室なんだけど」

「ユーリの執務室じゃなかったら態々訪ねてこないわよ」

「どこの国の言葉だったか忘れたけど“親しき仲にも礼儀あり”、入室する前に確認を取るべきだと思わないか？」

「何度も声を掛けたのにまったく気付かないユーリが悪いのよ」

「……もしかして、また？」

「他の人だと気付かないなんて事は無いのに、どうして私の声だと気付かないのかしら？」

皮肉を籠めて、というよりは若干拗ねたような声を聞きながら少し考えてみる。

執務室に人が訪ねてくることは稀なのだが、それでもまったく無い訳ではない。

ジノやノネットさんという例外を除けば、来客は皆ノックと声掛けを行ってから部屋に入ってくる。

私も掛けられた声に対して対応するのだが、何故かモニカが訪ねてきた時は毎回の如く、ノックや声に気付かないのだ。

何故そんな事になるのかと毎回問い詰められるのだが、寧ろ私が知りたいぐらいだ。

「モニカの声は聞いていて眠くなるから、とか」

「……遠回しに馬鹿にしているのかしら？」

「聞いていて心地いい声だって事」

「……」

「どうかした？」

「何でもないわ」

改めて考えると声はともかく、ノックに気付かないのは明らかに不可解なんだけど、今は置いておこう。

目の前で複雑な表情をしているモニカを放置する訳にもいかないし。

「その割に微妙な表情しているけれど？」

「女の子に向かって微妙とか言わないの」

「女の子……ねえ」

「ええ、女の子よ。悪い？」

「いや、悪くはないよ。モニカが可愛い女の子だってことは分かっているし」

「……この手の会話は私だけが損する気がするし、話題を変えましょうか」

贅辞の言葉など聞き慣れてきている筈なのに、相変わらずこの手の話題には初々しい反応を返してくれるのが楽しい。

パーティー等に出席すると鬱陶しいぐらいに贅辞の言葉を貰うので、私よりもパーティーへの出席率が高いモニカは手慣れた対応を見せてくれるのかと思っていたのだけど、予想を裏切って顔を赤くしてわたわたと挙動不審な状態になっていたのが今でも印象的だ。

さすがに最近挙動不審な態度を見せることは無くなったが、頬が赤くなったり、急に話題転換をしたりと動揺はしているらしい。

「仕方ないから乗ってあげる。それで、用件は何？」

「用件は……何も無いけど……」

「何も無いって、じゃあ何しに来たの？」

「時間が空いたから、ユーリの様子でも見に行こうと思っただけよ」

「……サボリ？」

「仕事は終わらせたからサボリでは無いわよ……どうしても邪魔なら出ていくけど」

不安そうな表情をしている友人を追い出すほど悪い性格はしていないつもりだ。

モニカの場合、私に気を使い過ぎな気もするけど、これは性格上仕方ないことだろうか。

「別に邪魔では無いけど、此処に居ても作業の片手間に会話する事ぐらいしかできないよ？」

「それだけで十分よ、ごめんね」

「いいよ、別に。いくつか意見を聞きたいこともあるし丁度いい」

「うん、ありがとう」

普段はもつと軽い印象を受けるのに、こういう所は律儀だ。

こういつ素直さは捻くれている私からすれば少しだけ羨ましくも感じるが、今更な事なので横に置いておくとして、データとの睨めつこを再開。

Force evaluation report 2017Q3
“ National ”

“ Mk3 - E2E8 PANZER HUNMEL (パンツァー・フンメル) ”

所属 : EU

分類 : 第4世代KMF相当

“ TQ - 19 GANG LOU (鋼體) ”

所属 : 中華連邦

分類 : 第4世代KMF相当

・評価

EU及び中華連邦が採用しているKMFは、現時点ではブリタニアのKMFよりも性能面で劣ることが確認されている。

ただし、物量作戦で抵抗された場合、展開するブリタニア軍に多大

な損害を与えることが予想される。

これは、ブリタニア軍におけるKMFが接近戦での戦闘を想定していることに起因する。

従来兵器の流れを組み固定砲台として運用される敵KMFに対して、接近出来ずに撃破される事例が報告されている。

対策としては中・遠距離兵器の実装（1）、EMP兵器（2）などが挙げられる。

1

“RPI-11 Glasgow”の代替として配備が進められている“RPI-13 Sutherland”では“大型キャノン（ロケットランチャー）”の装備が可能となり、射撃武器がアサルトライフルのみという状況は改善しつつある。

2

現代兵器はシステムで自動化されている部分が多く、電子機器の麻痺を行うことが出来れば、実質敵に敵戦力の無力化となる。

ただし、自軍への防護対策も行わなければならないため、費用対効果を考慮すると実現困難な事が予想される。

情報局から上がってきたデータを簡単に纏めながら、もう1人の部屋の住人に視線を移してみる。

……視線が合ったということは、ずっと此方を見ていたんだろっか？

「どづかしたの、ユーリ？」

「……退屈じゃないのかと思って」

「んー、退屈とは思わないかな。こごやってゆっくりするのも悪くないし」

「なら良いけど……」

本人が気にしていないというならしつこく問う必要もないだろう。

……気を使われている可能性が高いけど、それを無碍にするのも失礼だろうし。

「そんなに気になるなら、軽い会話でもする？」

「そうする、人が居るのに静かなのも何か落ち着かないし」

「ふふっ、そういう所ユーリらしくて可愛いなあ」

「男に対して可愛いとか言うな、馬鹿にされてるように聞こえる」

自分の容姿がそれなりのレベルにあることが自覚しているが、ラ

ウンスに居ると若干自信を無くす。

選抜基準には容姿の項目があるんじゃないかと疑いたくなるぐらいに、容姿の優れたメンバーが揃っているのだから。

……ブラットリー卿？

人にはそれぞれ好みってものがあるんだよ。

「照れてるユーリも可愛いけれど、拗ねられても困るし話題も変えましょうか」

ニコニコと笑みを浮かべるモニカを見ながら、軽くため息をつく。

普段は私に対して意地悪だと言うが、この娘も結構性格が悪いんじゃないだろうか。

いや、「冗談の範疇だと言う事は分かっているんだけどさ。

」……」

「ふふつ。 さて、熱心に何のデータを見ているの？」

「情報局から上がってきたデータを簡単に纏めて、戦力評価報告書らしきものを作ってるだけ」

「らしきものって……私が見ても大丈夫？」

「機密指定が掛かる程のものでもないし、大丈夫」

今回の情報は指揮官向けの参考情報であって、あまり細かな事が書かれている訳ではない。

ETRLの方には拿捕し運び込まれたKMF本体が有り、そちらで詳細な情報を得られるため、私個人はこの情報に価値を見出していない。

じゃあ、何故纏めているのか？ 答えは簡単だ、文書嫌いの同僚の為だ。

敵戦力の把握ぐらいして欲しいのだが、あまり詳細なデータを送っても面倒とか言っつて目を通さない可能性が高い。

故に所属と機体名程度の簡素な情報を纏めて、提供しているのだ。

……この程度の内容が戦力の把握になるのかどうかは別だけど。

Force evaluation report 2017Q3
“Area 1”

“Type-10R BURAI (無頼)”

所属： 日本解放戦線・黒の騎士団

分類 : 第4世代KMF相当

“ Type - 11 / 5 G RAIKOU (雷光)”

所属 : 日本解放戦線・黒の騎士団

分類 : 第4世代KMF相当

・評価

鹵獲した“ RPI - 11 Glasgow”及び、その改造型。多少の変更点が存在するものの、基本的にはコピー機である。

“ Type - 11 / 5 G RAIKOU”は砲台として運用されるが、大型リニアキャノンの弾速・攻撃力には注意が必要。

現在は反抗勢力より接收した機体を“サンダーボルト”の機体名でブリタニア軍が運用している。

“ Type - 02 GUREN TYPE - 02 (紅蓮式)”

所属 : 黒の騎士団

分類 : 第7世代KMF相当

“ Type - 03 F GEKKA (月下)”

所属 : 黒の騎士団

分類 : 第7世代KMF相当

・評価

前述のコピー機とは違い、独自に開発したものと推測される。

両機共に現在のブリタニア軍の主力である“ RPI - 13 Suit

herland”を上回る性能（1）を擁しており、注意が必要。
“Type-02 GUREN TYPE-02”には輻射波動機構（2）という特殊な武装が装備されており、現時点では回避以外に防ぐ手立てが存在しない。
物理・光学の両シールドを用いても無力化されるようで、迂闊な接近戦は極めて危険である。

1
“Type-03F GEKKA”は“第7世代量産機であると推測されている。

現在のブリタニア軍では第四世代と第五世代の量産機が混在して運用されており、性能面では確実に劣っている。

2
高周波のマイクロ波を対象に照射することで、対象物を加熱・膨張させ破壊する仕組み。
高い攻撃力に加え障壁として使う事も可能であり、攻防一体の強力な武装と言える。

一覧にすると、エリア11に存在する反抗勢力が保有する戦力の充実さがよく分かる。

こんな機体を作るだけの資金とルートが一体どこにあるのだろうか？

「EUと中華連邦は置いておくとしても、エリア11の戦力はどうなってるのよ？」

「私も報告を聞いたときは啞然としたよ。ブリタニアは第5世代への置き換えすら途中だっていうのに……」

現在のブリタニア軍は、第4世代 グラスゴーから第5世代 サザーランドへと更新している真つ最中。

ブリタニアは膨大な数のKMFを保有しており、その全てを更新するには膨大な資金と時間が必要になるため、未だに更新が終わってない。

実のところ、ブリタニア本国では第7世代量産機の計画は既に存在しており、一部への配備も確定しているのだが……。

「モニカ、ロイヤルガートに導入される機体の事は聞いてる？」

「……確か、ヴィンセントだったわよね」

「そう、あれがブリタニアの第7世代 初期量産試作型って位置づけなんだよね」

「あれって、第7世代だったの？」

「一応ね。 軍ではサザーランドへの更新が優先されているから、

正式量産は見送られそうだけど……」

「ということは、配備されるのはロイヤルカードだけ？」

「現時点で予算承認受けたのは、ロイヤルカードとヴァルキリ工隊だけだった筈……多分」

さすがは皇帝陛下直属部隊とでも言うべきなのか、精査もせずにあつさり予算承認を受けたいらしい。

……私達の専用機も予算制限は無かつたし、立場的にはとても恵まれているのだから、何か複雑だ。

「ブラットリー卿と同じ立場なんて、想像するだけで嫌ね」

「新型機が優先して配備されるんだから、文句を言わない」

仲良くしろとは言わないけど、毎度険悪になるのは止めてほしいんだけどなあ……。

ジノやモニカも、いちいち突っかからなければ良いのに。

「分かってるわよ。それにしても、エリア11かあ……」

「エリア11がどうかしたの？」

「ユーフェミア皇女殿下のことよ」

「……ナンバーズを騎士にしたっていうアレ？」

「それとは別件。ナンバーズにもブリタニア人と同等の権利を認めるっていう宣言をしたのよ」

「ああ、行政特区のことか」

自らの皇位継承権を対価として、皇帝陛下に認めさせた特別区の事はさすがに知っている。

ナンバーズを専任騎士にした事から考えて、差別意識が無い珍しいタイプの人間なのだろうけど、本国での評判は散々だ。

「知ってるんじゃないの」

「皇位継承権を放棄した皇族なんて初めて見たせいか、印象に残ってる」

「成るほどね。　　そういえば式典って明日よね」

「何時から？」

「確か、現地時間の10時だったと思うわ」

エリア11はUTC+9、ニコペンドラゴンはUTC-5、現地

との時差は14時間。

「此方だと、今日の夕食時かな」

「ラウンジには大型モニターもあることだし食事を持ち込んで、そこで見ましようか」

「先客が居そうだけど、そうするか」

ジノやアーニヤは面白そうとか言っただけに見に来るだろうし、エルンスト卿も何だかんだ言っても気になるだろう。

ノネットさんの場合は、コーネリア皇女殿下と交友があるようだから、その妹君の舞台ならば見る可能性は高い。

ヴァルトシュタイン卿とブラットリー卿は……興味無いかな。

改めて考えると、騒がしくなりそうなメンバーだなあ……。

神聖ブリタニア帝国 公式発表

エリア11 トウキョウ租界に対して反抗勢力による大規模な攻撃が行われる、以後“ブラックリベリオン”と呼称。

第2皇女 コーネリア・リ・ブリタニア 行方不明

第3皇女 ユーフェミア・リ・ブリタニア 皇籍抹消 即日処刑

首謀者である“ゼロ”及び黒の騎士団構成員を多数拘束。

本日付でエリア11を「途上エリア」から「矯正エリア」へと格下げとする。

調子に乗って書いてたらテキストファイルで20KBを超えていたの
で、大幅に削りました。

こういう書き方だから当たり前かもしれないませんが、相変わらず単調
な文章ですよねえ……

Chapter 01	6.87KB
Chapter 02	7.19KB
Chapter 03	6.84KB
Chapter 04	7.58KB
Chapter 05	8.56KB
Chapter 06	11.7KB

今話で1章は終了、2章はナイトオブセブン就任の話から始まる…

…予定です。

スザクを“7”に据えるのは原作通りとして、ライ君を登場させて

“5”の位置に置こうかと考えています。

このSSがR2本編に突入した場合ブリタニア側に戦力が偏る結果
になりますが、いいよね？

偶にはルルーシュが悪い結末を迎えるSSも悪くはないと思っんで
すよ。

Chapter 07 - Investiture Part 1

帝都ペンドラゴン

世界の3分の1を支配する超大国であるブリタリアの中心。

皇帝陛下の居城たる宮殿の中には皇族・貴族が一同に会する事が出来る空間が存在する。

それが、ここ玉座の間である。

皇帝陛下・皇族・貴族が一堂に会する事が出来るこの場所で、歴史に名を刻むであろう出来事が今から執り行なわれる。

「ねえ、急に集められた理由って何なの？」

「あつ、私も知りたいぞ」

「同じく」

皇帝陛下が到着していない為か騒然としている玉座の間であるが、私達は立場的に大人しくおくべきなんじゃないかなあ……。

何時も通り過ぎるモニカとジノとアーニヤにはもう少し緊張感が欲しい。

「私が知っていることが前提みたいな聞き方はどういう事なんだ？」

「卿が、ここ最近走り回っていたからだろう」

「……」

「何故、黙る？」

「いえ、ブラットリー卿から他人の会話に加わったことが意外でしたので……」

「ここ最近では2番目に驚いた気がする、ちなみに1番はこれから起こる事だけだ。」

「色々な意味で有名人である彼が、ブリタニア本国に居るのだから誰だって驚くと思う。」

「くっくっく、ルキアーノですら気付いているんだ。ここ最近のお前の不自然さはラウンズ全員が知っているぞ」

「実際はクルシェフスキーが不自然だと指摘して、ノネットとヴァインベルクが余計な事を言っていたただけだがな」

「やっぱり貴方なんですが、ノネットさん……」。

あと、律儀に補足を有難うございます、エルンスト卿。

「……モニカ」

「いや、ここ最近執務室に行ってもまったく会えないから、どうしたのかなあと発言しただけよ？」

「そこに、ジノとノネットが喰い付いた」

「何時の間にか卿に女の影が、なんていう話に持っていったがな」

「そして、モニカが過剰に反応して」

「ジノ、私は過剰に反応したりしてないでしょう！」

「いやいや、あれは見ていて微笑ましかったぞ」

「ノネットは笑い転げていたし、ジノは気味の悪い笑みを浮かべていたようだ」

「気味の悪いって、酷い……」

「自業自得、記録見る？」

「……こんな会話してるメンバーは帝国最強と言われるナイトオブ
ラウンズ、初見の人は絶対に信じないだろうけど。」

あれ、そういえばブラットリー卿が違和感無く会話に溶け込んでる？

ジノとモニカが突っかからなければ、意外と普通に会話できるんだらうか。

「それでだ、結局何があるのだ？」

「もう直ぐ始まりますから、お楽しみといつことで」

「さあ、ケチケチせずに吐くんだ」

「却下です。でも……」

「……何？」

「ノネットさんは驚くかもしれませんね」

アスプルンド伯爵の話だと、ノネットさんがエリア11で2人を相手に模擬戦闘をやったようだし知り合いだらう。

以前、面白い奴らと戦ったと嬉しそうに言っていた事は、恐らく2人の事だらうし。

「むう、私が驚く……?」

「おいおい、余計に気に」

「静粛に！」

騒然としていた場が、一気に無音へと変わる。

声の主は檀上に立つ女性、ベアトリス・フランクスのものだ。

帝国特務局総監、同時に皇帝の主席秘書を務めている女傑。

元々はナイトオブブラウズ 第2席であり、実質的には私の前任者と言える。

どういう理由でブラウズの地位から退いたのかは不明だが、私にとっては“赤”マントと並んで悩みの種でもある。

「皇帝陛下、御入来！」

衛兵の声に合わせ、後方に控える楽団が演奏を始める。

威光を表すにはこういった演出も必要なのかもしれないが、相変わらず馴染めない雰囲気だ。

そして、音楽に合わせるかのように檀上右手から姿を現す御仁。

神聖ブリタニア帝国第98代皇帝 シャルル・ジ・ブリタニア

“不平等においてこそ競争と進化が生まれる”を持論として、ブ

リタニアを超大国へと飛躍させた張本人。

超大国の主君として相応しい雰囲気を持ちながら、玉座へと身を置く。

「長い話は好まぬ、今日は新たな我が騎士のお披露目だ」

「2人とも、入ってこい」

余計な言葉など要らぬと言わんばかりに、すぐさま本題へと移る。

陛下に付き従う形でこの場へと現れたヴァトシュタイン卿も、その意を汲んで扉の前で待たせている2人へと声を掛ける。

ゆっくりと開かれる扉から新たな騎士、つまり新たなナイトオブ
ラウンズが現れる。

予想通りであるが、彼らを見てそれまで静かだった場が騒がしくなる。

“ナンバーズが何故？”

“ここはブリタニアの帝都だぞ！”

“虐殺皇女の！”

向けられる声は当然ながら否定的なものが多い、彼は良くも悪くも有名なのだから。

騒がしくなってきた場も、陛下の鋭い眼光によりすぐさま静寂へと戻る。

「ライ・アッシュフォード、枢木スザク、我の騎士となることに異論は無いな？」

「Yes, Your Majesty.」

「今この時を持って、2人を我が騎士とする。我の剣となり楯となり、忠誠を尽くせ」

「Yes, Your Majesty.」

「汝らには、“5”と“7”の席を与える。ファランクス」

「はい」

傍らに控えるファランクス特務総監が、跪く2人にマントと剣を与える。

晴れて2人は皇帝陛下の騎士たる、ナイトオブブラウズとなった訳だ。

……だが、玉座の間は未だ静寂のまま。

今までの通例、私とモニカ、それにジノとアーニヤの叙任式の際は2回とも渡されたタイミングで拍手が起こっていた。

しかし、今この場では誰も手を叩かない。

私以外のラウンズは興味深そうに2人を見ているだけだし、多くの皇族に至っては未だに目の前の現実を理解できていないらしい。

視線を巡らせていると、前列に並ぶシュナイゼル殿下と目が合う、この人は2人がラウンズへと就任する事を事前に知っていた筈だ。

……何となく視線を外せないでいると、殿下は仕方ないなあと言わんばかりの表情でこちらを見返してきた。

やっぱり、この人は嫌いだ。

パチパチと殿下が手を叩く音が静寂に響く。

第2皇子であり、帝国宰相の立場である彼が拍手をするならば、他の者たちも渋々ながら拍手を送る。

皇族たちに合わせるかのように私達ラウンズも続く。一部不満そうなのもいるけれど見なかったことにしよう。

「14時より卓上の相克、両名の御前試合を執り行う」

フアランクス特務総監の言葉と同時に皇帝陛下とヴァルトシユタイン卿が玉座の間より立ち去っていく。

フアランクス特務総監もそれに続き　いや、私に咎めるような視線を向けてる？

……まだ仕事が続くんですね。

部屋を去らずに未だ2人に視線を向けている皇族を無視して、傍へと歩み寄る。

モニカが何やら声を掛けてきたけれど、フアランクス特務総監が怖いので黙殺。

「2人とも、何時まで跪いているつもり？」

「……もう、宜しいのでしょうか？」

「陛下は御下がりになられたから構わない。2人には御前試合の準備をして貰わないといけないから、ゆっくりする時間は無いけど」

「準備とは？」

「別に難しいことではないよ、単に御前試合のルールを覚えてもらうことと機体の微調整をするだけだから」

御前試合は実際の戦闘とは違い、制限ルールの元で執り行われる。

ルールには射撃武装の禁止などもある為、接近戦を得意とする騎士が有利なのだが、御前試合での勝ち負けはあまり重要では無い。

実際に私も御前試合でノネットさん相手に負けているけど、“よくやった”との言葉を貰っただけで終わった。

「時間は有効に使いたいし、歩きながら話そう」

「はい」

「ノネットさん、良いですか？」

「ん、まあ、そうだな……」

ヴァルトシユタイン卿が不在の時は、次点の年長者であるノネットさんがラウンズのまとめ役なので確認も込めて声を掛ける。

だが、妙に歯切れが悪い。

「どうかしました？」

「……少しだけでいい、2人と話をさせてくれないか？」

「それはラウンズとして、ですか？」

「いや、私個人としてだ」

左手の腕時計へと視線を移しながら、どうしたものかと考える。

話の内容は大方コーネリア皇女殿下やユーフェミア元皇女殿下の事と推測は付くのだけど……。

代理とはいえラウンズのまとめ役たるノネットさんの意見を無視する訳にもいかないのだが、この叙任式に関しては私が一切を執り行うことになっている為、時間が無いの一言で切り捨てる事も出来る。

ノネットさんの心情を考えるなら話をさせてあげるべきだし、新人2人としても知り合いと話を出来れば多少は落ち着けるかな。

「……最大でも20分が限度ですが、良いですか？」

「あつ、ああ！ すまんな」

「もう一度言いますけど最大で20分です。終わったら、すぐに格納庫に来てくださいね？」

「ちゃんと連れて行くから任せろ」

「……他の人たちは私と格納庫行きです、ということまで着いてきてください」

若干の不安を抱きながらも、ノネットさんと新人2人を残して、

玉座の間から立ち去る。

大雑把な所があるとはいえ公的行事の時間を無視する程、非常識な訳では無い筈だ、いやそうだと信じたい。

というか、未だに多数の皇族が残ってるんだけど、何時まで居るつもりなんだろうか？

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
.

Chapter 07 - Investiture Part 1 (後書き)

今回は比較的早めに、次々回からはおそらく更新速度が落ちます。

この頃のスザクって、暗い印象なんじゃないかな？

小説版買うべきかなあ……

「ねえ、あの2人とノネットは知り合いなの？」

格納庫へと向かう道中、私の横に並んだモニカが声を掛けてくる。

まあ、私が事前にノネットさんと関係のある人物だと言ったようなものだし、気になるのも当然か。

「私も直接聞いた訳ではないけど、エリア11に赴いたときに会ったらしい」

「ノネットにそんな任務あったかしら？」

「いや、私的な用事だよ。あと、2人を相手に模擬戦闘もしたらしいけど」

「何で模擬戦闘？」

「さあ、その事を教えてくれた人もよく分からない経緯だったと言っていたし、私も詳しい事は知らない」

アスプルンド伯爵は、いきなり総督から呼ばれて模擬戦闘をする事になったとしか言っていなかった。

近くに居た常識人ことクルーミー中尉にも聞いたが、同じような答えが返ってきたので本当に突然の事だったらしい。

「なあなあ、御前試合って事はあの2人と誰かが戦うんだよな？」

「当たり前、私達も同じ事やった」

「ついにボケでも回ったのか、ヴァインベルグ」

「……」

「まだ若いのに、痛ましいわ……」

「相変わらず酷いな!？」

無言のブラットリー卿は果たして空気を読んだのか、それとも単純に興味が無いのか。

それにしても、最近ジノの扱いが本当に悪い気がする。

あの2人の加入で少しぐらい報われてくれると良いかな……。

だからと言って、フォローしてあげる気は欠片も無いけど。

「あれの発言は置いておくとしてだ。卿、相手は決まっているのか？」

「陛下、もしくはヴァルトシュタイン卿が既に決めているだろう」

普通はそう思いますよね、エルンスト卿。

でも、陛下もヴァルトシュタイン卿も普通では無いらしいです。

「いえ、まったくの白紙です」

私の発言に未だ騒いでいたジノとモニカ、それを記録していたアーニヤも驚いた顔でこちらを向く。

エルンスト卿とブラットリー卿は……若干喜んでいる？

「ほう、未だ決まっていない。それは、つまり」

「ウインスレットの一存で決められる訳だな？」

「……一応、私の判断で決めると言われていますが」

私の裁量に任せるといえば聞こえはいいが、実際は無責任なだけな気がする。

こういつのは偉い人が取り仕切るべき事案だと思っただけだなあ……。

「はいはい、じゃあ私がやるぞ！」

「ジノ、ここは年長者としてこちらに任せろ」

「まったくだ、騒ぐなら少し躡けてやろうかあ？」

「ラウンズに求められるのは実力のみ、年齢など何の足しにもなりませんよ？」

……この3人は何故、こんなにも喧嘩腰なんだろうか？

御前試合ってそんなに魅力があるものだと思わないのだけど。

「アーニヤはどうする？」

「興味ない」

「そっけないご返事で……モニカは？」

「私も遠慮しておく、態々目立ちたくないし」

「そう……やっぱり、あの3人から選ぶしかないのか」

「ユーリが入ってない」

「私もパスだよ、これ以上仕事を増やしたくない」

「まあ、ユーリは進んで参加するタイプじゃ無いわよね」

「そついでと、さて……」

相手は私の判断で決めると言われているけど、判断基準などは一切言われていない。

何の要素で選べばいいのだろうか……。

未だ騒がしい3人の声をBGMにしながら、格納庫へと到着。

昨日まで、ここに並んでいた機体は8機だったが、今日からは10機へと増えている。

共に白を基調とした機体、“ランスロット”と“ランスロット・クラブ”が新たな住人だ。

いや、フロートユニット装備しているから、機体名が若干変わるんだっただけかな？

私達の機体はフロートユニットが“標準”装備だけど、ランスロットには“追加”装備扱い。

フロントユニットが存在していない時期に完成しているから、あくまでオブションとしての位置づけに収まっている訳だ。

……今は騒がしい声をどうにかするのが先決か。

「……そちらの3人、いい加減に決まりましたか？」

「生憎だが決まっていない、しかし埒が明かな」

「そう思うなら辞退するって考えは無いんですかね、エルンスト卿
「？」

「ある訳が無いだろう。 皇帝陛下の見ている場で武を振ることが出来る、そんな貴重な場を逃せるものか」

「……ジノ、辞退する気は」

「無い！ やっぱり相手を見極めるには戦うのが手っ取り早いんだぞ？」

片や名譽、片や好奇心……どちらも否定し難い。

となると、やっぱりブラットリー卿を外すしか無いかな。

「というところで、ブラットリー卿、辞退してください」

「おいおい、2人に対しての発言とはニュアンスが違わないか？」

「ブラットリー卿は御前試合には向かないと思うんです」

「ほう、私のどこが向かないんだ？」

「御前試合はあくまで、特定部位への攻撃回数によって勝敗か判定される事は理解していますよね？」

「当然だ」

「つまり、相手を殺しちゃ駄目なんですよ？」

「……」

私の発言に黙るブラットリー卿、そして何故だか周囲のメンバーも黙って私を見つめる。

……何で私が注目を集めているんだろうか、変な事を言っただけも
りは無いんだけど。

「……それぐらい承知しているのだが？」

「ちなみに、“偶然”コックピットを攻撃してしまった場合でも反則負けですよ？」

「……」

「陛下や皇族の方々が観覧されている場で、皇帝陛下直属の騎士たるナイトオブブラウンズが反則負けなど」

「ああ、もういい、分かった。辞退してやる」

「あ、そうですか。有難うございます」

「……やはり、卿は性格が悪いな」

「何か言いましたか？」

「いいや。……少し用事が出来た、会場には直接出向くからそこらは勝手にやっている」

止める間も無く、格納庫から出でいくブラットリー卿。

団体行動が嫌いなのは分かるけど、多少の協調性は欲しい。

いや、ここまで素直に付き合ってくれていたし今回は割と協力的だったと言えるんだろうか？

「あらら、出て行っちゃったわね」

「……モニカ、声が弾んでる」

「好き嫌いは個人の勝手だけど、あんまり険悪な関係は止めてくれ

よっ」

「前向きに検討するわ」

官僚の言い訳じゃあるまいし……つまり、何もしない訳だよね。

ブラットリー卿との関係改善はやっぱり絶望的かなあ。

殺せるから戦場に居るなんて発言をするブラットリー卿が、危ない人であるのは事実。

モニカのように真つ当な倫理観を持ち合わせた人からすれば、許容しがたい存在なのかもしれない。

……この言い方だと、モニカ以外は非常識みたいに取れるけど、まあいいよね。

ついでに言うと、ラウンズでの常識人を挙げるとすれば、ジノとモニカの2人だと思う。

私やアーニヤは若干ずれた思考の持ち主だし、エルンスト卿やノネットさんは非常識じみた面があるしね。

「ウインスレット、御前試合に出るのは私とヴァインベルグで良いのだな？」

「ええ、よろしく願います」

「ちなみに、私はどっちを担当すれば良いんだ？」

「ジノは枢木を、エルンスト卿はアッシュフォードをお願いします」
「枢木って、あの茶髪の方だよな？」

「合ってるよ。 エリア11、旧国名・日本の最後の首相である枢木ゲンブの息子、そして」

「世界初の第7世代KMF ランスロットのデヴァイサー。 いやいや、ナイトオブセブンはスザク君も出世したよねえ」

「……」

「……誰？」

「こんな場所にまで侵入者か？」

「どこの何方が知らないけれど、ここは関係者以外立ち入り禁止よ」
「？」

「んー、どっかで見たことがある気がするけど、何処だったけ」

「……この人の連れは、どこに行ったんだらうか？」

「この人の行動を止めるのは、やはりクルーミー中尉だろうに。」

「やあ、初めましてだねー。 スザク君とライ君の様子見に来ただけど、居ないのかなあ？」

「アスプルンド伯爵、あまり好き勝手に動き回れると困るんですが」

「やあ、ウィル君……居たの？」

「居ましたよ、最初から。あと、私のファミリーネームはウィンスレットです」

「まあまあ、細かい事は放っておきなよ、それより」

「ロイドさん！」

相変わらずのマイペースさにどう対処しようかと考え始めたと同じ時に張り上げた女性の声が格納庫に響く。

ああ、やっとご到着なのか。

「痛い、痛い！ セシル君、ごめんなさい！」

「少しは反省してください！」

いい年して年下の女性に説教されている光景にため息をつく。

相変わらずといえは聞こえはいいけど、本当に進歩の無い人だよ
ね。

「……お前の知人か？」

「ロイド・アスブルンド伯爵とセシル・クルーミー中尉、ランスロッドとクラブの開発メンバーですよ」

「……とても、そうは見えないんだけど」

「その気持ちはよく分かるけど、残念ながら事実なんだよね。あと、枢木とアッシュフォードの後見人でもある」

「……保護者？」

「まあ、その認識で良いかな。伯爵家が後ろ盾になるなら、あの2人も多少は楽になるだろうし」

ナンバーズである枢木と、身元不詳のアッシュフォード。

未だ血統が重視されるブリタニアにおいては、致命的な火種に成りかねない要素だ。

ラウンズという立ち位置は多くの羨望を受ける立場であるが、同時に多くの嫉妬を受ける立場でもある。

既存のラウンズは、その殆どが貴族階級であり多少の不都合には“横の繋がり”を使い自力で対処ができる。

だが、今回の2人は貴族階級どころかブリタニア人ですら無い。

私たちとは比べ物にならないぐらいの悪意に晒されることは想像

に難くないのだ。

頼れる繋がりを持たない2人はその悪意に直接晒される可能性が高かった。

それを危惧して、アスプルンド伯爵が後見人として名乗りを上げた訳だ。

……本人からすれば貴重なデヴァイサー（パーツ）だからという認識なんだろうけどね。

「いいですかロイドさん？ ライ君とスザク君は今日から“あの”ラウンズの一員となるんですよ？ それなのに」

「……本人達が居る前で、“あの”とは酷いですね？」

「あ……もっ、申し訳ありません！ この度は上司だけでなく私まで不敬な事をしてしまい……」

私自身は特派の階級・爵位を不問にするという独特の雰囲気は嫌いでは無く、むしろ好ましく思っている。

クルーミー中尉の発言も適当に聞き流しても良かったのだけど、この場に居るのは私だけでは無いので釘を刺しておく。

「まあまあ、その辺にしとこうぜ。美人さんが謝罪してる姿はなんか居た堪れないし」

「びっ、美人だなんて……ヴァインベルグ卿は口がお上手なんですね？」

頬を赤く染めながら照れる姿は確かに美人なんだけど……。

クルーミー中尉は優秀だし常識的な思考の持ち主だけど、何処かズレてるんだよね……。

「ねえ、ウィル君、ヴァイルベルグ卿のアレって本音だったの？」

「……私は社交辞令だと思っていましたね」

「ってことは、セシル君の反応がおかしい？」

「おかしいとは言いませんが、真面目に受け取りすぎな気がします」

珍しく空気を読んだアスブルンド伯爵が、本人たちに聞こえないぐらいの音量で話しかけてくる。

正直な話、ジノの場合は大抵の女性に対して、美人だ可愛いだと言っただけいそうなのがする。

ジノにとってはパーティーで用いる社交辞令の延長線ではないだろうけど、ルックス・家柄・実力を兼ね備えている者が言うところにならない事態になりそうだから、個人的には控えた方がいいと思うんだけどね。

まあ、ジノ本人もその辺は弁えている……と思いたいなあ。

「ジノ、そろそろ準備しないと間に合わなくなるんだけど？」

「おっと、それは不味いな」

「エルンスト卿も、準備お願いしますね」

「ふふっ、今から気持ちが昂るな」

「エルンスト卿……あくまでも御前試合ですからね？」

「分かっている。それよりも、ノネット達は大丈夫なのか」

腕時計に目を落とすと20分が経過している、約束の時間は過ぎただけだ……。

「とりあえず、ジノとエルンスト卿は移動してください。あの2人は今から引っ張ってきます」

「OK、そんじゃあ行きましょうか、エルンスト卿」

「お前に先導されると、何だか癪に障るな」

「……最近、私に対する扱いが本当に酷いよな」

ジノの言葉には全面的に賛成するけど、自業自得な気がするので放っておく。

“ R Z A - 3 F 9 T r i s t a n ”

“ R Z A - 4 I N E l e v a t o ”

フロートユニットを展開し、軽やかに上昇していく2機。

シミュレーターで空中機動訓練を実施した際にエルンスト卿は悲惨な結果だったが、さすがに慣れたらしい。

シミュレートが終わった後のエルンスト卿は本当に怖かったけど……。

「さて、ノネットさん達を呼びに」

「その必要は無いみたいよ」

「走ってきてる」

入口に目を向けると、こちらに向かって走ってくる3人の姿が見える。

もう少し時間に余裕を持って行動できないものなんだろうか。

「よし、セーフだな！」

「いや、アウトですから」

腕時計をノネットさんに見える形で突きつける。

経過時間は25分、約束の時間は20分だったんだけどね。

「細かいことは気にするな。それに、道中で御前試合のルールも説明しておいたぞ」

「……アッシュフォード、枢木、本当に説明受けた？」

「はい、確かに説明は受けました」

「とても簡潔な説明でしたけど……」

「分かりやすい説明をしてやったからな！」

どんな説明をしたのがとても気になるのだが、追及する時間も勿体ないので直ぐに機体に乗ってもらおう。

“Z-01/A Lancelot Air Cavalry”

“ Z - 01 / B L a n c e l o t C l u b A i r G u n
n e r ”

白を基調とした鮮やかな機体が、先程の2機と同じく軽やかに空へと舞い上がる。

他のラウンズの機体とは違い、技研の管轄下ではないので今後も触れる機会は無さそうなのが少し残念。

そういえば、あの2機は形式番号の変更をしなくて良いんだろうか？

ラウンズには“ R Z A ”という専用の形式番号が割り振られるのだけど……。

「さて、私達も移動しましょう？」

「新しいの記録終了、移動する」

「ライや枢木の勇姿を見届けてやらねばならんからな」

「面倒だけど移動しますか……アスプルンド伯爵とクルーミー中尉も一緒に如何です？」

「残念だけど、遠慮しておこうかなあ。 セシル君が怖いしねえ？」

「ロイドさん、貴方はまた」

「……私達はこれで失礼します」

また説教が始まりそうな状況だったので、アーニヤとモニカ、それにノネットさんを連れて急いで立ち去る。

後ろを振り返ると、土下座しているアスプルンド伯爵の姿が見えたが、何時もの事だよね。

新人が不利と言われている御前試合、さてどういう試合になるかな？

Chapter 08 - Investiture END

続くように見せかけて、ここで終わりです。

最初は御前試合の様子を書こうとしたのですが、戦闘シーンの描写で挫折しましたorz

ライのスペルって、どれが適切なんでしょうね？

“ Rye ” “ Rai ” “ Lai ” “ Li ” 取り敢えず “ Rai ” を使っておきます。

今後の予定 (あくまで予定)

Chapter 09 - Rai Ashford
Chapter 10 - Kururugi Suzaku
Chapter 11 - Schneizel el Brit
annia

Chapter 11はシュナイゼル殿下とお茶会をする話になる予定、嫌味の言い合い？

モニカとの出会いなどを書いたら良いなあと考えていますが、どうなるかな？

前回予告した通り、次回の更新は“おそらく”遅れます。

私の場合、勢いで書く人なので突然更新するかもしれませんが……不定期更新という事ですね。

誤解を恐れずに言うならば、ラウンズは基本的に暇だ。

通常の指揮系統に属さず皇帝陛下の命でのみ動くという特性上、陛下からの言葉がない限りは本国待機である。

例外として、陛下の警護を行うヴァルトシュタイン卿やモニカ、ETRLでの仕事がある私という存在もあるのだけだ。

そんな暇を持て余したメンバーがよく訪れるのが、ここシミュレーションルームだ。

戦術シミュレーションなどでも利用されるが、KMFでの仮想訓練に使われる事が多い。

場所柄ゆえに使用するのはラウンズだけである事から、シミュレーターには各自の専用機のほか次期量産機の候補である“ヴィンセント”や“ガレス”などのデータも入力されており、ブリタニア全土で最も充実したシミュレーションが行える場所である。

ちなみに、最近では何を思ったのかブラッドリー卿が直属部隊である“グラウサム・ヴァルキリエ隊”を連れて来て訓練をさせた事がある。

ガチガチに固まって緊張した様子を見せるマリーカや、居心地悪そうにしているリーライナなど、見ていて面白かったので再び実施してくれると楽しそうなんだけど、予定とか無いのだろうか？

「 こんにちは」

妙な思考をしていたせいか、誰かが入室してきたことに気づかなかつたらしい。

入り口へと目を向け、入室してきた彼を視界に収める。

先日どこかの誰かが、全体的に私と色合いが似ていると言っていたが、こうして見ると確かに似ている気がする。

唯一違つ点といえば、瞳の色だろうか。

私が青色であるのに対して、彼は紫色に近い。

「 こんにちは……珍しいな」

「 何度か来たこと有りますよ?」

「 そうじゃなくて、君が1人で居る事が珍しいという意味だ」

「 僕は常に誰かと一緒に居るイメージなんですか……」

「 大抵は誰かと一緒だと思うけど?」

「 ……まあ、確かにその通りかもしれませんが」

ちなみに彼こと、ライ・アッシュフォードは1ヶ月程前にナイトオブラウンズへと就任したばかりだ。

彼と同時にラウンズへと就任した枢木と同じく交友関係とか大丈夫なんだろうかと、他人事のように思っていたのだが、ノネットさんと旧知だった事は良い方向に働いたらしい。

今では元々の同僚である枢木や旧知であるノネットさんに加えて、ジノやアーニヤなどと仲良く歓談している姿を見かける。

そういえば、面白いといっっては失礼だけど、ブラッドリー卿の反応も少し興味深いものがあった。

枢木には明らかに敵意を持って接しているのだが、アッシュフォードには友好的な反応を返している。

あの反応は私に対する反応と同じようなものに見えるので、きっと同類意識のような物を感じているのだと推測できるけど、アッシュフォードに対して感じている同類意識というものが少し気になる。

私の場合は躊躇苦なくコックピットを狙える事、つまりは躊躇なく人の命を奪えるという点に共感しているのだと分かる。

けれど、アッシュフォードは過去のデータを見る限り、“敢えて”コックピット避ける傾向がある。

その行動から考えられるのは、人の死というものを酷く嫌っているという事だろう。

そんな人物に、ブラッドリー卿が同類意識を感じる要素が果たし

て存在するのだろうか？

「 ウィンスレット卿、どうかしましたか？ 」

「 いや、少し考え事をしていただけだ 」

「 考え事……ですか 」

「 まあ、大したことでは無い。 …… そういえば、最近アーニヤと仲が良いらしいな？ 」

自分の事ながら、話題転換が下手だと実感する。

唐突すぎる上に、何故こんな話題を選んできましたんだらうか…
…。

「 …… ウィンスレット卿から見ても、そう見えるんですね 」

「 その言い方だと、他からも言われた経験があるのか？ 」

「 ジノとノネットさんから笑顔で言われました……何か含むものがありそうな言い方でしたけど 」

「 …… あの2人については諦める。 最近では少なくなったが、私も色々と言われていたからな 」

「 ウィンスレット卿が、ですか？ 」

「意外そうだな？ 私の場合はモニカとの事で色々だね」

「クルシエフスキー卿でしたか。 そうですね、一緒に居る姿をよく見掛ける気がします」

確かに一緒に居る事が多いので、誤解を招きやすい関係性である事は認めるが、そういう関係では無い。

お互いに数少ない気心知れた相手である為なのか、一緒に居るのが自然になんだよね。

「……ウインスレット卿、仮定の話をして良いでしょうか？」

「相談相手として、私はあまり適切では無いと思うけど……それで構わないなら」

「はい、あくまでも仮定の話ですからね？」

「分かってるよ」

「……誰かと誰かがお互いに好きになったとして恋人関係に、つまりは交際すべきだと思いますか？」

「お互いに好きなら、そうなるのが自然だと思うが」

「職業が軍人でも、ですか？」

軍人だから嫌なんている女性は、ブリタニアにおいてはあまり居ないと思うのだが……。

他国がどうなのかは知らないが、ブリタニアでは軍人の社会的地位は比較的高めだ。

それ故に軍人という職業は人気のある職業であり、優秀な軍人を輩出した家系は優秀な家系と認識されやすい。

いざ軍に入ると、厳しさに耐えきれず辞めてしまふ連中もそれに多いのだけだ。

「その言葉は二通りの意味に取れるのだけど、どちらの意味？」

「ええっと……」

「ひとつは、他者の命を奪う立場に居る自分が誰かを愛しているかという事。 2つ目は、何時相手を置いて死んでしまつかもわからない自分が特別な相手を作っているのか、というものなんだけど」

「2つ目の意味で聞いたつもりです。 1つ目の意味も多少はありますが……」

「1つ目は相手の職業にもよるだろう、相手も軍人だったら何ら問題は無いのだろうけど」

「……」

「相手が医療関係者の場合、価値観の違いが有るかもしれないけどね」

「……」

軍人は災害復旧などにも関わるとはいえ、究極的な目的は敵軍を倒すこと。

医療関係者の目的は、命を救うこと

命を奪うものと、命を助けるもの。

この差は埋めづらいものだろうと私は思っている。

世の中には、そういった価値観の違いを乗り越えている人も大勢居るんだろうけどね。

「2つ目については、悩む必要性が分からない」

「……相手を残して、先に死んでしまふんですよ？」

「軍人に限った話では無いだろう？ 事件・事故・病気、たとえ前線に居なくても可能性は幾らでも転がっているじゃないか」

「予め覚悟を決めている軍人と、一般人では違いませんか？」

「経緯はどうかあれ結果は同じだよ、“死”を迎えることに変わりはない」

ない」

「……………」

「まあ、その辺は各自の考え方によるのかもね。“戦死”を名誉と考える者も居れば、死んでしまつては意味が無いと考える者も居る訳だし」

「ウインスレット卿は、どちらなのですか？」

「私は後者だな、名誉の戦死は理解し難い」

「そう……………ですか」

「というか、君の場合は悩む必要があるのか？ 仮定の相手はアーニヤなんだろう？」

アーニヤ以外だとノネットさんが候補に挙がるかもしれないが、あの人はそういう対象としては見ない気がする。

仲の良い姉と弟といった感じだろうか？

……………アーニヤとの関係性も兄と妹のように見えるんだけどね。

「えっ、いや、違いますよ？」

「“仮に”とか“友達が”とかの発言は、大抵本人が誤魔化すために使うものだと思うんだけど」

「いえ、本当に違いますからね？」

「……まあ、良い。この手の話題は面倒な事になりそうだし、この辺りで打ち切るとしよう」

「最初にこの話題を振ったのはウインスレット卿だった気が……」

「私も話題の選択が不味かったのは理解しているよ」

私の場合、他人と積極的に関わるタイプではないので会話に困る事が時々ある。

相手側から話題を振ってくれると助かるのだけど、こちらから話題を出さないといけない場合は非常に苦労するのだ。

……これだから、コミュニケーション能力に欠けているとか言われるのだろうけど、今更治す気も無い。

「そういえば、何か用事があって此処に来たんじゃないのか？」

「……あっ、ウィンズレット卿に質問する為に色々と探し回っていたんです」

「答えられる範囲なら構わないけど」

「桜って知っていますか？」

「サクラ……チェリー・ブロッサムの和名だったかな。エリア1
1では国花扱いだったらしいし、枢木に聞いた方がいいと思うけど」

「ブリタニア本国には桜があるのかなと思いついて、スザクはブリ
タニア本国の事を知らないですし」

冬を超えて暖かくなってくると桃色の花を咲かせるが、僅か2週
間ほどで散ってしまう品種。

知識としては、この程度の認識しか無いが、実物は確かに綺麗な
ものだった。

花卉が風により散っていく様は、まるで夢の中に居るようで不思
議な場所だったのを覚えている。

「昔、まだサクラダイトの問題で対立していなかった頃の話なんだ
けど、エリア11・旧国名日本からサクラが寄贈された事がある」

「……」

「寄贈されたサクラはタイダルベイスンの周囲に植えてあって、開花時期に合わせてお祭りもやってるから割と有名だと思うよ」

「ジノやアーニヤは知らないみたいでしたけど……」

「あの2人は一応、良家の出だから世俗的な事はあるけど知らないのかも」

「あはは……でも、ブリタニア本国に桜があったのは嬉しいですね」

「今更だが、何故サクラが有るのかなんて聞いたんだ？」

ブリタニア人にとっては、サクラはそこまで有名な花ではない。

いや、アッシュフォードは元々エリア11に居たのだからサクラを見る機会が有ったのか？

「エリア11に折り紙という文化があるんですが、知っていますか？」

「知識としてはひと通り知っているつもりだけど」

一時期、暇つぶしの手段として折り紙に挑戦した事がある。

平面の紙から立体物を作るのは正直楽しかった。

特に“仕掛け折り紙”と呼ばれる物には、年甲斐もなくワクワク

した覚えがある。

……今でも作れるだろうか？

「折り紙の中に桜を模したものが有るんです」

そう言って取り出したのは、ピンク色の物体。

いや、アッシュフォードの言葉を信じるなら、サクラを模した物のだろう。

「……それで？」

「この桜を見てると、何だか懐かしい気分になるんです」

「懐かしい……それは、君の記憶に関係しているって事？」

「おそらく、何か関係があるんだと思います。ただ、エリア11では実物の桜を見ることが叶わなかったのです……」

「それで、こっちでサクラを見られないかと探していた、という事か」

そういえば、彼は記憶喪失なんだよね。

正直な話、既に諦めているものだと思っていたのだけど……。

「そういうことです。……タイダルベイスンって此処から近いですよね？」

「車で移動すれば大した時間が掛からないけど」

「成程……今から行っても大丈夫そうですね。ウインスレット卿、色々とお難う御座いました！」

そう言い残して出て行くアッシュフォードを呆然と見送る。

急にテンションが上がったのには少し驚いたが、それよりも一つ問題がある。

……サクラの開花は“春”　そしてブリタニア本国の今の季節は“秋”なんだ。

後日、大笑いするジノとノネットさんを見掛けた。

近くには、不機嫌そうなアッシュフォードと、苦笑を浮かべる枢木、相変わらず携帯を構えるアーニヤの姿もある。

一体何の騒ぎなのかと聞いてみると、“サクラ”を見に行つたときの失敗で笑っているらしい。

アッシュフォードに哀れみの視線を送ると、教えてくれても良いじゃないですかと拗ねたように言われた。

教えるも何も、いきなり飛び出して行つたのは君だろうと指摘したら、自覚があるらしく大人しくなった。

……それだけ“サクラ”が気になったのだろうけど、少しは反省して落ち着いた行動をして欲しいな。

Chapter 09 - Lie Ashford (後書き)

遅くなると予告していたのに、何故か投稿してる件。
前回投稿から2日しか経過してない……

とりあえず、ライのスペルは「Lie」に決定しました。
ご意見くださった方には、この場でお礼を申し上げます。

今回の話は、実は2回書き直しています。

・1回目

ノネットさんとライ、そして主人公の3人での会話。
やけに暗い性格のライが出来上がってしまったので、没になりました。

・2回目

今度は妙にシリアスな展開になったので、また没に。

・3回目 (この話)

折り紙と桜を題材に書くのは決定していましたが、いざ書くと分量
が足りない。

そこで、2回目の文章を簡素化して前半部分として付け加えてみる。
おかげで纏まりの無い文章になっていますが、分量的には丁度いい
筈です。

次の話である「Chapter 10 - Kururugis Uzaku」は今度こそ、遅くなりません。

書き始めていませんし、話の展開すら未だに考え付いていないので

……

「Chapter 11」の方は既に展開も考えてあるので、こっちの方が先に終わる？」

「ご意見・ご感想、よろしくお願いします。」

人は生まれを選べない。

生まれも育ちも才能も、人間は皆違っている。

この世界には“ナンバーズ”と呼ばれ、蔑まれる民族が存在する。

正確に言えば、ブリタニアの支配下に置かれた国の民族を数字で呼称しているだけなのだが。

エリア11の場合は、本来の“日本人”ではなく“イレヴン”と呼ばれるように、エリアナンバーを用いる。

階級制度では最下層に位置する彼らは、移動に関しても厳しく制限されており、他国や他のエリアへと移動する事は出来ない。

勿論、ブリタニア本国への移動など論外である。

そんな底辺から、皇帝直属の騎士という荣誉ある立場に上り詰めた者が居る。

“ 枢木スザク ”

神聖ブリタニア帝国 元第3皇女 ユーフェミア・リ・ブリタニアの専任騎士。

そして、ナイトオブセブンという地位を授かった、ラウンズ初のナンバーズ出身者。

実力と忠誠のみが問われる立場とはいえ、ナンバーズ出身者が本国の土を踏み、皇帝陛下に認められる等、一体誰が予想しただろうか。

私も聞かされたときには何かの間違いじゃないのかと、聞き返した程だ。

実力と功績によってラウンズへと上り詰めた枢木であるが、周囲の評価は未だに冷やかだ。

大半の皇族は彼を歓迎してないし、貴族もそれは同じ。

直接の同僚となるラウンズでも意見が分かれている。

友好的な態度を見せるのが、ジノ・アーニヤ・ノネットさん、そして新人のアッシュフォードの4人。

若干の距離を置いているのが、ヴァルトシュタイン卿・エルンスト卿・モニカ、そして私の4人。

私の場合は、大した興味が湧かないだけで良くも悪くも思っていないのだが、ヴァルトシュタイン卿は何かを疑うような、悪い言い方をすれば監視するような目で枢木を見ていることがある。

エルンスト卿とモニカは、ブリタニア人では無いという点が問題らしく、距離を置いてあまり関わらない様にしていく。

2人とも純血主義者という訳ではないのだが、やはりナンバーズ出身者という点が距離を置かせる要因だろうか？

そして、露骨なまでに敵意を見せているのがブラッドリー卿だ。

枢木への反応を見ていて思ったのだが、ブラッドリー卿は“血統”に拘りがあるのか無いのかがよく分からない。

ジノやモニカに対して“家柄だけ”と発言しており、血統に優劣など無いと言ったかと思えば、枢木に対しては“イレヴン”と蔑しみ、血統が大事だといった意味合いの発言をする。

ブリタニア人とナンバーズは区別する、けれどブリタニア人の中では優劣は無い、という考えであっているのだろうか？

……あの人の思考を論理的に考えても無駄な気がするのだけどね。

意外に思うかもしれないが、ブリタニア人は自然を大事にする傾

向がある。

特に皇宮や離宮は何処であろうと例外無く庭園が整備されており、自然に溢れるつくりとなっている。

その影響からなのか、私達ラウンズの拠点の付近にも立派な庭園、通称・アンブロジウス庭園が備えられている。

ただし、私以外で利用している人間をモニカ以外に見掛けた事が無いので、有効活用されているかと言われれば疑問符を付けざるを得ないのだが。

そんな無駄な場所扱いかねないアンブロジウス庭園であるが、最近私以外の人の姿を見掛ける事がある。

アッシュフォードと枢木、あとオマケの3人だ。

オマケ3人は兎も角として、アッシュフォードと枢木は庭園を散策したり日向ぼっこらしきものをしていたり結構有効活用しているようだ。

外から買ってきた飲み物を2つ、手に持ちながら庭園の中央に位置するベンチへと足を向ける。

先程会ったアーニヤから枢木が此処に居るとい話を聞いたので、こうして会いに来ている訳だ。

歩くこと数分、ベンチに背を預け空を見上げている枢木の姿が見

えた。

ゆっくりと近づいていくと、さすがに気付いたらしく戸惑ったよ
うな表情を此方に向けてくる。

「ウインスレット卿？」

「こんにちは、枢木。 はい、どうぞ」

人を選ばない飲み物として、缶コーヒーを選んでみたのだが、枢
木の反応が思わしくない。

お茶の方が良かったのだろうか。

「えっと、これは？」

「缶コーヒー」

「……」

「少し聞きたいことが有ってね。 その対価かな？」

「……頂いておきます」

釈然としない表情を浮かべる枢木に缶コーヒーを渡し、私も対面
のベンチに座る。

そういえば、枢木と2人きりになるのはこれが初めてかもしれない。

特別気に掛ける相手でも無いし、積極的に接触を持たなかったのは私の方なのだけだ。

「それで、聞いていいかな？」

「……答えられる事ならば」

「そんなに身構えなくてもいいよ。同僚との人間関係を聞きたいだけだから」

「人間関係ですか？」

「そう、誰と仲が良くて、誰と仲が悪いのかという話。推測は出来るんだけど、直接本人に聞いた方が確実かなと思ってね」

端的に言えば答え合わせをしたいのだが、口に出す気は無い。

推測が合っているようが間違っているようが、何か変わる訳ではないけどね。

「仲が悪い相手なら、すぐにも思いつきますが」

「ブラッドリー卿だよな」

「見ていて分かるものですか？」

「あれだけ露骨に敵意を見せていれば流石に気付くね。……言っても無駄かもしれないけど、ブラッドリー卿の発言は冗談半分で聞き流した方がいいかもよ？」

「……一応、先輩に当たる方ですよ」

「別に失礼な態度を取れと言っている訳じゃない。ただ、ブラッドリー卿はあの性格だから、真面目に話をしてあまり意味が無いって言いたいだけだよ」

「気に留めておきます」

あまり効果は無さそうだけど、一応の忠告はしておく。

ブラッドリー卿も仲良くしてくれとは言わないけど、もう少しだけ協調性というものを持ってほしい。

ジノ・アーニヤ・アッシュフォード・枢木・モニカ、計5人から敵視されている現状は流石に宜しくないだろうし。

「次、先程とは逆に仲が良いのは、同じ所属だったアッシュフォード、面識があったノネットさん、あとオマケでジノとアーニヤ、この4人で合ってる？」

「……ノネットさんには気にかけてもらっていますし、ジノやアー

「ニヤにも色々助けられていますから、合っていると思います」

「そういえば、繋がりがあった前者2人は兎も角として、ジノとア
ーニヤは何時から親しくなったの？」

「御前試合が終わった後……だと思います。 やけに親しく接して
きたので正直戸惑いましたけど」

「そういえば、ジノは妙な持論を持っていたけど、枢木がそれに当
てはまったということなのだろうか？」

戦闘データや某伯爵の話を聞く限り、アッシュフォードと同じく
人が死ぬ事を極端に嫌うようだし、“弱い奴”という認識も確かに
間違っていないのだろうけど、この2人は何処か違和感がある。

一部の例外を除いて、人間が“死”を嫌うのは当たり前なのだが、
この2人の場合は潔癖と言ってもいいぐらいの反応を見せる場合が
あるらしい。

軍役に就く前に自分の身近で“死”を体験した故にそういった面
が生まれた可能性が高そうではあるけど、さすがにプライベートに
まで踏み込む訳にいけないので思考を打ち切る。

「まあ、ジノだしね……。これが最後の質問、良くもないし悪く
もない相手は、私も含めて残りの4人？」

「……本人の前で言うのも何なのですが、確かに4人とはあまり会
話をした事が無いですね」

「私とヴァルトシュタイン卿は置いておくとして、エルンスト卿やモニカとは会話した？」

「いいえ、唯一会話らしいのは自己紹介の時だけですな」

ヴァルトシュタイン卿は、あの視線からして期待しない方が良さだろっけど……。

碌に会話を交わしていないということは、エルンスト卿にしてもモニカにしても、距離を置くのは確定事項といった感じが。

エルンスト卿の場合、ラウンズの中ではプライドが高いタイプなので幾ら皇帝陛下が決めた事といえどナンバーズ出身者である枢木の存在を受け入れ難いのもかもしれない。

……あれ、モニカが距離を置く理由は何だろう？

「……枢木が悪い訳では無いんだろっけど、同僚とはあまり険悪な関係にならないでくれよ？ 既に手遅れなメンバーも居るのだけだ

……」

「善処はしてみますが……」

「まあ、ブリタニア本国では色々難しいかもね」

「……」

あまり言いたくは無いが、人種が違う。

どんなに成果を上げて、色眼鏡で見られるのは確実だろう。

圧倒的な成果でも見せつけければ、そういった連中を黙らせる事も可能かもしれないが正直現実的では無い。

「ねえ、答えたくなかったら良いんだけど、君はどうして軍人になったの？」

「……以前、ロイドさんにも同じ事を聞かれました」

人の“死”を極端に嫌うなら、医者にもなれば良い。

“命”を奪う機会が多い軍人とは違って、“命”を救う側である医者なら精神的にも楽なんじゃないだろうか。

「あの人と同じ事を質問したのか……それで、答えてくれる？」

「人を死なせたくないからです」

「……私達は軍人で、戦場では成果を求められる立場だって事を理解してる？」

「分かっています。けれど、力が無ければ守れないものもあります」

国の為に、大事な人の為にと思い、軍人となる。

実に立派な意見であり否定するべき点はない。

だが

「ここはブリタニア、そして君はブリタニア人では無い。……軍人になるというのはブリタニアの為に戦う事と同義だよ?」

「それは」

「いや、やっぱり止めた」

「はい?」

「お客さんも来たみたいだし、この辺りで失礼するよ」

「え? ちょっと」

背後から掛けられる声を無視して、そそくさとその場から立ち去る。

私が来たのとは反対方向から、ジノとアツシユフォードが向かってきていたので私を追いかけてくる事は無いだろう。

それにしても……今後は枢木を正面から見るのは止めて置いた方

が良いかもしれない。

あの昏い光を宿した眼は、見ていて不愉快にしか感じない。

あんな眼をしている理由は大方、元皇女殿下とゼロの事なのだろうけど……

「変に好奇心を発揮しなければ良かった……」

N D Chapter 10 - Kururugi Suzaku E

自分で書いておいてどうかと思うのですが、結局のところ主人公は何が言いたいのでしょうね？

そういえば、私は世間一般の評価が悪いスザクの事が嫌いではありません。

これはスザクの事を特別好きという訳ではなくて、私の中でルルシーユの評価が良くないので相対的にスザクへの評価が高めになるせいだと思います。

作中の“アンブロジウス庭園”は勝手に作ったもので公式設定ではないのであしからず。

名前の元ネタは“Merlin Ambrosius”、円卓の騎士といったらこの人も欠かせませんよね。

予想していたよりも時間が取れない事が判明したので、今後のスケジュールが……

とりあえず、次回のChapter 11に関しては6月中に投稿出来る筈ですが、それ以降は……月単位でも怒らないでください
ね？

聞こえてくるのは、風の音と小鳥の囀る声だけ。

世間から隔絶された空間と言っても過言ではない、この場所で、私はとある人物と対面している。

「……どうして、私はここに居るのでしょうか？」

「私が招いたからだよ」

白いテーブルと、白いイス、そして周囲に広がる白い花々。

この人にはお似合いともいえる程に“白”が溢れているが、目の前の人物にとつての“白”とはどんな意味なのだろうか？

穢れを知らない無垢な色なのか、それとも全ての色を覆い隠してしまう色なのか。

後者に関しては“黒”でも妥当な気がしなくてもないが、深く考えても仕方の無いことかな。

「それで、ご用件は？」

「君とゆっくりと話したかったから、という理由で如何かな？」

「その理由も聞き飽きましたか……今日はどんなお話がお望みなのでしょうか」

「ふむ……クルシエフスキー卿の事かな」

「……モニカに興味があるのですか？」

どこかの伯爵と同じく、女性への興味など無いと思っていたのだが……。

第2皇子であり帝国宰相の立場についている人物ならば、それこそ掃いて捨てるぐらいに女性からのアプローチが有る筈であり、言いは悪いが相手には困らないと予想していただけに少しだけ驚きを感じる。

「そうだね、興味がある。ただ」

「何です？」

「誤解しないで欲しいのだが、君が考えているような意味合いではないよ。私は、君が興味を示す相手がどんな人物なのかを知りたいだけだから」

「モニカという個人に興味がある訳ではないと？」

「そういうことだね。だから、そんなに警戒しないで欲しいな」

「……別に警戒している訳ではありませんが」

「ふふ、そういうことにおこづか」

穏やかな笑みを見せながら、こちらを見てくる殿下に僅かな苛立ちを感じる。

他人に自分の心境を見透かされるのは、やっぱり苛立ちが募るものだ。

私も人の事は言えない気がするけど。

……それに、別に嫉妬している訳じゃない。

私の数少ない友人のお相手として、この人は辞めてほしいと思っているだけだ。

「結局、何が知りたいのです？」

「君とクルシエフスキー卿の出会いを知りたいね。君の性格からして行動を起こしたのはクルシエフスキー卿だろうけど」

「……端的に言えば、最悪でしたよ」

「何がだい？」

「私のモニカに対する第一印象です」

「……冗談かな？」

「いえ、本当です。私のモニカに対する印象は最悪でした」

「逆なら納得できるのだけど……」

「気持ちは分かりますけど、失礼ですね？」

まあ、言いたい事は分かる。

私が人に悪印象を与える光景は簡単に想像できるだろうが、モニカのそういう光景は想像し難い。

容姿からして大人しいお嬢様の印象を抱かせるし、他人への対応も丁寧なので、そう思うことは何ら不思議ではないのだけど。

「あんな行動を取られれば、誰だって悪印象を持ちますよ」

「……一体どんな行動を取ったんだい？」

「ええ、いきなり」

「 掴み掛っちゃったのよね」

「 は？」

「 掴み掛った？」

ゆったりとした雰囲気の中、紅茶を楽しみながら取り留めのない会話を交わす。

アーニヤが不在なのが悔やまれるが、女だけのお茶会を楽しんでいると、話題が私とユーリの事に及んでいた。

「 …… モニカがユーリに掴み掛ったんだよね？」

「 ええ、私が掴み掛ったのよ。 今考えると、あの行動はやりすぎだったなあと思うけど」

「 …… クルシエフスキー、実は随分とアグレッシブなんだな。 私はお前の事を見誤っていたのかもしれない」

「 いや、そんなに真剣に考察されても困るんですけど……」

あの時は完全に勢いで行動していたから、普段なら取らないような行動をしていたのよね。

でも、あれは仕方の無い事だと思う。

あれだけの成績を収めておきながら、騎士になるつもりは無いなんて発言をする、ユーリが悪い。

「ドロデアの意見は置いておくとして、何でそんな状況になったんだ？」

「確かに、ウインスレットは自ら問題行動を起こすほど行動的でも無いだろう？」

2人の中でのユーリの印象がどうなっているのか少し聞いてみたけれど、今は置いておく。

「えっと、士官学校だと入学した直後に試験があるって知ってる？」

「……そういえば、私の時にもそんなものがあつた気がするな」

「私も経験がある。筆記と実技の総合得点を算出して上位10人を公表する奴だろう？」

士官学校全てに共通しているかは知らないが、私達が在学していた学校は入学直後に一斉試験が行われる。

学科を問わず一律に同一内容での試験を執り行つたため、一部の学

科生に有利とも言われるが、私としては自分や周りの能力を把握できる事から良いタイミングでの試験だと思っている。

ただし、実技試験の存在がある為、成績上位者は騎士課程の学生で占められるのが通例となっているらしい。

試験内容は筆記と実技の2種類。

筆記は一般教養が6割、専門が4割の比率で作成されているが、専門とは言っても多少の知識があれば解ける程度のレベルであり、あまり意味の無い区分ではある。

問題なのは、実技として行われる、シミュレーターを用いたKM Fの操縦試験だ。

このテストは騎士課程の学生にとって有利な試験になっている。

騎士課程へと入学している者は、大抵シミュレーターでの操縦経験がある者達であるため、基本的な動作には不自由しない。

対して、その他の課程で入学してきている学生は、シミュレーターでの訓練経験がない為、歩行すら覚束ない有様なのも珍しくないらしい。

私も例に漏れず、シミュレーターでの操縦経験が豊富にあった為、実技試験は完璧な内容で終了している。

「まあ試験内容はどうでもいいのよ。問題なのは、その結果が発表された時なの」

「やっぱり、モニカが1位だったわね」

「やっぱりって、何よ？」

先日行われた試験結果が各クラスで配布された。

これには個人の点数しか書かれていないため、全体でどの程度の順位なのかを把握する事は出来ない。

ただし、総合成績上位10人の氏名と点数、そして筆記・実技・総合得点の平均点は公表される為、私達はそれを見に来ている。

「いや、友人と賭けをしていたのよ。モニカが1位を取れるかどうかって」

「人を勝手に賭けの対象にしないでくれる？」

「あはは、ごめんね」

「まったく……」

人の成績で賭けなんて失礼な事をするものだなと思いつつながら、改めて公表された順位を見てみる。

この友人には悪いが、1位になった事にあまり嬉しさは無い。

第1位 「総合：198 筆記：98 実技：100」 モニ
カ・クルシェフスキー （騎士課程）

第2位 「総合：196 筆記：100 実技：96」 ユー
リ・ウインスレット （一般課程）

第3位 「総合：178 筆記：89 実技：89」 アステ
イア・ローグライア （騎士課程）

第4位 「総合：176 筆記：86 実技：90」 リリシ
ア・グッドウィン （騎士課程）

第5位 「総合：164 筆記：84 実技：84」 ラステ
イ・アルヴァレス （騎士課程）

・ ・ ・ ・ ・

「……あら、2位とは殆ど点差が無いのね」

「本当だ、2人だけ別格って感じの点数だね」

先程は気付かなかったが、2位との差は僅か2点。

何か一つでもミスしていれば順位が変わっていただろう。

その事実には喜びを覚えた、もちろん表情には出さないが。

自信過剰とも言われるかもしれないが、昔から何でもそつなくこなしてしまうタイプの私は正直今の日常に飽きていたのだ。

私より、武勇に優れた人物も、知識の豊富な人物が居るのも知っている。

けれど、同年代で私と競える人物に会ったことは無かった。

両親に連れられて出席した煌びやかなパーティーでも、貴族の子女が通う学校でも、会う人物は全て私の期待を裏切ってきた。

自分が特別に優れた存在だと思っている訳ではないが、物足りない日常を送ってきたのは事実だ。

両親の反対を押し切って入学した士官学校でも、変わり映えのない毎日を過ごすのだろうかと思っていた矢先に、これだ。

喜ばすにはいられない。

けれど、何か引っかかる。

他の3人はしっかりと顔も思い出せるが、何故彼だけ顔が思い出せない？

この一覧表にも違和感を覚えるが、それ以前に私のクラスにユリ・ウインスレットなる人物は居ただろうか？

「モニカ、どうかしたの？」

「いや、2位の人顔がどうしても思い出せなくて……」

「それは当然じゃない」

「当然って、どういう意味なのよ？」

「課程が違うんだから、会った事無い筈よ」

その言葉に一瞬思考が止まるが、慌てて一覧表を確認する。

どう見ても、何度見ても、私とは別クラスの一般課程の学生だ。

「どっして……」

「おーい？ モニカ、聞ってる？」

横から声が掛けられているが、あえて無視する。

けれど、どういふこと？

騎士課程の生徒を抑えて、総合2位にランクインしている人物が、何故に騎士課程に在籍していない？

「……………」

「はあ、聞いてないし……………あ、アステイアー！」

「……………」

「大声で人の名前を呼ばないでください！」

「まあまあ、落ち着いて」

「誰のせいですか！」

「さあ？ それは置いておくとして、3位入賞おめでとう」

「もういいです……………あと、3位入賞って言葉はあまり嬉しくないです」

「あらら、モニカと同じような反応だなあ」

「モニカさんが総合1位なのは予想していましたが、まさかユ一

りさんが総合2位だなんて」

「この人の事知ってるの！」

何故、どうしてという考えから抜け出せなくなって考えがループしている所に、聞き逃せない発言が聞こえた。

思わず詰め寄ってしまったが、仕方が無い。知り合いならば何か知っているかもしれないのだから。

「ちょ、ちょっと落ち着いてください」

「モニカ、少し落ち着きなっ」

「……大丈夫、もう落ち着いたわ。それで、ユーリ・ウインスレットを知っているのよね？」

「えっ、ええ。確かに知ってますけど……」

「一般課程のどこに在籍してるの？ 今から詰問してくるから教えて」

「いや、詰問して……」

「えっと、情報工学科ですけど、今行っても多分会えませんか？」

「どっ……」

「先程、教官の方と一緒に校長室へと向かわれたようですから。おそらく、騎士課程への変更を要請されているんだと思いますが……」

「まあ、あの成績ならそうなるよねえ」

実技試験で96点なんて点数を叩きだせば、騎士課程の方が向いていると思われるのが自然だ。

それにしても、彼が自信の実力を把握していなかったとも思えないし、どうして一般課程の学生として入学したんだろうか？

「……どうして言い淀んでいるの？」

「ユーリさんの性格なら、おそらく変更を拒否するんじゃないかと」

「あれだけ成績なのに？」

「ユーリさんは昔から優秀で、周囲からはアカデミーに通うと見られていたのですが、突然士官学校へと入学した経緯がありました……」

アカデミーへの入学を蹴って、士官学校へと入学。

両親からアカデミーへの入学を打診されて、それを蹴って士官学校に進んだ私と似たような経歴だったのね。

「でも、それだと騎士課程への変更を蹴る理由には為らないわよね？」

「えっと……目立つから嫌なんじゃないかと」

「はい？」

「というか、この成績で既に目立っているんじゃないかなあ」

騎士課程の学生が独占する上位者に、一般課程の学生が総合2位にランクインしたのだ。

どう考えても目立つし、注目を集めることは間違いない。

「まあ、そういう人ですから」

「なかなか個性的な人っぽいね」

「……校長室に向かったって行ったわよね？」

「はっ、はい」

「ちょっと、モニカ、何を」

友人の声をまたもや無視して、校長室へと向かう。

せつかく出会えた、私と競える存在なのだ。

これを逃したら一生会えないかもしれない、だから絶対に私の傍に居て貰うんだから。

「と、こんな感じの経緯で校長室に乗り込んできたらしいですね」

「……クルシエフスキー卿に持っていたイメージが変わりそうだよ」

「後で聞いた話ですけど、実に傍迷惑な思考していますよね」

「けれど、君はそれを受け入れたのだろうか？」

随分と昔の事のような気もしたのだが、僅か4、5年ほど前の事だ。

あの時の上位5人のうち、1人は既に戦死している。

士官学校の同期で、今でも交友関係が続いているのは、モニカを

除けばアステティアとリリシアの2人だけ。

リリシアと直接会話したのは1年以上前、アステティアも半年程前であり、モニカ以外とはあまり会えていないけど。

……モニカは微妙に勘違いしている節があるけど、私もそれなりの友人関係ぐらい持っている。

「受け入れたという表現が正しいのかは分かりませんがね」

「いや、正しいと思うよ。君はクルシェフスキー卿の存在を自分の中で許容したのさ」

「モニカの心境も分からない訳ではありませんでしたから。優秀故につまらない、殿下も体験された事でしょう？」

「ふふ、そうだね。……でも、どうして受け入れたんだい？」

「……どうしてなんでしょうね？ 私にもよく分かりません」

実際は其れなりの理由があるのだが、あえて教える必要も無いので適当に誤魔化しておく。

私らしくない理由だから、言いたくないというのも多少はあるけど。

「言いたくないならば構わないよ、残念だけどね」

「……お気遣いありがとうございます」

「どうして！ あなたの實力なら」

「私が何を希望しようが自由だろう、君に指図される謂れは無い」
呼び出された私を待っていたのは、校長と教官による騎士課程に
移動しないかとの説得。

元より騎士になりたかった訳ではない私は当然の如く、その要請
を断る。

何か目標がある訳じゃない、けれど士官学校への入学と一般課程
の選択は周りの意志ではなく私が選んだことだ。

その意志を否定するかのような要請は受け入れられない。

「ねえ、どうしてなの！？」

「だから」

要請を突っぱねた私は、もう用はないとばかりに校長室を出ようとしたところで、金髪の少女が突如部屋に乱入してきた。

教官のクルシエフスキーと呼ぶ声に、総合1位の名前と合致するなあとぼんやりと考えていたら、突然胸倉を掴みあげられて、現状に至っている。

彼女の口から出るのは、“どうして” “何故” といった言葉ばかりで、まるでわがままな子供だ。

私が一般課程に居る事が我慢ならぬらしいが、初対面の人間相手に何故こんなに必至なんだろう？

「私には、貴方しかしないの！」

「今日が初対面なんだけど。 とうか、私が一般課程に居る事の何が不満なの？」

いい加減に埒が明かないと思い、視線で助けを求めようとするも、既に大人2人の姿は部屋の中には無かった。

……まさかとは思うが、私達のこれを“痴話喧嘩”とでも思っ
て退出したなんて事は無いだろうか。

初対面の相手にいきなり怒鳴りつけて掴み掛ってくる、この少女を相手に？

「やっと……やっと見つけたの、やっと会えたのよ」

「……何？」

先程までの叫ぶような声から一転して静かになった少女を訝しげに見ていると、何かを決意した表情でこちらを見上げてくる。

子供のわがままのようだった先程までの雰囲気から、凛々しい大人のような雰囲気変わったことに若干気圧されながら、彼女の言葉を聞く。

「私は」

改めて思い返してみると、当時のモニカ言葉は一方的な理論で、私の事情なんて欠片も考えていなかった。

正直なところ、当時のモニカ言葉はあまり記憶には残っていない

い。

モニカ本人も最後の場面以外はあやふやな状態らしいし、一方的に詰め寄られていた私が覚えていなくても仕方が無いと思う。

……私の場合、覚えていない理由は最後の場面が衝撃的だったのが原因なんだけど。

潤んだ碧い瞳と、上気して赤く染まった頬、そんな表情を見せる少女がどうしようもないぐらいに綺麗に見えた。

「……君は、私を必要としているの？」

後から考えれば、妙なセリフを言ったものだと思う。

自分の意志で選んだこの場所で、私は誰かに必要とされたかったらしい。

そして何時もの私なら、そんな気持ちを表に出すことなどない筈なのに、この時は表情どころか口にしてしまった。

「うん、私は貴方が欲しい」

「……本気？」

「もちろん。私は貴方の全てが欲しいの、そして私の全てを貴方に上げる」

出会って、まだ1時間も経過していない状況で、このセリフだ。

冗談ではなく、本気で言っていることが分かるから尚更困る。

「……私が君を満足させられるかどうかも分からないの？」

「大丈夫よ、私が見込んだ相手だもの。逆に聞きたいけど、貴方は私で満足できる？」

「……君が私よりも上で有り続けてくれるなら」

「じゃあ、決定。私の名前はモニカ・クルシェフスキー、モニカと呼んでくれると嬉しいわ」

そう言って、手を差し出してくる少女に戸惑いながらも、同じように反応を返す。

「ユーリ・ウインスレット、そちらに習うならユーリと呼んでくれ

「構わない」

「うん、ユーリ」

可愛らしい笑顔を浮かべながら名前を呼んでくるモニカに、どう反応したものかと悩んでいると、再び私の手に触れてくる。

何をする気なのかと目線で問うと、にっこりと笑顔を浮かべながら答えてくれた。

「ユーリ、少し目を閉じていてくれない？」

「掴み掛られるのは御免なんだけど」

「いや、さっきのは私が悪かったけど……ちょっとした御まじないみたいなものだから、お願い出来ない？」

「はあ、分かった」

訝しみながらも、モニカの言葉に従って目を閉じる。

視界が塞がると同時に、ふわり甘い香りが漂って

「……ん、もう良いわよ」

自分の身に起きたことを整理しながら、ゆっくりと目を開けると、指で唇に触れながら頬を赤くしているモニカが視界に映る。

唇に触れた感触や、この仕草からして、私の勘違いという訳でもなさそう……。

「……一応、聞いておくけど何をした？」

「改めて、言葉にしなきゃ分からない？」

「……」

「私のファーストキス、約束の証よ」

「確かに、強く印象には残るけど……軽々しくする事でもないだろうっ？」

「その言い方は心外、正真正銘の初めてなんだから」

これがファーストキスというのも、どうかと思うけど、モニカは気にした様子も無い。

……モニカにキスされた事が嫌な訳ではないけど、女の子なんだから気にして欲しい。

「……はあ、なんか余分な責任を背負い込んだ気がする」

「ふふっ、責任取ってね？」

Chapter 11 - First impression
END

1つ目

私の技量不足のせいで、本文中のモニカさんが微妙に鬱陶しい感じのキャラになってますが、モニカさんの印象を悪くしないでくださいね？

一応釈明させてもらうと、当時のモニカは冷めていた&精神に余裕が無かったのです。

そんな時に、自分で競える相手であるユーリの存在にとっても喜びました。

モニカ本人は、ユーリの事をライバルとして認識していたのです。しかし、当のユーリは全くと言っていいぐらいにモニカに興味を示さない。

「自分だけ勝手にライバルだと思って、馬鹿みたいという」という心境と、それでもユーリが欲しいと想いが入り混じって、あんなわがままな子供みたいな言動になってしまったのです。

少なくとも、現在のモニカさんはちょっとお茶目な所がある素敵な女性です。

後付設定ですが、この辺で納得していただけると幸いです。

2つ目

実は、書き始めた当初は、もう少しコンパクトな話になる予定でした。

掴み掛られた事と最後のキスシーンだけに触れる予定だったので、あれも欲しい、これも欲しいと書き足していくうちに、過去最高の文章量になってしまっています。

加えて途中で書き足した文章が多いので、整合性が取れていない部分微妙に存在するのですが、その辺はスルーの方向で。

あと、今話は視点変更がやけに多くなっています。

“Side”などの表現を使うべきかとも思いましたが、ユリーとモニカの現在と過去で、合計4視点だから無くても読める筈……

ブリタニアの首都である、ペンドラゴンの夏はとても暑い。

平均最高気温は30 を超えており、都市排熱も相まって非常に過ごしにくい環境なのだ。

「やっぱり、海だよな！」

「……暑さで頭でもやられたのか？」

「良い病院探してあげる」

外は茹だるような暑さであるが、屋内にいる私達は空調のおかげで快適な生活を送っている。

科学文明万歳とでもいうべきか。

「ユーリもアーニヤも反応が辛辣過ぎる、夏なんだぞ？」

「当然の反応だと思うけど」

「同意」

少なくとも、いきなり立ち上がって“海だよな！”なんて叫ぶ奴

を正常だとは思えない。

それに、夏だから海というのは流石に安直すぎる。

「それで、海がどうしたのよ？」

「ジノの頭が心配なのは分かるが、確かに内容を聞いてからでも遅くは無いな」

話を聞く気も無かった私とアーニヤに変わって、モニカとノネツトさんが先を促すように言う。

……ヴァルトシユタイン卿以外のラウンズが揃い踏みしていると
いう珍しい状況なのに、話している話題がこんなものというのはブ
リタニアの未来を少し憂慮するべきなのかもしれない。

「今は夏で暑い、つまりはレジャーで英気を養うべきだと言いたい
んだ」

「……お前が遊びたいだけではないのか？」

「聞くまでもなく、そうだろうよ」

呆れた表情を浮かべるエルンスト卿と露骨に馬鹿にした口調で茶
化すブラッドリー卿。

元より好意的意見を返すとは思っていなかったが、ブラッドリー卿の反応が予想通り過ぎて少し楽しい。

「はあ、分かってない。士気とはとても重要な事なんだぞ」

「夏だから海という意見に異論は無いけど……」

「それ以前に、僕らの立場で海水浴なんてして良いのかな？」

意外に乗り気な枢木と、至極真つ当な指摘をするアッシュフォード。

軍人にも休暇は存在するが、私達にも同様の権利があるのかは不明だ。

そもそもラウンズの場合、役職を兼務したりしない限りは割と暇なので、空いた時間が休暇という扱いなのかもしれない。

「ライ、細かい事を気にしては駄目だ。それに気分転換は必要だろ？」

「確かにそうかもしれないけど……」

「よし、ならば直訴に行くか」

「おお、ノネットも賛成してくれるのか！」

「面白そうだからな、ジノ・ライ・枢木、ヴァルトシュタイン卿に直訴に行くぞ！」

「え？ いや、直訴って」

「……ライ、時には諦めるのも大事だと思うよ」

意気揚々と出ていく2人と、それに引きずられていくかのような2人を見送りながら、こつそりため息を吐く。

いつも通りと言えばそうなのだが、ジノとノネットさんが組むと大概面倒というか大事になる。

アッシュフォードの常識人っぷりが際立っていたが、同時に枢木には何があったのだろうか？

“諦めが大事”だなんて随分と悟ったような意見なんだけど……いや、ジノやノネットさんと一緒に居る事が多いから、必然的に悟らざるを得なかったのだろうか。

何にせよ、アッシュフォードにはご愁傷様と、そしてヴァルトシュタイン卿には頑張ってくださいと心の中で声を掛けておく。

無駄な事なんだろうけどね。

「アーニヤは一緒に行かなくて良かったの？」

「……どうして？」

「日頃、一緒に居るメンバーだろう」

「今は騒がしいから嫌」

相変わらずの素っ気ない反応を返してくれたアーニヤだが、時折入口に視線を向けているので多少は気にしているらしい。

先程までの騒ぎがまるで無かったかのように静まり返ったラウンジでは、アーニヤの持つ携帯の操作音だけが響く。

ブラッドリー卿は何故か大人しいし、エルンスト卿も静かにコーヒーを飲んでいる。

モニカは若干居心地悪そうにしている、時折こちらに視線を送ってくるが、あえて気付かない振りをしていると恨めしそうな視線を向けられた。

こつこつ反応を返してくれるから、モニカと一緒に居るのは楽しい。

「水着とか、買っておいた方がいいのかしら……」

「いきなり何を言ってる？」

あれから30分程待ったのだが、4人が一向に帰ってこなかったので勝手に解散。

執務室に戻り技研の仕事を片付ける私と何故か私の執務室で寛ぐモニカが居るが、今更気にしても仕方がないことか。

それにしても、最近は何事かを唐突に言う事が流行っているのだろうか？

そんな流行は迷惑極まりないから、すぐに辞めて欲しい。

「いや、海に行くなら水着は必須でしょう？ 私、水着って小さい頃のスクール指定のものしか持ってないのよね」

「まだ海に行くって決まってるだけ……」

「でも、準備は必要だと思っの」

そんなものに興味ありませんよといった態度だった割に、実は楽しみにしていたらしい。

この暑い中にわざわざ外に出で、何が楽しいのか理解に苦しむの

だけど。

「準備ねえ……女の子は毎年水着を買い替えるんだっけ？」

「普通は、そっらしいわね」

「つまり、モニカは普通じゃないと？」

「普通の子だったら、こんな立場に居ないわよ」

それもそうだと納得しながら、モニターに向けていた視線をモニカに移す。

腰の辺りまで伸びる長い髪、泳ぐ時はどうするのだろうか？

「……ねえ、さすがにじつと見られると恥ずかしいんだけど」

「笑みを浮かべながら言われても説得力に欠ける。仮に海に行くとしたら、その髪どうするの？」

「髪がとうしたの？」

「その長い髪を下ろしたままで泳ぐつもりなのかと聞いているんだけど」

「ああ、もちろん結うわよ。ほら、パイロットスーツ着ている時みたいに」

そう言って、前に流している髪のリボンを解き、後ろに流している髪と合わせて、両手で二つの髪の束を作る。

「こういう髪型はツインテール……とかいう名称だった気がする。」

「ほら、こんな感じに左右で一纏めにして後ろに流すの」

「態々、リボンを解いてまで説明しなくていいのに……」

髪を纏めていた両手を離すと、普段は見慣れない完全なストレートの状態になる。

リボンで留めていたにも変わらずクセが付いていないことから、普段から丁寧に髪の手入れをしている事が伺える。

正直、この状態でも見栄えは悪くないと思うけど、女の子にとってはアクセントが足りないと感じてしまうのだろうか。

「実際に見せたほうがわかりやすいでしょう？」

「そうはそうだろうけど、リボンを結ぶ手間が掛かる」

「手間って、そんな事気にしてたの？」

「そんな事って……」

「髪を結ぶなんて大した手間じゃないわ、男の子には難しく見えるの？」

モニカの場合、髪を包むかのうようにリボンを巻きつけているので、結構手間が掛かりそうな印象を受ける。

男である私にはどれくらいの手間なのかを理解する事は難しいけど。

「それなりに難しそうに見えるかな」

「そういうものかしら……少なくとも私は大した手間だとは思っていないわね。むしろ、髪よりも化粧の方が面倒よ？」

「女の子って、嬉々として化粧をするものだと思ってた」

「子供の時は化粧に憧れたけど、実際にするようになると面倒だと思っわね」

指に髪を絡ませながら、此方を見てくるモニカに少しだけ見惚れる。

別に本人が綺麗とかいう話じゃなくて、普段は見慣れない仕草が原因だ。

……面倒事は御免なので、決して口には出さないけど。

「 触ってみる? 」

「 ……何を? 」

「 随分と熱心に見ていたし、私の髪が気になっているんでしょう? 」

「 ……モニカが良いなら 」

「 私から持ちかけた事よ。 ほら、此処に座って 」

何が楽しいのかニコニコと笑みを浮かべながら、自分の隣へと誘うモニカの様子に若干の躊躇を覚えるも、好奇心に負けて大人しく隣へと座る。

下ろしている髪の一房を掴むと、笑顔のまま私に差し出してくる。

「 ……まるで壊れ物を扱うみたいな扱いね? 」

「 髪は女の命と言っじゃないか 」

「 確かにそういう言葉もあるけど、そこまで慎重にならなくても… 」

「 …… 」

初めてという訳ではないが、久しぶりに触れた女の子の髪はやはり綺麗だ。

しつとりとしているかと思えば、指を通してもさらさらと流れて引つかからない。

人工的に染めては決して出せないであろう、白みかかった金色も印象的で、改めて男の髪とは違うなと実感させられる。

「手入れが大変そうだ」

「……女の子の髪を触った感想がそれな訳？」

「素直に褒めるのは何か嫌だ」

「期待してた私が馬鹿みたいじゃない……」

不満そうな表情を浮かべるモニカを宥めながら、これからの事を考える。

そう時間を置かずに元の調子に戻ってくれるとは思いつけど、機嫌の悪いまま放っておくのも些か罪悪感が募る。

原因が他にあるならまだしも、今回は私の発言が原因な訳で……。

どうやって、ご機嫌を取るべきか。

「聞いてるの？」

「えっ？ 聞いてないけど」

ふと気づくと、モニカの端正な顔が目の前に現れる。

「ご機嫌取りの方法をいつのまにか深く考え込んでいたらしい。」

「……………」

「うん、私が悪かった」

「まったく…………もう一度言うけど、今から出掛けない？」

「今から？」

「そう、今からよ」

現在時刻、 17時30分。

そして、私は先程まで仕事を片付けていて、それを中断しているのが現在の状況。

「何をしに出掛けるの？」

「水着を買いに行くの」

「海に行くかどうかも決まってるのに……………」

「まあ、水着を買うのも1つの目的、それ以外の目的もあるのよ」

「……それ以外の目的？」

「適当にお店回ったり、食事したりとか……ね？」

可愛らしく首を傾けながら言われた言葉に、何時ものパターンかと納得する。

あえて勿体ぶって話すから何かあるのかと身構えたのだが、必要性は欠片も無かったらしい。

「まだ仕事の途中なんだけど」

「これくらいなら1時間も掛からずに終わるわ、それに明日が暇になる保障なんて無いでしょう？」

「……モニカの家って、門限が有るだろう？」

「士官学校を卒業した時に説得したから、今は無いわよ」

退路を断たれたらしい。

別にモニカと出掛けるのが嫌な訳ではない。

問題なのは、今が夏ということだ。

徐々に暑さが引いていく時間とはいえ、コンクリートで舗装された都市は昼の間に与えられた熱をしっかりと蓄えている。

年中冬で良いよと思うぐらいに、夏が嫌いな私としてはあまり外出したくないのだ。

「ねえ、私達が前に遊びに出かけたのって何時だと思う？」

「……2ヶ月前じゃないの？」

「そう、2ヶ月も前なのよ。学生時代は毎週のように出掛けていたのに……」

「休日が設定されていた学生時代と比較するのは間違いだって」

学生と社会人が同じだけ遊べるかと問われれば、答は“否”だ。

庇護される立場である“子供”と、社会的専任を負う“大人”では自由に出来る時間も違うのだから。

「……どうしても嫌？」

「はあ、分かった。この仕事を片付けたら一緒に出掛ける」

けれども、不安そうな表情を浮かべた友人の表情を見ていると結

局受け入れてしまう。

なんだかんだ言っても、モニカは大事な友人なのだ。

出来る範囲で願い事は叶えてあげたいし、モニカの表情が曇る光景も見たくない。

「本当に良いの？」

「誘ってきたのはモニカじゃないか」

「……よし、何処で待ち合わせにする？」

「いつもの場所で、あと私の仕事が終わる時間を考慮して欲しい」

「んー、じゃあ19時にいつもの場所で。遅刻しちゃ駄目よ？」

「ご機嫌な表情で部屋を出ていくモニカを見送り、仕事に取り掛かる。

……それにしても、先程まで不安そうな表情だったにも関わらず一瞬で何時ものテンションにまで戻る光景を見ると、あれは演技なんじゃないかと疑ってしまう私は悪くないと思う。

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D
.

web拍手を設置しました、感想を書いてもいいけど公にはしたくないという方はご利用ください。

目次ページでは最新話の下、各小説ページでは後書きの下に設置されています。

今回のテーマは“海”の予定でしたが、未だに“海”に行くことから決まっていらないという状況。

過程を飛ばして“海”に直行する案も考えたのですが、なぜか違う方向に……。

モニカとの会話はもう少しコンパクトに終わる予定だったのですが、甘いのが甘くないのかよく分からない話を書いている内にどんどん長くなっていき、全体の3分の2を占める状況になりました。

私の書き方で、ヒロインとの甘い話は無理かなあ……

……それと、私は別に“髪フェチ”じゃないですよ？

次話は今回の続きです。

投稿予定は今月中旬、早まることはあっても遅くなることは無いと思います。

世の中には、“専用”という言葉がある。

特定の人だけが使う、もしくはある特定の目的・対象だけに使うこと。

私達が乗るKMFも専用機という扱いだし、街に出れば会員専用といった言葉も見かける。

ただ、専用と称されていなくても、実質的に他者はお断りとなる場合も存在する。

そう、例えば

「これなんて、どうかしら?」

私は一般的な感性をある程度持ち合わせているつもりだ。

親しい異性の水着姿を見るという状況を嬉しくないとは言わない。

けれど……女性用水着の売り場に男が居るのは居心地が悪くて堪らない。

「さつき着ていた方が似合ってた。……一体何着試着する気なの？」

「私が満足するまでよ」

「……」

ちなみにこれで6着目。

男と違って服装購入に時間を掛ける事は理解している。

けれど、この居心地の悪さは依然連れて行かれたランジェリーショップの時と同等と言ってもよさそうだ。

あの時はこちらに気を使ってくれる存在が居たから良いものの、今回は2人きりなので尚の事居心地の悪さに拍車をかけている気がする。

そういえば最近、連絡取ってないなあ……。

「そう呆れた顔しないでよ。女の子の水着姿を見られて役得でしょ？」

「それは否定しないけど、精神的にまいりそうだ」

「んー、ここで拗ねられるのも本位じゃないし……ユーリが一着選

んでくれる?」

「私に服装のセンスなんて期待されても困るんだけど」

「あら、気にしなくて良いのよ? ユーリが私の為に選んだ、という事実が大事なんだから」

にこりと笑い掛けてくるモニカに反論する気も起きず、周囲の水着に目を向けてみる。

透けるタイプとか、隠す気があるのかと思わず問いたくなるような水着はとりあえず却下。

モニカはアーニヤと違い、私服を見る限りは肌の露出は抑え目の傾向があるので、ワンピースタイプが理想?

「モニカ、何色が好き?」

「秘密」

「……で、何色が好きなの?」

「せっかく可愛らしく言ったのに……」

こちらに向かってウィンクをする姿は確かに可愛いんだけど、遊ばれている気がするので反応しない。

モニカの場合、自分が女の子である事をつまく使って私の反応を楽しんでいる節があるので、ここで変に照れたりすると相手の思う壺だ。

「希望が無いなら、勝手に決めるけど良いの？」

「変な色じゃ無ければ良いわ」

「変な色ねえ……」

金髪に碧眼のモニカに合う色は何だろうかと考えてみる。

とりあえず、髪色と似た系統である“黄色”と“黄緑”は候補から除外。

大人の色と言われる“黒”は論外、どう考えても背伸びしている子供にしか見えない。

活動的な性格から“赤”、瞳の色と合わせて“青”、個人的な好みで“白”、この3色が妥当なところか。

「……何か失礼な事を考えてない？」

「真面目に考えているのに酷いな」

赤・青・白の3色に限定して水着を流し見ながら、いくつかを手

に取る。

赤と青はビキニタイプ、白は大人しめなワンピース。

……ここまで絞れば十分な筈だ。

「……本当に遊びに行く事になるとは思わなかった」

白い砂浜に青い海、照りつける太陽。

まさに夏真っ盛りと言わんばかりの光景を見ながら、思わず肩を落とす。

「ここまで来ておいて、何を言っているのよ？」

「むしろ、ここまで来たことで実感が湧いたんだよ……」

掛けられた声に視線を向けると、白いワンピースの水着に身を包

んだモニカの姿が見える。

以前は大人しめと称した水着ではあるが、背中の方が大きく空いているので大人しいと言えるかは微妙かもしれない。

「それにしても、私達って纏まりが無いわよね」

「今更そんな事を言われても困る、我が強いというか個性的な人ばかりだし仕方無い」

私達の纏まりの無さはいつもの事、目の前の光景はさすがにアレかもしれないが。

まず私達に一番近い場所に陣取っているのが、エルンスト卿とノネットさんの2人。

エルンスト卿はビーチエアに仰向けになり、肌を焼いている。

ノネットさんもオイルを塗っている途中のようなので、同じように肌を焼くつもりなのだろう。

……エルンスト卿に肌を焼いて意味があるのかと思わず問いたくなるが、単に日光浴の可能性もあるし、冗談で済まない人種問題的な話になりそうなので自重することにする。

ちなみに、エルンスト卿は黄色のビキニで、ノネットさんは黒のビキニを着用していた。

中身はともかく、外見だけで言えば立派なスタイルの持ち主なので黒の水着がよく似合っているとは思っ。

「……あの2人ほどスタイルが良くなって悪かったわね」

「何の話をしてるんだよ……私が考えていたのはノネットさんも肌を焼くつもりなのかって事だ」

「オイルを塗っているし、そのつもりなんじゃない？」

一応言っておくと、モニカのスタイルが悪いわけではない。

この年代の平均的なスタイルは持ち合わせているようだが、女の子というのは難しいらしい。

あえて男に置き換えて考えるなら……身長だろうか？

「あえて白い肌を焼くのも何だかなあ……」

「あら、ユーリは小麦色の肌って嫌いなの？」

「嫌いとは言わないけど、女の子の肌は白い方が好きかな」

「じゃあ私の選択は正解だったわね」

「……あえて何も聞かなかった事にしておく」

「つまらない反応ね、お願いしてくれば私に日焼け止めを塗らせてあげようかと思ったのに」

妖しい笑みを浮かべるモニカの額を軽く小突きながら、変な事を言うんじゃないと注意する。

「冗談と分かっているても若干トギマギしてしまう自分が恨めしい。

あえて冗談に乗ってみるのも悪くないかもしれないが、“じゃあお願い”なんて切り返された場合には反応に困りそうなので大人しくしておくのが最良の手段だと思う。

世間的には逃げたとか言われそうだけど、気にしないでおく。

「ねえ、ジノのあれって新しい遊びなの？」

「いや、あれは遊びというか……」

大人の女性2人から視線をずらすと、そこに見えるのは肩車をしたジノと上に乗せられている柩木の姿。

傍には、いつものように携帯を持ったアーニヤとその横で呆れたような視線を送るアッシュフォードの姿もある。

浮き輪を装備したアーニヤの姿は無駄に似合っていて改めて年端もいかない子供である事を実感するが、意外と楽しんでいるようなので放っておくことにする。

最近はアッシュフォードと近いようなので私が気に掛ける必要も無いんだけど、同僚として多少の心配はしておくべきだろう。

それにしても、アッシュフォードには頭が下がる思いだ。

ジノやノネットさんといった好奇心旺盛過ぎる2人に加えて、コミュニケーション能力が欠如してるアーニヤと若干抜けている感のある枢木と行動を共にしているのだから。

私なら途中で投げ出す自信がある、いや心労で身体を悪くするのが先かもしれないが。

今度から少しだけ優しくしてあげようと思う。

「まあ、ジノの突飛な行動はいつもの事だし別に良いんだけど……ヴァルトシュタイン卿が居るように見えるんだけど、気のせいかしら？」

「目を逸らしたくなる気持ちも分からなくはないけど、現実だよ」

ウェットスーツを着込み、サーフボードを抱えて海に入っていく姿を視界に収めながら、モニカの言葉に返答する。

海でサーフィンをする事自体は何ら間違っていないのだけど、帝国最強の騎士がウェットスーツを着込んでサーフィン。

失礼なんだろうけど、どうしてもシュールという感想しか浮かん

でこない。

ジノとかブラッドリー卿なんかはサーフィンが似合いそうなんだけど……。

「……見なかったことにしましょうか」

「趣味は人それぞれなんだから文句を言わない」

「さて、私達も適当に海に入って遊びましょう？」

くるりと身体を回して此方に手を差し出してくるモニカの姿は純粹に綺麗で、直ぐにその手を取りたかったのだが、ふと疑問が湧きビーチに居る人数を確認してみる。

現在のラウンズは10人、そしてこのビーチに居るのは12人。

……あれ？

「女の子が手を差し出しているのに、それを無視するなんて酷い事するのね」

「それについては謝るけど……ねえ、ブラッドリー卿については言及しないの？」

波打ち際から離れた場所にひとつのビーチバラソルが見える。

その下にはビーチチェアに身体を預けるブラットリー卿と、その両サイトで傅いている少女2人の姿が。

「あんな悪趣味な人に言及する必要性を感じないわ」

「ヴァルキリエ隊の2人を連れてくるのは予想外だったけど、悪趣味なのか？」

「どう見ても悪趣味でしょう、パイロットスーツといいあの水着といい……」

「……“人の振り見て我が振り直せ”って諺がどこかの国にはあるらしいよ」

「どういう意味？」

あえて意味は説明しないでおこうと思う。

モニカのパイロットスーツは身体のラインが出るし、際どい格好なんだから少しは自覚が欲しい。

アーニヤのパイロットスーツも思わず将来を心配したくなる格好ではあるけど、あっちは子供なので問題は無いと思いたい。

「自覚して欲しいとは思うけど、自覚してないなら別にいい」

「……何か不名誉な事を言われているのは分かったわ」

眉根を寄せて此方をにらんでくるが童顔のせいなのか怖いというより、微笑ましく感じてしまう。

ここで笑うとモニカがムキになって怒る様子が容易に想像できるので、表情に出すことは抑える。

「別にモニカを悪く言う気は無いよ」

「……本当に？」

「本当に。私がモニカの事を貶すなんて真似をすると思うの？」

「思っていないけど……あれ、前もこんな会話しなかった？」

似たような会話なら飽きるほどにしているので、その感覚は正しい。

「どういつ中身の無い会話も心地いいので、あえて指摘して壊すような真似はしないけど。」

「さあ、どうだったかな」

「真面目に考える気無いでしょっ？」

「そんなに真剣に考えるものでも無いと思っただけね」

「何か適当にあしらわれている気がするんだけど……」

「で、遊ばないの？」

「差し出した手を掴まなかったのはユーリの方じゃない」

そんな事も有ったけど……いや、私が悪いのか。

少し気恥ずかしいけど、誘いは男の子からするものだとは何処かの誰かが言っていた気がするし……。

おどけた様子で話すのは正直苦手なんだけど、この場合は仕方が無い。

「じゃあ、行きましようかお嬢様？」

「ふふっ、何それ？」

「誘いの言葉」

「似合わないわね」

「これでも頑張ったんだけど……」

「もう、仕方無いなあ」

仕方無いという言葉とは裏腹に、嬉しそうなモニカ表情。

ある意味では成功したと言えるのかもしれないが、私にはやっぱり合わないなあ……。

2 Chapter 13 - Summer Days Part .
END

8月中旬と予告していたのに、既に8月下旬……本当に御免なさい

“人の振り見て我が振り直せ”

他人の行いの善悪を見て、自分の行いを反省し、改めよ。

ヴァルキリ工隊の衣装が過激なのは周知の事実ですが、モニカやアイニヤのパイロットスーツ姿も負けてませんよね。

あれ不埒な目で見る輩とか居ないんでしょうか？

全員登場と謳っていましたが、Part・1と合わせてもビスマルクにはセリフが無い事に気付きました。

モニカとの会話を優先しすぎた感があるので、次以降の話では少し離れた話を書けると良いなあと思っています。

Chapter 14 - As You Like It (前書き)

原作キャラが登場しないお話

Chapter 14 - As You Like It

「KMFに爆装させる意味って何？」

「ちゅ、さあ……」

KMFの開発を執り行うETRLには、軍部からの要請が度々寄せられる。

現場の声を聞かずに作っても実用に耐えないものが出来上がるばかりなので、使用者たる現場の声を聞くことは大切な事だ。

だが、偶にはあるが思わず頭が痛くなるような要請が届くこともある。

「KMFは“点”を攻撃する為の兵器であって、“面”を制圧する為の兵器じゃないんだけど？」

「えっと、ほら、KMFの高機動性を生かして敵拠点を素早く攻撃するとか！」

「拠点攻撃なら遠距離砲撃とミサイル打った方が人的損失も無くして済むじゃないか」

「うつつ、私に言われても分かりませよう……」

ETRLでは珍しい私よりも年下の職員を苛めながら、改めて要請を見直してみる。

長々と書いてあるものを要約すれば、KMFに空爆装備を施せるようにして欲しいとの事。

航空機を使わずにKMFで空爆する意味が分からないけど。

「どこから上がって来た要請なのか分かる？」

「えっと……エリア11、曰く付きのエリアですね」

「……外でその発言はするなよ？ 官憲に連れていかれたいなら別だが」

「わわっ、御免なさい！」

落ち着きなく両手をパタパタさせる仕草は子供を連想させるのだが、身体的にはモデルが務まりそうなスタイルだったりする。

以前、友人がこの職員の姿を恨めしそうに見ていたから女の子の視点から見ても美人なのだろう。

「まあ、それは置いておくとして。 エリア11って今は“矯正エリア”だった気がするんだが」

「はい、“ブラックリベリオン”と呼ばれる事件の後に格下げされたみたいですね、苛烈な統治を敷いているとの話も聞きますけど…」

“矯正エリア”はテロ等の反ブリタニア的行動が継続的に続いた場合に指定されるが、“矯正エリア”に再指定されたのはおそらくエリア１が初めてだ。

占領直後のエリア成立時には“矯正エリア”に指定されるのだが、殆どの場合は一定期間経過後に“途上エリア”へと格上げされ、ブリタニアに恭順であれば“衛星エリア”まで格上げされる仕組みとなっている。

“ブラックリベリオン”という事件を重く見たということなのだろうが、一連の事件を主導した黒の騎士団はゼロという指導者を失い、主だった幹部や構成員もブリタニアに拘束された結果、事実上の壊滅状態である。

エリア１の反抗勢力として最大の勢力を誇った黒の騎士団が壊滅した現状では、反抗する力など大して残っていない筈なのだが…。

「ゲッターの壊滅でも狙っているのかな」

「……テロリストの掃討ですか？」

「そうだったらまだ良いけど、事前に潰す意味の方が強いと思う」

「事前に？」

「イレヴンは反抗的でテロリストになる可能性がある。だから事前に殺してしまえという論法かな」

「さすがに乱暴過ぎる気がしますけど……」

「功績欲しさにしても、もう少しまともなやり方は考え欲しいものだよ」

「……そんな事して、功績って貰えるんですか？」

「いや、おそらく無理。エリアを安全に統治できるのは施政者として当たり前的事であって、何ら褒められることではないんだし」

「えっと……じゃあ何故？」

「頭が足りてないんじゃない？ とにかく、この提案は無視することには決定」

ETRLで最大の規模を誇るKMF部門の統括という立場は、ブリタニアという国においては強い立場を有している。

エリア総督とはいえ一貴族の提案を跳ね除けることなど容易な事だ。

まあ、ETRLに意見してくるのは財務官僚ぐらいで皇族や貴族は基本的に関わりたがらないみたいだけ。

「はあ、主任が決めたのなら構いませんけど……」

「私はいつから主任なんて役職になったんだ？」

「統括官って言いづらいじゃないですか、けれど名前を呼ぶのは違
う気がしますし……」

「別に名前でも構わないんだが？」

「無理です」

“嫌”とか“恐れ多い”ではなく、“無理”と言われると若干傷
つくものがある。

ラウンズの立場に加えて、部門統括官ともなれば確かに敬遠した
くなる気持ちも分からないでもないけど……。

「……それは置いておくとして、プロジェクトの進行状況はどう？」

「順調とは言い難いですね、現時点で実装可能なのがビームコーテ
ィングと簡易的なステルス機能だけですから」

“Project Rosalinde” (プロジェクト
ザリンデ)

第九世代KMF開発のETRL内におけるプロジェクトネーム。

現場レベルでは未だに第五世代が主力ではあるが、ブリタニア帝国での“フラグシップモデル”となるナイトオブラウンズの為の機体だ。

現在の装備品である第八世代相当の機体を上回る機体を目指し、KMF部門の6割以上の人員を投入して研究・開発が続けられている。

「どちらも特殊塗料による簡易的な機能付加に過ぎないし、第九世代の売りにするには弱いかな」

「ですねえ……以前開発していたCASからのフィードバックは望めないんですか？」

「現行機開発の際に参考にした部分が結構多いから、研究成果は殆ど残ってない」

“Changing Armor System”

外装パーツをユニット化することで1つの機体を様々な局面・状況において高い能力を発揮させる事が出来る、という考えに基づいて研究・開発が行われていた。

高速戦闘向け “JAGER” (イエーガー)

近接戦闘向け “SCHNEIDER” (シュナイダー)

砲撃戦闘向け “PANZER” (パンツァー)

特殊戦闘向け “X” (イクス)

“X”以外のユニットは実機による性能試験まで実施したのだが、各ユニットのコストが予想以上に高騰した事に加えて装備換装に際しては特殊な設備が必要となる事などの理由で採用が見送られている。

私の機体には“JAGER”、アーニヤの機体には“PANZER”からのデータが多く流用されている。

ヴァルトシュタイン卿やブラッドリー卿の機体にも“SCHNEIDER”からのデータ流用があり、現行機開発の基礎となったとも言える。

「あれ？ “X”って実機は完成していませんよね？」

「“X”は開発途上だったからな、結局研究凍結という結末な訳だけど」

「……光学迷彩とかスタンブレードの流用はしないんですか？」

「光学迷彩は未だに実用化してないし、スタンブレードに至ってはMVSの登場でお役御免だよ」

ブレードに高圧の電流を流す事で、切断力の向上と接触した段階で相手にダメージを与えるように設計されていた“スタンブレード”であるが、使用する際には毎回高圧電流を通さなければならぬため、エネルギー効率が極めて悪い。

また、使用する高圧電力を確保する為にコンデンサ等の追加装備を行うのだが、機体設計上はどうしても外部に露出する形となる。

このコンデンサの外部露出の欠点を補う為の機能が“光学迷彩”だ。

光の透過・回折により物体を透明に見せる技術で、予定ではこれに加えてサーモグラフィでの探知を回避する為の機能付加を行う予定だったのだが、肝心の“光学迷彩”の技術が完成しなかった。

技術的に追いつかなかった訳では無く、同時期に“Magnesium System”と呼ばれる磁力を利用したシステムの開発を行っていて、人手や資材に余裕が無かったことが原因である。

未だ“Magnesium System”を用いた兵装は完成していないが、実用化すれば現行のフロートユニットを超える機動性を手に入れる事が出来る。

一定高度以上では磁場の反発が小さくなり性能低下が予想されているが、KMFでは活動しない高度なのでおそらく問題にはならない筈だ。

「難しいですねえ……」

「まあ、嘆いていても仕方が無いことだな。　キヤメロットに遅れる訳にもいかないし」

「……主任つて、そういうのに拘るタイプでしたか？」

「個人的には気にしない。　けれど、国の体面というものがあるからな」

「体面？」

「キヤメロットが作ったKMFに乗るのは枢木かアツシユフオードの何方かだ。　仮に枢木だった場合、ナンバーズが最新型に乗るという構図になる」

「……最新型に乗るのはブリタニア人でなくてはならない、ということですか」

「そういうこと。　まあ、あちらが先に完成させたとしても上からストップが掛かるだろうけどね」

皇帝陛下直属の騎士といえども、やはりナンバーズである事に変わりはない。

人種についてあれこれ言いたくはないが、ナンバーズが注目を集めると困るといのも理解出来る。

現場に政治の話を持ち込みたくはないが、ブリタニアという国で

それを望むのも無理な話だろう。

「ともかく、仕事頑張りなよ」

「いや、他人事みたいに言ってますけど主任も仕事あるでしょう?」

「私の本業は騎士だからな、君ら本職と違って色々手順を省略できるんだ」

「……主任の裏切り者」

「さて、私も色々根回しでもしておこうか」

「……むう」

ジト目で睨んでくる可愛い同僚の為にも、第九世代の仕様ぐらいは確定させておかないとね。

Chapter 14 - As You Like It (後書き)

そんなこんなで原作キャラが登場しないお話。

“Project Rosalinde”は完全にオリジナル、小惑星番号900番の名を冠した第九世代機開発のプロジェクトという設定。

タイトルはウィリアム・シェイクスピアの喜劇『お気に召すまま / As You Like It』から。

天王星の第13衛星と小惑星番号900番が同じ名称でしたので、天王星の第13衛星の名称の由来となった喜劇をそのまま拝借しました。

作中で登場している“CAS”と“Magnesser System”は『ZOIDS』という作品からの登場です。

同じくコードギアスで連載されている方で、『ZOIDS』の機体を登場させた方がいらっしやいますので若干二番煎じな印象を受けるかもしれませんが、私も好きなんですよとアピールしてみる。

自分で書いておいて何なのですが、オリキャラ同士の会話って楽しいですか？

読む側としてはあまり楽しくない、書く側としては書きやすいというのが個人的な印象なんです。

目の前に広がる広大な敷地を眺めながら、ここへ来た目的を改めて考える。

私が居るのは“世紀の歌姫”と称されるティオレ・クリステラが設立した、国内のみならず世界的に有名な音楽学校“クリステラソングスクール”。

音楽学校は他にも多数存在するが、声楽という分野において“クリステラソングスクール”に勝る学校は存在しない。

そんな有名校に、声楽とは程遠い私が足を運んでいるのには割と深い理由がある。

「お待たせして申し訳ありません、当校で教頭を務めているイリア・ライソンです」

「ご丁寧にも、それでお会いできるのでしょうか？」

「はい、校長にも確認を取っておりますので。ご案内致します」

絵に書いたようなキャリアウーマンといった容姿を持つ女性が、感情を載せない声で応対してくれる。

無表情に見える女性ではあるが、小さな感情は隠しきれていない

らしく疑念と若干の敵意を感じられる。

私のような立場の人間が突然来校したとなれば驚くのも当然の話ではあるのだけど。

テキパキとした対応で、私を先導してくれる女性の後ろ姿を見ながら、ここへ来ることになった原因を思い返す。

「執務室に直接来られるなんて珍しいですね」

「自覚しています。貴方と違って言葉遊びを楽しむ趣味もありませんので、本題に入りますよ?」

ETRLの仕事も一段落し、ラウンズとしての仕事を片付けていると突然の来客が現れる。

同僚が遊びに来ることはあるが、この人が直接足を運んだのは初めてじゃないだろうか?

帝国特務局総監　ベアトリス・ファランクス

皇帝陛下の主席秘書官まで兼任している、まさに出来る女性の代
表格ともいえる存在。

個人的には苦手な部類に入るのであまりお会いしたくない人物な
んだけど。

「どござ」

「では簡潔に、“クリステラソングスクール”へ向かい、事情聴取
をして来て貰います」

「……それは情報局とか治安部隊の仕事では？」

「ええ、その通りです。 ですが、少し事情がありまして貴方を皇
帝陛下の使いとして派遣することにしましたのです」

「受けない選択肢は存在しないようですが……何を聞いてくれば宜
しいのです？」

「今朝の全体会合でクリステラとクラインについての話が話題に登
りました、これの意味は分かりますね？」

「まあ、彼女達の活動が良くも悪くも話題になっていきますので……
つまりは確認してこいということですか」

クリステラとクライン、共に歌手の娘を持つ2人であるが、その
娘の活動内容が問題視される事が度々ある。

クリステラはチャリティーコンサートを開催し、その収益を社会的弱者の支援へと当てている。

この活動がブリタニアの国是に反するのではないか、という意見が一部が出されているのだ。

法的にも道義的にも何ら問題ない行為なので、意見を出しているのは本当に極端な人間だけなのだが。

対してクラインは些か悪質な面がある。

確たる証拠が無いもののナンバーズへの支援を行っているとの噂が常につきまとっている上、最近では過去の産物となった“優生学”に基づいた考えを持つ宗教家と接触しているとの話がある。

反帝國的な思想を持つと認識されており、当局から要監視対象にされているとのことだが。

「その通りです。クラインが素直に認めるとは思っていませんが、釘を刺しに行く意味もありますね」

「その言い方だと、クリステラは気にしなくもいいように聞こえますけど？」

「実際にクリステラは問題視する必要性が無いのですよ、本当に問題なのはクラインの行動です」

「……私が2つとも担当するのですか？」

「いいえ、貴方はクリステラの方を担当していただければ結構です。クラインはこちらで対処します」

機密情報局を動かす気なのか聞いてみたかったが、藪をつついて蛇を出すなんて事をしたくは無いので大人しくしておく。

話し合いで必要になる資料と書類を手渡すと、フランクステ務局総監はさつさと部屋を出て行ってしまふ。

激励の言葉の1つでも欲しいところなんだけど、そこまで期待するのは無理かなあ……。

「じちらです」

無言で先導され、些か気まずい雰囲気味わっていたところで目的の部屋へと到着する。

部屋の中で出迎えてくれたのは、4人の女性。

“世紀の歌姫” ティオレ・クリステラ

“若き天才” アイリーン・ノア

“光の歌姫” ファイツェ・クリステラ

いずれも世間に名を知られた有名人であり仕事でなければ喜びたい顔合わせなのだが、彼女達にしてみれば招かれざる客といえる私に対して好意的な反応を返してくれる訳も無い。

正確に言えばクリステラ親子の表情には驚きが、“若き天才”からは先程の教頭と同じく疑念の視線が送られている。

そして、そんな3人の後ろに控える女性。

こちらの挙動を観察するように視線を動かしているので、おそらく本職のSPだと推測できる。

女性のSPとは珍しいとも思ったが、ソングスクールの性質上、男性SPを配置する訳にもいかないのだろう。

「ようこそ、当校へ」

「ご機嫌よう、Ms・クリステラ。お会いできて光栄です」

高齢のため第一線を退いているものの、“世紀の歌姫”といわれるその存在感は今でも失われていない。

軍人、しかも皇帝陛下の直屬たるラウンズを前にしても笑顔を見せている事がその証拠だろう。

「いえ、突然のご来訪でしたので満足な対応もできず申し訳ありません」

「軍人たる私に歓待の必要はありませんよ、あくまで仕事ですから」

丁寧な言葉と見せかけて暗に突然来るなど言ってくるティオレ・クリステラの言葉に、思わず苦笑を浮かべる。

場馴れしているともいうべきなのか、この対応は正直感心した。

「そう仰っていたら幸いです。それで、今回の訪問はどのような用件なのでしょうか？」

「ええ、実は」

一息つく間もなく切り出してきた言葉に対応し、クリステラとクラインの活動に批判的な意見が出されている事、今後の活動方針などを聞きに来たことを伝える。

校長と教頭が意見を交わすかのように視線を交わしているのが見えたので、しばらく待つことにする。

後ろのSPは変わらずこちらを観察しているが、フィアッセ・クリステラとアイリーン・ノアは些か落ち着かない様子。

「意見は纏まりましたか？」

「……はい。お待たせして申し訳ありません」

「お気になさらず、慎重になるのは当然の事ですから」

これがただの軍人、もしくは情報局職員だったらここまで緊張はしない。

だが、目の前に居るのは皇帝陛下の直属たるラウンズの一員。

下手な事を言えば、反論する間もなくソングスクール自体に危険が及ぶとの考えがある故に慎重に言葉を選んでいるのだろう。

「それでは、お聞きします。Ms・クリステラはブリタニア帝国に対して疑念を持っていますか？」

「疑念を持ち合わせている訳ではありません。切り捨てられる弱者を助きたい、ただそれだけです」

「その活動が、ブリタニアの国是に反しているとしても？」

「人は平等ではない、ならば持つ者が持たざる者に手を差し伸べるのはおかしい事でしょうか」

「……それが貴方の、ひいてはソングスクールとしての意見ということで宜しいのですね？」

「はい、結構です」

ティオレ・クリステラの言葉を聞き、持たされた書類に事前の予想どおりともいえる言葉を書き込んでいく。

元より、クリステラの活動は問題視される物ではないとの結論が出ているのだ。

違法性も無く道義的にも問題無い活動を咎める必要は無いのだが、そういう声が拳がっている以上は何らかの対処をしなければ余計な騒ぎになりかねない。

その為にも、今回の訪問で目に見える“お墨付き”を与える必要がある。

「……そちらのお考えは理解しました。現状の活動の範囲内ならば、当局は一切の手出しをしない事をお約束します」

「現状の、ですか」

「ええ、現状で行っている国内向けのチャリティーは問題ありませんが、国外向けの活動は目を付けられると思ってください」

「……分かりました」

私の言葉で一様に安堵の表情を浮かべるも、校長たるティオレ・クリステラの表情は厳しい。

慈善活動に熱心な彼女にしてみれば、国外向けの活動も当然視野に入れていただろう。

苦い表情で言葉を返すティオレ・クリステラに若干の罪悪感を覚えながらも、仕事を進める。

「こちらが協定書となります。上段が皇帝陛下の代理たる首席秘書官、中段が宰相であるシュナイゼル殿下のサインとなっていますので、その下の欄に2枚とも貴方のサインをお願いします」

「……これで宜しいでしょうか？」

「はい、問題ありません」

サインの入った書類を受け取り、日時と場所、そして責任者たる私の名前を記入していく。

「1枚はこちらで、もう1枚はそちらで保管していただきます。今後の活動で抗議を受けた場合はコピーでも構いませんのでこの協定書を相手に提示してください」

「これを、ですか？」

「はい、これがブリタニア帝国のお墨付きという証明書になります。これを提示しても解決しない場合は……こちらの番号に連絡をお願いします」

「……どこに繋がるのか聞いても？」

「私の端末に直接繋がります、今後の貴方たちの活動に関しては私の監督・責任下となりますので」

今後のクリステラの活動に関しては、私の責任で行われることとなっている。

事情聴取に赴いたのだから最後まで責任を持つということなのか、それとも私の事情を知っていて気を利かせたのかは不明だが、大して苦になる仕事でも無いので素直に引き受けている。

「さて、何かご質問があればお答えしますが」

「1つだけ、何故私達の活動を許容したのですか？」

「法的にも道義的にも問題視する部分がありませんでしたから」

「……それは表向きの事情なのでは？」

「意外と厳しいですね……まあ、確かに本音は存在しますが、聞きたいですか？」

「出来ればお伺いしたいですね」

「あえて言うなら 都合が良いのですよ、貴方たちの活動は」

国是の性質上、政府は弱者に対して手を差し伸べるといった行政サービスを提供していない。

政府としても安定して社会を維持していく為に弱者支援の必要性は理解しているのだが、一般的に理解されているとは言えない為に予算や人員を確保できていない。

そんな手をこまねいている状況で、政府の代役を務めたのがクリステラソングスクールが拠出する“Starry Crystal 基金”だ。

基金の財源はチャリティーコンサートでの収益金であり、国内に存在する孤児院や社会的弱者への支援を行っている団体に対して金銭的な支援を行っている。

人も予算も使わずに行政サービスの代替を提供できる、そんな存在をみすみす逃すわけもなく、こうしてお墨付きを与えてまで維持に躍起になっているのだ。

「……なるほど、そういうことですか」

「政治の舞台裏とは得てして醜いものです、臆しましたか？」

「……利用されているとしても本来の趣旨には反していませんから、

活動は続けます」

「個人的には利用する事になり申し訳無いと思うのですが、そう言
って頂けると助かります。他に何か質問はありますか？」

出されて時間の経ったコーヒーの微妙さに少しだけ表情を歪めな
がら問いかけるも、特に無いようなのでこの辺りで終わりかな。

「では、これで今回の用件は終了です。お手数をおかけしました」

「いえ、こちらこそ有意義な話し合いです」

「こちらこそ、では」

「イリア、コーヒーをアイスで淹れてきてくれるかしら？」

「はい？」

「だから、アイスコーヒーを淹れてきて頂戴？」

「……分かりました」

不服そうな表情を浮かべながら給湯室に消えていく教頭の姿を見
ながら、目の前の人物へと視線を戻す。

私の言葉を敢えて遮った理由は何となく察することが出来たのだ
が、後ろに控えるSPやアイリーン・ノアが私の様子を伺うように

見てくる視線が若干鬱陶しい。

程なくして、アイスコーヒーを淹れてきた教頭が戻ってくる。

「どうぞ、校長」

「私ではなく、あちらによ」

「……えっ？」

この人も意地が悪いというか、相手を困らせるのが好きなタイプだ。

そういう点においては親近感が沸くんだけど周りがあきらかに困惑しているので、どう対応したものだろうか。

「ほら、お客様を待たせるのは感心しないわ」

「はぁ……どうぞ」

「どうも……気を使わせてしまったようで」

アイスコーヒーを受け取り、ガムシロップとミルクを投入する。

苦いコーヒーも嫌いではないが、どちらかといえば甘い方が好きかな。

「仕事は終わりで宜しいのよね？」

「人の話を遮っている時点で、察していただいでしょう」

「確認よ、それで私はお礼を言うべきなのかしら？」

「必要無いと思いますよ、私が意見してもしなくても恐らく結果は同じだった筈です」

「そうなの？」

「ええ。まあ意見した気持ちを取り戻したのか、私を責任者とした点についてはあの人に感謝してもいいかもしれませんね」

「具体的には？」

「ベアトリア・フランクス特務局総監兼主席秘書官です、個人的には苦手な部類に入るんですけどね」

「……昔、貴方と同じ地位に居た人ね」

軽い歓談を交わしていると、今まで黙り込んでいた人物が意を決した様子で声を掛けてくる。

そういえば、何故黙りこんだままだったんだろうか。

「あ、あの、もしかして普通に会話しても大丈夫……？」

「……」

「……」

「あれ、どうして2人とも黙るの？」

「……次期校長がこれで良いんですか？」

「私も心配になってきたわ、イリアが居るから大丈夫だとは思っけど……」

私とティオレさんが普通に会話している時点で気づくかと思いきや、未だに仕事の延長戦だと思っっていたらしい。

ティオレさんの口調が畏まったものではなく、普段のものに戻っているのだから気付くのは難しくないと思うんだけど。

「もう！ ユーリもママも私の事何だと思ってるの？」

「空気の読めない娘」

「積極性が足りない娘かしら」

「うう……アイリン、2人が私を苛めるよー！」

「えっと……どうしろっというのよ？」

私との関係性を知らぬまま、泣き付かれても対応に困りますよね。

貴方の困惑具合はよく分かりますよ、アイリーンさん。

いや、助け舟を出す気は毛頭ありませんけど。

「校長、こちらの方とお知り合いなのですか？」

おろおろしているアイリーンさんを尻目に、教頭が事情を把握する為にテイオレさんへと問いかける。

冷静なように見えて、若干の困惑が入り混じった表情だろうか？

「ええ、結構昔からの付き合いなのよ」

「……でしたら、ああいった対応を取る必要は無かったのでは？」

「仮に事前に知っていたとしても仕事で来ている以上、ユーリの態度は変わらなかったと思うわ」

「知り合いが相手といえども職責は果たさなければなりませんからね」

知り合いだからと甘い対応をする訳にもいかない。

心情的にはそうしたいのだけど、立場には見合った責任は果たさなきゃいけないしね。

それにしても

「いつまで続けているんだ、フィアッセ？」

「……ユーリが謝ってくれるまで、このままだもん」

「私の意志を考慮する気ないのね……」

「ご愁傷様です。ただ、見ていて悪くない光景ですので、今しばらくそのまま居てくれると嬉しいですね」

「いや、貴方がフィアッセの機嫌を戻してくれれば解決するんだけど？」

「美人は目の保養になりますから、今しばらく鑑賞させてください」

「……それ、私とフィアッセのどちらを指してるの？」

「メインは貴方です、フィアッセはオマケ扱いで良いでしょうし」

「オマケ……」

「なんで悪化させてるのよー！」

面白いからです、なんて言葉に出したら間違いなく怒られそうなので自重する。

そういえば、SPの女性があいつの間にか姿を消していた。

正直、危険性無しと判断したにしても途中で居なくなるのは褒められた行動ではないと思うのだけど……。

T
O
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
.

後書きはPart・2に纏めて書きます。

「嫌だよ、そういうの」

「嫌と言われても、もう子供じゃないんだけど？」

機嫌を損ねたフィアッセを宥めずかして何とか機嫌を戻したのだが、今度は戻し過ぎたらしく、私の隣に座ってペタペタとスキンシップを取り始める。

フィアッセの癖ともいうべきものに、相手に触れたがる性質がある。

もちろん、ある程度親しい相手に限定されるのだが、相手が異性であっても関係ないらしく何の躊躇も無く抱きついてくるので、そろそろ止めた方がいいのではないかと提案すると返ってきたのが、先程の言葉だ。

「んー、こっやって触れられるのは嫌い？」

「嫌いではないけど、少し控えるべきだと思う」

「どっしってっ？」

「さあ、どっしってっ……」

子供が手を繋いでいたり抱きついていても微笑えましいの一言で済ませる事が出来るが、大人の場合は事情が異なる。

フィアッセは20歳、私も19歳でお互いに大人の身体へと成長している。

女性らしく丸みを帯びた身体であったり、はたまた服の上からでも分かるスタイルの良さであったり。

健全な男としては、何の躊躇もなく抱きつかれるのは精神衛生上よろしくない。

「……微笑ましそうにしているティオレさんも何か言ってくれませんか」

「あら、注意するべき行動には見えないけど？」

「私もフィアッセも大人であって子供では無いんです」

ティオレさんにフィアッセの行動を注意してもらおうべく声を掛けるも、楽しそうな表情で拒否される。

この人の悪戯好きな性格はよく分かっているつもりだったが、認識が甘かったらしい。

「つまり、フィアッセに抱きつかれていると女の子を意識してしま

って恥ずかしいって事よね」

「……さっきの仕返しのもりですか、アイリーンさん？」

「いやいや、決して恨めしく思っていたりはしないわよ」

「へえ、ユーリは私に触れられるドキドキするんだ？」

蛙の子は蛙という言葉があるが、フィアッセの表情を見るとまさにティオレさんの娘だということがよく分かる。

面白いことを見つけたとでも言いたげな表情は、まさにティオレさんからの遺伝だろう。

「もうそれで良いから、離れてくれ」

「やだよ。久しぶりに会ったんだから少しぐらい良いでしょう？」

「これで少しなのか」

「うん、アイリーン達が居るから控えめなんだよ？」

「普段の貴方達がどんな行為をしているのか、すごく興味が湧いてきたんだけど」

「1つ釈明させてください、あくまで子供の時です」

「一緒に歌、一緒にお風呂、膝枕……あ、一緒のお布団で寝たこと

もあるよね」

指をひとつひとつ折りながら、過去の出来事を挙げていくフィアッセの楽しそうな表情を見ていると私の考えなんて無意味のように思えてくる。

昔から、フィアッセに勝った試しが無い。

何か言い合いになれば、必ず私が譲歩してフィアッセに譲る結果になる。

そして、それが嫌ではないのだ。

年上なのに子供っぽい、けれど時として年上らしくお姉さんのような振る舞いを見せる。

そんなフィアッセが好きで、彼女の傍に居たいがために色々なお願いを聞き入れていた。

思えば私の一番最初の友人はフィアッセなのだ。

次いで幼馴染のアステリア、告白じみた言葉をくれたモニカ、ライバル意識から友人となったりリリシアと友人を増やしていった。

フィアッセと会わなければ、アステリアとも親しくならなかったし士官学校へと進む事も無かっただろう。

「　　！　　ユーリ！」

「……って、何？」

昔の事を回想していると、突然現実に戻される。

そして、目の前ではフィアッセとアイリーンさんが心配そうな顔でこちらを伺っている。

「大丈夫？ 声を掛けても反応しないから心配したんだよ？」

「……少し昔の事を思い出していただけだから、大丈夫」

「顔色も悪くないし、体調が悪い訳ではないみたいね」

「本当に体調が悪いなら、ちゃんと言わないと駄目だよ？」

「体調管理ぐらい出来るよ、軍人なんだから」

大変な状況に置かれている彼女達に、要らぬ心配を掛けてどうするのかと内心で自分を叱咤すると直ぐに取り繕う。

フィアッセは尚も心配そうだが、アイリーンさんは私の発言に何か思うところがあったのか直ぐに引き下がってくれた。

「あれ、ティオレさんと教頭先生は？」

「君が、ぼーっとしている間に退室したのよ、フィアッセと仲良くしなさいって言葉を残していったけど」

「あはは、ママに気を使わせちゃったかな？」

「先生も楽しそうにしていたし、気に病む必要は無いと思うよ」

いつのまにか姿を消していた2人にまったく気づかなかった私はどれだけ気を緩めていたのやら……。

軍人として大丈夫なのかと自分で自分を心配したくなるが、考えても仕方の無い事かもしれない。

「そっか……うん、お茶淹れてくるけど、ユーリはミルクティーで大丈夫？」

「大丈夫、嫌なのはコーヒーだけだから」

「分かった、アイリーンも少し待っててね」

「はいはい、慌てないでね」

いつも通りの笑顔を浮かべてお茶を淹れるために席を立つフィアッセを見送ると、アイリーンさんがにこやかな表情で話しかけてくる。

「仲いいのね」

「普通の友人関係は築けていると思っ

「ふふっ、心配しなくても大丈夫だと思

「……何の話です？」

「君がフィアッセの事を大事に想っているように、フィアッセも貴方の事を大切だと想っているわ」

「……」

「まあ、年上のお姉さんの戯言だと思っ

「……よく分かりませんが、有難うござ

「うん、どういたしまして」

内心を見透かしたように掛けられた言葉に驚くも、お姉さんからのアドバイスには素直に感謝しておく。

世間で語られる“エレガントイメージ”とは違う“アイリーン・ノア”に驚いたけど、こちらの方が親しみやすく好きかな。

その後は、お茶を飲みながら過去の恥ずかしい話を暴露したり、暴露されたりの話が続けて私とフィアッセの双方がダメージを受けるなんて妙な展開になりましたが、3人で楽しい時間を過ごさせてもらった。

結果的には双方の面白い話を聞いたアイリーンさん1人だけが得をした形になったのだが、この人なら弱点を知られても惜しくないと思うのは人柄故だろうか。

帰り際に、次回のコンサートチケットと相変わらずの“お土産”をくれたフィアツセの行動を、アイリーンさんから茶化されたりもしたが最後まで笑顔で居られたので結果的には良かったのかもしれない。

今まで軍人の職務である“守る”という行動に実感が無かったが、フィアツセ達のような存在を守るのが軍人の職務なんだと実感でき、職務の責任を再確認できたのも1つの成果かな。

Chapter xx - Crysteria Song Sch
o l P a r t . 2 E N D

書かないと言っていたのに、何故か突発的に書き上げてしまった番外編。

とらハ3のファンの皆さん怒らないでくださいね？

エリスが一言を喋ってないとかの突っ込みは要りません、いや動かしにくいんですよ？

テイオレさんとかイリアさんのキャラは果たして合っているのか、ファイアッセやアイリーンはこんなキャラだったのだろうかとか色々考えましたが、勢いで書き切りました。

ちなみに本編扱いはしてませんが、これを本編にするとメインヒロインがモニカからファイアッセに移行します。

主人公はイマイチ理解できていませんが、初恋はファイアッセなんです。

……本編として扱っても、そこまで違和感はない話にしたつもりですが、ここまでモニカをヒロインとして掲げてきた以上はあくまでパラレルワールド的扱いがベストかな？

紙を使用した本が本格的に登場するのは、欧州では15世紀以降の事である。

本の始まりは6世紀まで遡るが、当時は羊皮紙を用いた物であり、なおかつ大量に生産する為の印刷技術が存在しなかった。

しかしエリア11では当時としては非常に優れた製紙法が確立されており、7世紀には紙を使用した本が登場している。

中華連邦でも10世紀以降は紙を使用した本の出版が盛んとなり、欧州での紙の利用は随分遅かったとも言える。

今まで口伝で伝えてきた歴史や事柄を、文字によって記録・継承していく。

これにより、より正確で情報量の多い歴史を後の人間に伝える事が可能となった。

重要な役目を果たしてきた本であるが、昨今は電子化が進み紙媒

体ではなくデジタルデータとして提供される事も増えてきている。

しかし、公文書などは紙媒体で出された後にデジタル化される場合が多い。

デジタルデータはその利便性が高い反面、情報の漏洩などのセキュリティリスクも高い傾向がある。

その為ブリタニアでは公文書に全て紙を用いる事が決められており、それらは全て帝国図書館内の公文書室に収められる。

EUの公文書館などは事前の申請により市民の閲覧も可能なのだが、ブリタニアの公文書室及び帝国図書館は市民の立ち入りを禁じている為、学術的見地から利用される事は無い。

かくいう私も、入館権限はあるものの利用経験は皆無だったりする。

そんな場所に何故、足を向けているのかと言えば少し気になることがあったからだ。

知らずとも差し障りのある事では無いが、せつかく時間もあつたので直接赴いて解決しようと思った次第である。

……しかし、そんな些細な事など放っておけば良かった。

今まで帝国図書館に赴いた時には、利用者など両手で収まる程度しか見かけなかったので油断していたのだろうか？

「珍しい場所でお会いしますね」

「……確かにそうだな、本を読んでいるより剣を振っている方が性に合う」

“Knight of One” ビスマルク・ヴァルトシュタイン卿

改めて言うまでも無い、帝国最強の騎士。

そして、明らかに図書館という場所が似合わない御仁でもある。

「何かの仕事ですか？」

「いや、個人的に気になることが有っただけだ」

そう言って、抱えていた数冊の本を机の上へと置く。

絵本・小説など形態は様々であるが、タイトルは全て一緒だ。

“ひとりぼっちの皇子様”

ブリタニア国内では有名な物語だが、不可解な終わりを遂げている事に加えて作者不明という謎の多い作品でもある。

「ひとりぼっちの皇子様」ですか」

「知っているのか？」

「有名な物語ですから勿論読んだことはありますが……何故この話を？」

「少し気になった、いや縁があったとでも言うべきなのか」

ヴァルトシュタイン卿にしては珍しい遠まわしな物言いに多少の違和感を覚えるも、“ひとりぼっちの皇子様”について考えを戻す。

有名な物語ではあるのだが、その内容は特別珍しいものではない。

異母兄弟からの心ない態度に自らの境遇を嘆いた皇子が、突然現れた魔法使いから魔法を授かる。

皇子はその力を用いて、悪戯をしたり強制的に命令したりと好き放題。

しかし、その様子を見ていた魔法使いから、これ以上皆を不幸にするならば呪いを掛けると忠告される。

皇子はその忠告を無視し、魔法を使い続ける。

見かねた魔法使いは関わった人間が次々と消える呪いを掛け、皇子は目の前で人が消えて行く様を見て動揺する。

疎ましく思っていた父や兄も、大事に思っていた母も、街の人間さえも消えてしまい、皇子はひとりぼっちになってしまった事を嘆く。

その様子を見ていた魔法使いが再び現れ、今までと逆の事をすれば皆は戻ってくると助言を与える。

ひとりぼっちである事を嫌った皇子は、自分自身に魔法を掛けた。すると、消えてしまったはずの人たちがみんな戻ってくる。

しかし、そこに皇子の姿だけが無かった。

大まかに説明すれば、このような物語になる。

異国の血の混じった者が虐められるのも、魔法の力が使えるようになるのも、物語としてはありふれた題材だ。

にもかかわらず、この物語が有名になった理由は何なのだろうか？

「……正直、読んでいて楽しい話では無いと思いますが」

「そのようだな、どの本も結末は同じだ」

「童話に現実性を求めるのは間違っているのかもしれませんが、色々不可解な話ですよね」

「……お前はどっと思っつ？」

「先程も言ったように、読んでいて楽しい話ではありません」

単純な勧善懲悪とは違い後味の悪い終わり方だ。

物語の中ぐらい、ハッピーエンドが見たいと思うのは私の勝手かもしれないが。

「聞き方が悪かったか……この物語は実話だと思うか？」

「面白い冗談ですね、魔法使いが登場する物語が実話とは思えません」

「だが、人は自らが理解できない事象を魔法と称する事もある」

「……魔法が実は暗示であり声で相手に暗示を掛けた、とでも言いたいのですか？」

「そうだとしたら、筋が通るだろう」

「いくら何でも無茶です。思考を誘導する程度ならともかく相手に行動を強制させる事など……それこそ魔法としか説明しようがありません」

暗示とは、相手に気付かれないように思考を誘導する事を指す。

“ひとりぼっちの皇子様”に登場する魔法は、書籍の記述を信じ

るならば“誘導”ではなく“強制的な命令”だ。

「ふっ、そうだな。まさに魔法だ」

「……ヴァルトシュタイン卿は、この話が実話だと考えているのですか？」

「さてな。だが面白いとも思わんか？」

「面白い、ですか」

「そうだ、万人に対して行動を強制できる。権力者としてこれほど都合の良い力は無い」

「……独裁者にとっては都合が良いかもしれませんが、私には到底許容し難い考えですね」

「ほう、それは何故だ？」

「色々理由はありますが……そうですね、全ての物事が自分の思い通りに進むなんて面白くないでしょう？」

箱庭の世界で神様にでもなれば全てを思い通りにする事が出来るが、そんな物に興味は無い。

ゲーム感覚といえは聞こえは悪いかもしれないが、私にとっての日常生活はある意味そんな認識なのだ。

どんな行動や発言が最適か、そしてどういつ影響を及ぼすのかを常に考え、次のアクションに繋げる。

友人曰く計算された行動であり、そういった面はあまり好きになれないと言われたこともある。

……一応釈明しておく、プライベートの時まで計算された行動を行っている訳では無く、プライベートな状況で親しい相手と限定すれば思いつきのような行動や発言をする事も度々あるらしい。

思いつきの行動や発現については、イマイチ自覚していないのだが友人が嘘を言う理由も無いので本当の事なのだろう。

「……」

「どうかしましたか？」

「いや、お前からそういつた発言が飛び出すとは思っていなくてな」

「……そうですか」

不可思議な物を見つけたかのような表情で、こちらを見てくるヴアルトシュタイン卿に抗議の視線を向けておく。

そんな視線に気づいてくれたのか、態度を取り繕うかのように咳払いで場を誤魔化していた。

“言葉では無く、剣で語る”を地で行く人とはいえ、20歳近く

歳の差がある相手にその対応はどんなだろうか？

「まあ、その話は置いておくとしてだ」

「……若干納得がいきませんが、誤魔化されておきます」

「うむ。ひとつだけ忠告しておこうと思ってな」

「……忠誠心については直ぐにどうこう出来ませんよ？」

以前、ヴァルトシュタイン卿から皇帝陛下に対する忠誠心についての話を聞かされたことがある。

私やブラットリー卿のような存在が居る以上、現在のラウンズの選考基準に忠誠心が含まれていないのは明らかだが“血の紋章事件”以前から皇帝陛下に付き従っているヴァルトシュタイン卿としては、忠誠心を重要視したいらしい。

そんな話をされた私もブラットリー卿も考えが変わっていないので、その努力は無駄になったと言えるのだけだ。

「確かにそれも問題ではあるが、そうじゃない。魔法の話だ」

「……」

「通常の常識で考えればありえない、だがあり得ないと証明する術も無い」

「悪魔の証明“のつもりですか？”

「いや、私の言っていることが詭弁であると自覚はしている。だが、世の中には自分の知らぬ事が案外あるものだ」

「……実際に体験したような言い方に聞こえますが」

「実体験だ。私も知った時には驚いたものだ」

懐かしそうに目を細める姿に、いつの日かヴァルトシュタイン卿と話をした事を思い出す。

あの時も、ヴァルトシュタイン卿の過去の話聞いていた。

過去を回想する人が懐かしそうな表情を浮かべる事に疑問は無いが、寂しさを浮かべるのは何故なのだろうか？

会えなくなってしまった人が居ると考えるのが普通ではあるが、さすがにそれを聞くのは憚られる。

「結局、何が言いたいのです？」

「さて、何だったのだろうか」

「……えっ？」

「別に深く考える必要は無い、頭の片隅にでも留めておけばいい」

意味深な言葉を残して去っていく、ヴァルトシュタイン卿の背中を呆然と見つめる。

あえて真意を伝えなかったのか、それとも本当に何を伝えるべきなのか分からなくなったのか、どちらにしても謎だけが残る結果になった。

……この釈然としない感情はどうすればいいんでしょう？

Chapter 15 - Solitary Prince
arrative END

当初の予定とは随分違う内容となりましたが、久しぶりの登場となるビスマルのお話でした。

主人公は皇帝陛下への忠誠心・騎士道精神など、ビスマルとは正反對の考えに位置しているので若干の苦手意識を有しています。

出番といえば、ドロデア・ライ・スザクなども会話シーンがあまり多くないのですが、正直動かしにくいんですね。

殆どオリキャラと変わらないモニカは気軽に書けるので、ドロデアも書きやすい筈なんですけど……。

登場させやすい

ジノ アーニヤ ノネット ルキアーノ モニカ

登場させにくい

ビスマルク ドロデア ライ スザク

実は番外編を続けようかと思っていたんですが、本編を放置する訳にも行かないので今回は見送り。

一応、言っておくと番外編の世界では高町家とか存在しませんよ？

相変わらず方向性の定まらない本作ですが、引き続き応援よろしく
願います。

世界には、大きく分けて3つの勢力が存在する。

絶対君主制の下、世界制覇を目指す“神聖ブリタニア帝国”

世界最大の人口を有する“中華連邦”

今もなお民主主義を堅持し続ける“Euro Universe”

このうち中華連邦はブリタニア及びE・Uと直接的に矛を交えていない。

しかし、ブリタニアとE・Uは紛争状態であり現在も一進一退の攻防が続いている。

兵器の性能自体はブリタニアが勝るのだが、海岸線で防御陣地を構築され上陸も叶わず撃破されてしまう事例が多い。

空からの降下作戦も試みられているのだが、こちらも満足な成果は収められていない。

KMFが旧来の兵器と比べて高性能であっても、野砲や戦車砲などの直撃を受ければ破壊される事に変わりはない。

むしろ、装甲強度は戦車などの装甲車よりも遥かに低いので被弾してしまえば一撃で破壊されてしまう。

「我々から何人が派遣される事になる」

珍しく全員が揃った場でヴァルトシュタイン卿から伝えられたのは、ラウンズのE・U・戦線への投入。

遠征軍がE・U・領内への上陸にすら手間取っている現状を改善する為のテコ入れといったところだろうか。

ブリタニアが本気である事の証明、遠征軍の士気向上など、ラウンズを派遣する事の意味は戦力以外にも色々ある訳だが問題なのは誰を派遣するのかだ。

「ふむ、それで誰を派遣されるのです？」

先陣を切ったのはノネットさん。

それなりに好戦的な性格をしているのでこういった大規模戦闘の機会は逃したくないといったところか。

「決まっていなと言いたいところだが、既に2人は確定している」
「誰のです?」

ノネットさんの間に答えず、視線をこちらへと向けるヴァルトシ
ユタイン卿。

……あれ、もしかしくても私なのか。

「もしかして確定しているのって……」

「ユーリとモニカの2人を出せと総監からの指示があった」

「偶にはラウンズらしく働けということですか」

「……そういえば、ここ1年国外に出た記憶が無いわね」

「そういうことだ、役職上仕方ない事とはいえモニカの言うように
ここ1年程前線に出ていないだろうか?」

私はETRLの統括官として、モニカはロイヤルガードの仕事を
兼務している関係で前線勤務をここ最近行っていない。

ラウンズの人数も十分足りていたし、私とモニカを除いた面々は
一部を覗いて前線に赴くことに意欲的だったので、枠が減るから兼
務している職を優先してくれとの言葉を貰ったことがある。

あえて誰とは言わないでおくけれど……。

「最近、私がラウンズである事を忘れられている節があるので、ラウンズらしく頑張ろうと思います」

「……何があった？」

「技研の部下から、そういえば騎士でしたねと真顔で言われたもので……」

ちなみにそんな言葉を言ってくれたのは、私の副官的立ち位置のメリッサだ。

悪意が無かった事に加えて、自分でもラウンズらしい事といえば服装ぐらいいしが無かった自覚があるので、結局怒ることも出来なかったのだけだ。

「……お前の事情は置いておくとして。お前とモニカは確定だ、いいな？」

「はい」

モニカと同じ戦場に出るのは随分と久しぶりだ。

ラウンズとなって最初の戦場は一緒だったのだが、以降は同じ地

域に居ることはあっても同じ戦域に居る事は無かった。

久しぶりの前線に赴くことに若干の高揚感を感じながら、ETR
Lの仕事はどう調整するかを考える。

予算交渉とか計画策定は既に終わっているから、基本的には現場
任せでも

「それと、ユーリにはやってもらいたい事がある」

「私に、ですか？」

「そうだ、こういつた分野はユーリかアッシュフォード、次点でモ
ニカが向いていると私は考えている」

思わず、アッシュフォードと目を見合わせる。

私とアッシュフォードに共通点なんて有っただろうか？

そして、次点でモニカの意味もよく分からない。

「ユーリとアッシュフォード卿に共通点など有りましたか？」

「銀髪繋がりにって線もあるな」

「……ジノ黙って」

私だけでなく、他のメンバーもヴァルトシュタイン卿の言葉を理解出来なかったらしく口々に意見を出す。

ジノの言った銀髪繋がりというのが意外に間違っていないんじゃないかと思う私は疲れているのかもしれない。

「はあ、単純な事だ。頭を使うのが得意なのがこの3人だろうと」

「確かにユーリにはそういった分野が似合うな」

「むしろ、似合うから騎士だって事を忘れられていたんじゃないか？」

「ヴァインベルグ、そうはつきり言ってやるな」

「幽霊ラウンズ」

「……いつの間に私の悪口を言い合う場になったんですかね？」

本気で貶している訳ではない事は分かっているが、悪口を言われて良い気分にはならない。

さりげに一番酷いのはエルンスト卿、それとアーニヤの一言は余計なお世話だ。

「それで、卿に何をさせる気なのです？」

「派遣する地域とメンバーの選定をして貰いたいだけだ」

ダンマリを決め込むかと思われたブラッドリー卿が話を戻したところで、ヴァルトシュタイン卿から妙な言葉を聞いた。

派遣するメンバーは基本的に皇帝陛下、もしくはフアランクス特務局総監が行うべき事柄だと思っただけど……。

それに、派遣する地域ってどういう意味なんだろうか。

「……私より年上なのがヴァルトシュタイン卿を含めて4人居ますが」

「先程言ったとおりだ。戦術レベルならノネットに任せるが、戦略レベルとなるとお前が適任なのだ」

「……色々と納得し難い部分がありますが、お引き受けします」

元より断る選択肢なんて存在しないのだろうし、素直に受けお

く。
ヴァルトシュタイン卿は自分で決めるつもりは無いようだし、ノネットさんとエルンスト卿は前線で切り結んでいる方が似合っている。

ブラッドリー卿は……面倒とか言って断りそうかな。

「そうか、では頼むぞ」

「幾つか聞いておきたいのですが、人数の制限はあるのですか？」

「私が本国に残る事は決まっている。残り全てを連れていくのはおそらく許可されないと思うが」

現状のラウンズは、空席2つの計10人。

私とモニカ、それにヴァルトシュタイン卿を除けば残りは7人。

「もう1つ質問なのですが、派遣する地域というのはどういう意味ですか？」

「E・Uとの戦線は大きく分けてもヨーロッパとアフリカの2つの地域で展開されている。ヨーロッパを例に挙げればスペイン州やイタリア州、最近ではさらに北上したロシア州での戦闘も計画されている状況だ」

「広すぎませんか？」

「相手戦力を分散させる為にわざわざ広範囲で戦線を作っているのだ、相手側は薄く広くの考えで部隊を展開せざる得なくなるからな」

相手戦力の分散という意味では悪くはないかもしれないが、それどころからも戦力を集中させることが出来ないもので攻め切れないんじゃないだろうか？

ヨーロッパ戦線は、スペイン州・イタリア州・ロシア州の3方面

アフリカ戦線は、北アフリカ・南アフリカ・西アフリカの3方面

E・U・という国家を落とすなら、政治・経済の中心であるフランス州及びドイツ州を狙いに行けば良い。

その観点から言えば唯一制圧したポルトガル州に戦力を集中させ、スペイン州・フランス州・ドイツ州と北上していくのが最善策ではある。

……ブリテン島を前線基地に出来れば一番良いのだけど、政治的問題がある以上手出しは不可能だしね。

「E・U・戦線の総司令官はシュナイゼル殿下であった筈ですが、最終目的は？」

「一定程度の打撃を与え、歯向かうための牙を抜く程度良いそうだが後は適切な時期に停戦することだが」

「おやおや、最初から停戦をお考えなので？」

「不満か、ルキアーノ？」

「出来れば長く続いてもらいたいですねえ」

「戦争なんて非効率極まりない手段、短期間で片付けないとブリタニアという国が持ちませんよ?」

戦争によつて技術革新が生まれるのは事実だが、膨大な戦費に見合うかと言われれば首を捻らざるをえない。

自国とは関係ない第三国での戦争ならば戦争特需として経済的利益が確保できるが、自国の戦争となると不景気一直線だろう。

ブリタニアがこれだけの戦争をしているのに経済成長しているのは、領土と資源を獲得できているからだ。

だが、このやり方はいずれ行き詰まる。

「戦争の是非についての討論ならば他所でやれ。ユーリ、選定は2日後まで済ませておけ」

「……了解です」

「各員、準備はしておけ。では解散」

一部から期待の視線を向けられながら、ヴァルトシュタイン卿に続き私も部屋から退出する。

さて、どうやって選定したものか……。

/ Chapter
Biller 16
END -
Euro
University
War

アニメでは殆ど触れられなかったE・Uのお話、時系列的に正しいのかは不明。

……ライには会話が無く、スザクに至っては名前すら出ていませんが全員揃っています。

今話から3章としていますが、この章はE・Uとの戦争話オンリーになる予定です。

その為しばらくは“Euro Universe War / ”といった感じのタイトルが続きます。

何話で終わるのか不明ですが、3話ぐらいですつきり終わらせたいのが本音。

でも、書き始めると長くなりそうなのがちょっとしたジレンマ。

戦闘描写には全く自信が無いので戦闘シーンを省く可能性が極めて高いですが、暖かく見守っていただけると幸いです。

ご意見・ご感想宜しくお願いします。

大西洋上に展開するブリタニア遠征軍の旗艦である空母エセックス。

その艦に現在6名のラウンズが集結している。

皇帝陛下の命によりE・U・戦線への投入を決定されたラウンズであるが、現地状況や戦況を知る為に司令官であるシュナイゼル殿下の元へと足を運んでいる。

「見渡す限り海ね」

「大西洋の真ん中だから当然だな」

「でも、こうして周りを見渡すと国外に来たんだなああって実感が湧かない？」

「まあ、否定はしないけどね」

兼務している役職を優先しているおかげで、ここ1年程はラウンズとして海外遠征をしていない。

そんな状況をさすがに危惧したのか、ファランクス総監により名指しで派遣人員に選ばれる事となった訳だけ。

「……引籠もり？」

「失礼ね、職務に忠実なだけよ」

「まったく　　って、その3人投身自殺とか止めてくれよ？」

アーニヤの失礼な言葉を否定していると、いつのまにか男3人が甲板の端っこから海を眺めていた。

空母は駆逐艦など他の戦闘艦艇に比べて安定性は高いが、それでも海上に居る以上は波の影響を受ける。

甲板から落下しましたとか冗談で済まなくなりそうだから、ぜひとも止めてほしいんだけど。

278

「いや、そんな事考えていませんから」

「そうだぞ、第一この位の高さだと死ねないんじゃないか？」

「論点はそこじゃないと思うけど……」

「落ちても死にはしないと思うけど、不名誉な事なんだから止めてくれ」

海面からの高さは約15メートル、水だし即死は無いだろうけど水流に巻き込まれて溺れる可能性は十分にある。

今は停泊しているから問題無いかもしれないけど。

「とりあえず、自殺談義は止めて早く行かない？ シュナイゼル殿下を待たせる訳にもいかないでしょう」

「それもそつだ、その3人早く来るように」

後ろから、いつの間に僕はセット扱いになったんだろうとかいう声が聞こえてきたけど、あえて無視する事にする。

個人的にはアーニヤも加えた4人セットが丁度良いと思うんだけどね。

艦橋へと上がり、総司令官であるシュナイゼル殿下へと着任の報告を行う。

指揮下に入るわけでは無いが、事前の調整は必要だ。

「お久しぶりです、シュナイゼル殿下。 皇帝陛下の命により、ラ

ウンズ6名がE・U・戦線へと投入される事となりました」

「ありがたいね。君たちの参戦は兵士たちに良い影響を与えてくれそうだ」

「……体調でも悪いのですか？ いささか顔色が優れないようですが」

普段のシュナイゼル殿下であれば何を考えているか分からない表情で対応してくれるのだが、今は解りやすいぐらいに微妙な表情をしている。

この人にしては珍しい表情ではあるが、あまり聞きたくないような気がする。

「いや、何とというか君とこつこつ会話していると違和感を覚えてね」

「……成程。相変わらずお元気そうで残念です、とでも言えば宜しかったですか？」

「ふふっ、そうだね。君との会話にはやはり嫌味の1つでも混ざっていないと楽しくない」

マルディー二伯爵とモニカを除いた周囲の面々が私の発言に啞然としている様子だが、その手の視線にはもう慣れた。

何時もの事と薄い笑みを浮かべているマルディーニ伯爵と、ため息を吐いて諦め顔のモニカの様子の方が余程気になる。

ちなみに、一番表情を崩しているのは意外にもアツシユフオードだった。

アーニヤ？ 表面的には表情を変えてないけど、身体の動きが止まっているので一応驚いてはいるらしい。

「殿下それにウィンスレット卿も、じゃれあうのは構いませんが本題に入りませんと」

「そうだね、楽しいお話は次に持ち越しかな？」

「……じゃれあうという言い方は若干心外ですが、本題に移るのに賛成です」

楽しそうに笑うシュナイゼル殿下を一瞥し、モニターに映された地図に視線を移す。

ヨーロッパとアフリカの戦域が表示されているが、ポルトガル州以外に部隊展開の表示が無い。

「殿下、ポルトガル州以外の部隊はどうしているのです？」

「引き上げさせたよ。予想以上に防御陣地が強固だね、フランス州に先行上陸させた部隊は戦力の3割を喪失して撤退」

「……3割はさすがに高すぎますね」

「無事に制圧できたポルトガル州でも上陸の際に2割の戦力を喪失している。艦から事前に砲撃を行った上での上陸でこの被害だからね」

肩を竦めて答えるシュナイゼル殿下だが、正直笑えない状況だ。

部隊の3割を喪失というのは、軍の定義上は以後の戦闘継続が不可能であり全滅という扱いになる。

遠征軍という性質上、容易に人員補充とは行かないので後方に回すか他の部隊に合流させるかの二択しか無い。

「今後の予定は？」

「ポルトガル州を橋頭堡として順次北上し、フランス南部まで進撃すれば相手を話し合いの席に付かせる事も可能だろうね」

「その後は話し合いで幾らかの領土を巻き上げると？」

「外交交渉の結果だよ、戦争をするなら利益を得なければ意味が無い。ウインスレット卿、君なら次はどこを攻める？」

「……イベリア半島を制圧した後にアフリカ北部・西部・南部と南下していくべきかと。E・Uは鉱山資源をアフリカとロシア州に頼っているようですし、今後の弱体化を考えるなら取っておいて

損は無い地域だと思いますが」

サクラダイトの最大産出地域はエリアー１であるが、その他の地域でもそれなりの量が確認されている。

E・U・の統治下にあるアフリカでもサクラダイト鉱山は確認されており、現在積極的に採掘活動が続いている。

東部を除いたのは資源に恵まれていない事に加えて、紅海を挟んで中華連邦の領土であるアラビア半島と接する事になる為だ。

北部に位置する旧エジプトを制圧すればどちらにせよアラビア半島と陸続きに接してしまうが、接する部分は少ない方が良くに越したことはない。

「ふむ、何にしてもスペイン州の制圧が先決というのは共通の考えかな？」

「そうですね。スペイン州まで制圧すれば心理的圧力を掛ける事も出来ますし、隣接するフランス州との境界にはピレネー山脈が横たわっていますから時間稼ぎも十分可能でしょう」

「逆に、フランス州に攻め入る時は障害になりそうだね」

「そこは殿下の見事な手腕を期待していますよ？」

大まかな方向性を話しあった後、私達はブリーフィングルームへと移動して来た。

空母に限らず海の戦闘艦艇は慣れている人でも迷い易いらしい、私達もこの部屋に行くのに若干苦労した。

「作戦開始は明日だが、今のうちに大まかな説明はしておく」

「私としては単純な作戦を希望するぞ」

「ジノは単純、でもユーリは捻りすぎてやっかい」

「……安心していい、今回の作戦は何ら変哲のないセオリー道理のものだ」

「面白みが無い方が安心できて良いわね」

今回の作戦の鍵は時間差だ。

艦隊はスペイン州とフランス州に接するビスケー湾まで進み、そこからスペイン州沿岸に向けて艦砲射撃を行う。

艦砲射撃の後、上陸部隊に先駆けて私達が上空から奇襲を掛ける。

防御陣地の破壊もしくは破壊出来ずとも混乱状態を引き起こし、その隙に部隊を上陸させ進撃させる。

同時に、スペイン州との国境に張り付けてあるポルトガル州の部隊も進撃を開始させ、2方向から侵攻し州都マドリードを目標す。

「堅実な作戦ですね」

「難しい作戦じゃなくて少し安心しました」

「……そういえば言っていなかったけど、アッシュフォードと枢木は特に頑張ってくれよ？」

「なんでライとスザクだけなんだ？」

「多分2人とも新人だから」

「……アッシュフォード卿と枢木卿を選んだ理由ってそれだったのね」

「アーニヤが正解、というかモニカもジノもこれ位気づいてくれないかな？」

今回派遣されたのは私とモニカの強制組に加えてジノとアーニヤ、そして新人であるアッシュフォードと枢木の計6名。

「えっと、どういう意味でしょうか？」

「枢木は分からないと、アツシユフォードは分かるか？」

「……有用性を示せ、ということでしょうか？」

「正解。新人は自分の価値を周囲に示さなければならない、その為には大規模な戦闘に連れて行くのがラウンズの流儀らしくてね」

「そういえば私とアーニヤもネットに色々は無茶をやらされた気がするなあ」

実際に私とモニカも連れていかれたし、ジノやアーニヤも同じように経験している。

ラウンズに取り立てられたとはいえ新人である事には変わりはないので、フォロー役がそれぞれに付く。

今回の場合ジノは枢木、アーニヤはアツシユフォードのフォロー役としている。

機体特性から考えると逆の組み合わせの方が良いのだが、人間関係的な面を考えるとこちらの方がしっくりと来る。

こんな所で死なれても困るし、円滑にコミュニケーションを取れる相手の方が戦場では何かと都合が良いだろう。

「まあ、そういうことだ」

「なるほど。よろしくね、アーニャ」

「善処する」

「フォローは任せとけよ、スザク！」

「あはは、出来るだけ自分で頑張るよ」

……一抹の不安を感じるが、これでもラウンズに選ばれるだけの
実力と判断能力はあるし大丈夫な筈だ。

まあ、余程無茶な事をしない限りは機体性能でどうにかなるだろ
うし気にするべき事でもないかな。

「明日の作戦は早朝から行われるので今日は早めに休むように。
以上で解散」

・旗艦エセックス

アニメでは空母こそ登場するものの、艦名は付いてなかったので適当に命名。

命名の元となったエセックス級航空母艦は第二次世界大戦におけるアメリカ海軍の主力空母。

・タイトル

前話で書いた通り3章は全て“Euro Universe War / ”のタイトルですが、の部分には全て色が入ります。

この色は無作為に決めている訳ではなく、それなりに意味があるのですが現状だと解りませんよね。

今回はスペイン州攻略戦

スペイン州沿岸への艦砲射撃が開始され、格納庫で機体の最終点検をしている私達にも振動と発射音が伝わってくる。

「システム異常なしと。そっちの準備は終わった？」

「こつちも終わり、単にシステムが正常に動作するかを確認するだけなんだけどね」

「戦場で正常に動作しなかったら色々和不味いんだから、しっかりと確認して欲しいんだけど？」

「分かってるわ、単に大した手間じゃ無いって言いたいただけよ」

いざ戦場に出で、武装が使えませんでしたとかレーダーが正常に働きませんでしたなんて事態になったら目も当てられない。

特に今回は大きな反撃が予想される上陸作戦なのだから、機体は完全な状態にしておかなければ危険が伴う。

「その4人、機体点検は終わったのか？」

「もちろん終わってるぞ。出撃を今々かと待ち構えているところだ」

「それは何よりだ、後15分もすれば出撃だからな？」

少なくとも、表面上は、この場に居る6人とも緊張の色は見られない。

枢木とアッシュフォードは若干表情が固く見えるが、戦闘に突入すれば自然と固さも溶けるだろう。

>進路クリア 順次発艦してください<

管制からの言葉を受け、私の乗るソーサラー、ジノのトリスタン、枢木のランスロット・エアキャヴァルリーの順で発艦していく。

一昔前の航空機ならば電磁カタパルトで射出されるのだろうが、フロートユニットは垂直離着陸が可能なので残念ながらカタパルトからの射出という体験は経験できない。

「いつてらっしゃい、私達も10分後に出るわ」

「頑張つて」

「頑張ってください」

先行する私達3人に対して、射撃・砲撃を得意とするモニカとアーニヤ、アッシュフォードの3人は10分遅れて参戦する事になっている。

高速戦闘を得意とする私達3人が敵陣地を攪乱し、遅れて到着する3人が確実に陣地の戦闘継続能力を奪う。

行して突入する私達のリスクは大きいが、この程度をこなせずしてラウンズを名乗るわけにも行かない。

幸い艦砲射撃で少ないダメージを与えているようなので、少しは楽になっているようだが。

フォートレスモードのトリスタンを先頭に、ソーサラーとランスロットが続く。

3次元的な機動性能ではソーサラーの性能が突出するのだが、直進性能ではトリスタンのフォートレスモードが他を引き離している。

「ジノと枢木、私達には2つの選択肢がある」

「いきなり何だ？」

「侵入高度を決めてなかった、高空と低空のどっちが良い？」

「どちらのリスクが高いのですか？」

「接近してしまえばどちらも変わらない。ただ高空はレーダーに掛かるのが早いから迎撃されやすいだろうし、低空の方が安全だとは思っ」

低空は敵のレーダー探知に掛かりづらいが、海面ギリギリを飛ぶことになる為に速度は出しづらい。

逆に高空ではレーダー探知に早い段階で引っ掛かるが、速度が出せるので回避が容易という利点もある。

「よし、じゃあ私は高空から行くことにする」

「私は低空からだな、柘木はどちらが良い？ 個人的には低空をオススメするけど」

「あの、分散してもいいのですか？」

「むしろ、二手に別れたほうが迎撃戦力を分散できる。敵さんとなれば高空と低空の2つに対応しなきゃいけない訳だし」

「……低空から行きます、突入後は気にしなくていいんですよね？」

「ああ、突入後はとにかく火器を破壊する事、KMFも勿論も対象に含むからな」

「他に言うことは？」

「そろそろ敵の射程に入る。……そして私達は負ける事を許されない、いいな？」

「了解」

上を飛ぶトリスタンが一気に加速する同時に、炸裂音が響く。

対航空機砲による対空迎撃が始まった。

「盛大な歓迎だな！」

「口を動かす前に機体を動かせ、それにミサイル迎撃が無いだけマシだ」

低空を飛ぶ私達には未だ迎撃が無いが、もう少しすると野戦砲による迎撃が始まる。

危なげ無く高空からの侵入を果たしトリスタンが敵陣地上空を通過、KMFモードに可変し攻撃を開始。

時を同じくして低空から侵入する私達に気づき、野戦砲と対航空

機砲による迎撃が始まるが、既に遅い。

わずかに高度を上げ一気に最高速度まで加速する。

狙われやすい高度ではあるが、既に目視できる距離まで近づいてるので低空に留まる意味も無い。

沿岸陣地を目前にして腰部の左右にマウントしているヴァリスを両手に構える。

すれ違いざま2発を叩きこみ、そのまま通過。

戦果を確認する事なく直ぐに機体を反転させ、手近な陣地に次々とヴァリスを打ち込み重火器とKMFを破壊していく。

沿岸陣地の砲塔は全て海側に向けており内陸部に入ってしまったえば反撃を受ける確立は格段に低くなる為、比較的余裕を持って射撃を行える。

> 第1次防衛ライン突破されました！<

> 敵はたったの3機だ、弾幕を張り続ける！<

「おやまあ、随分と混乱してるようじゃないか」

「作戦通りに事が進んでいるようで」

ジノの言葉に答えていると、突然の衝撃が機体に加わる。

直撃した訳ではないが、数メートル離れた場所に着弾したらしい。

「 ウィンスレット卿、沿岸から10kmの場所に大量の野戦砲が並んでいます！」

「 おいおい、沿岸陣地の近くに向けて砲撃とか正気かよ？」

「 正気かどうかともかく、撃たれた以上はやり返すしか無い」

「 けど、沿岸陣地の配置範囲が広すぎて苦労している現状じゃ叩きに行く戦力が足りないぞ！」

おそらくは第2次防衛ライン、陣地よりも手前の陸地を狙えば私達に当たると考えたか。

この分だと、さらに遠方にも射程の長い砲を配置していると考えるのが妥当だろう。

> 撃て撃て、いくら早かろうが飽和攻撃には耐えられまい！<

> 砲撃一発でも当てれば終わる！<

飛来する砲撃を回避しながら陣地への攻撃を繰り返すが、回避動

作を行いながらだとどうしても効率が下がる。

ソーサラーの武装は、ヴァリス以外だとレーザー・実体刃複合刀“シュベルト”しか装備されていない。

今以上に陣地に接近して攻撃すれば後方からの砲撃はおそらく止めだろうが、射撃武装であるヴァリスと比べれば攻撃のテンポがどうしても遅くなる。

加えて陣地からは近接防御用の小口径火器による射撃が今なお続いており、下手に近づくと損傷を負いかねない。

「落ち着け。 私達の目的はあくまでも攪乱、本命は」

沿岸陣地へと突き刺さる赤い閃光、モルドレッドのシュタルクハドロンだ。

そして、周辺の防御陣地も見慣れたヴァリスによる射撃で次々と沈黙していく。

「 私達なんだから忘れちゃ駄目よ？」

「 おいおい、良いところ取りかよ」

「 それが作戦、ジノ達は前座」

「 前座って言い方はどうかと思うけど、作戦は作戦だよね」

レーダー表示される3つの機影、アーニヤのモルドレットにアッシュフォードのランスロット・クラブ・エアガナー、そしてモニカのリゾルト。

モルドレットはシユタルクハドロン、ランスロット・クラブは狙撃モード、リゾルトはヴァリスの連結モードで洋上から次々と陣地に攻撃を加えていく。

> 早く迎撃しろ！<

> しかし、砲門の大半を上陸した3機に向けていて <

> 報告します！ 敵機6機はいずれもナイトオブブラウズで <

> そんな情報はどうでも良い、先行してきた3機は第2次防衛ラインに任せろ！ 我々は洋上の3機を迎撃だ！<

「ジノ、枢木、ここはモニカ達に任せて私達は後方を叩きに行くぞ」
「了解」

砲撃に苦労した私達ではあるが、本来は航空戦力から見れば野戦砲など脅威には成り得ない。

射程距離などKMFに勝る部分はあるものの、空からの攻撃には

無力なのだ。

「旧式兵器の相手は楽　って、危ないな！」

「沿岸での迎撃で見掛けないと思ったら、こっちで運用していたのか」

コックピット内に鳴り響くアラート音に煩わしさを感じながら、次々と打ち放される地对空ミサイルを視線に捉える。

軍隊というのは相互補完が出来る兵器同士で運用するのが正しい。

故に、空からの攻撃に対して無力である砲兵部隊に対空兵器を随伴させるのは至極当然のことだった。

「回避し続けますか？」

「いや、風評的な事を考えれば早く終わらせたい所だ」

「ということは、突っ込むしか無い訳だな！」

相変わらず先陣を切るジノに、遅れを取ってたまるかと言わんばかりに私と枢木もミサイル網に突撃する。

ロックオンされたとアラートが鳴り響くが、寸前の所で回避し続ける。

ミサイルは急な動きには対応しきれないので有効な回避方法なのだが、他人から見ると自殺行為みたいなものらしい。

……亡霊と揶揄される原因がこれなんだけどね。

>これだけ撃ってるのになんで当たらないんだよ！<

>ミサイルがすり抜けてやがるのか！<

>怯むな、撃ち尽くしても構わん！ あれを落とせばブリタニアの士気も下げられる！<

「必死になっている所を悪いけど、敵を目の前にして容赦してあげる程優しくも無いんだよね」

「……独り言か？」

「気にしないでくれ、無線から聞こえる相手の叫び声を憐れんでいるだけだ」

ミサイルを掻い潜り、ある程度接近出来たところで両手に持ったヴァリスを車両に向けて連射する。

脅威となる対空ミサイルを搭載した車両を優先的に狙い、野戦砲は後回しだ。

その後、ものの数分で対空車両と砲兵部隊は全滅。

「弱い者苛めは好きじゃないんだけどなあ」

「強かろうが弱かろうが、敵である事に変わりはない」

「分かってるって」

騎士としての気概が強いジノとしては、こういった抵抗できない相手を攻撃するのは嫌なのだろう。

しかし、見逃した敵が明日には銃を持って再び襲いかかって来る事もありえるので見逃す訳にもいかない。

逃げる兵士を撃つとまでは言わないが、車両などの兵器は完全に破壊しておくべきだ。

「……作戦はこれで終了ですか？」

「モニカ達が終わってれば」

「呼んだ？」

いつの間にか近くに来ていたモニカ達と合流、見える範囲の沿岸陣地は全て沈黙させたらしい。

結局全てを破壊し終えたので管制にその旨を伝えると、直ぐに部隊を上陸させるとの事だった。

「それで、私達はどうするの？」

「上陸が終わるまでは周辺警戒、完了したら一度帰還して補給の予定」

「これでやっと一仕事終わったなあ」

「出番少なかった」

「いや、アーニヤが1番目立っていたと思うけど……スザクはどうだった？」

「自己採点としては悪くなかったかな？」

各々が今回の戦いについて意見を言い合っているのを聞き流していると、管制官から上陸完了の連絡が届く。

>こちら管制、全部隊の上陸が完了しました<

「了解、一度補給の為に全機帰還する」

>準備をしておきます。お疲れ様でした<

管制官からの報告を受けて、6人全員で帰還する。

途中で上陸部隊の上を通った際に手を振っている兵士が何人か居たので、ジノが調子に乗って上空を旋回していたりもしたが、それ以外は何事も無く空母工セックスに帰還した。

T o B e C o n t i n u e d .

E・U・編、第3話スペイン州攻略戦です。

“Part・1”と付いている事が分かるように、次回もスペイン州攻略戦の続きとなります。

今回の話には少ないながらも戦闘描写らしきものを入れてみました。結果の羅列といった方が正しいかもしれませんが、現状だとこれくらいが限界なようです。

KMFの名称については最初登場の際は正式名称で書いて、2回目以降を書く時には短縮して書きます。

1回目“ランスロット・エアキャヴァルリー” 2回目“ラン
スロット”

1回目“ランスロット・クラブ・エアガナー” 2回目“ラン
スロット・クラブ”

ご意見・ご感想宜しくお願いします。

空母エセックスへと帰還した私達を待っていたのは、何故か甲板まで出てきていたシュナイゼル殿下とマルデー二伯爵だった。

次の出撃には時間を置くとの事だったので、再び艦橋へと上がり現在の状況を聞きに行く。

「お疲れ様、君たちのおかげで無傷で上陸を完了したよ」

「無事に作戦が成功したようで何よりです」

「君もクルシエフスキー卿も久々の実戦と聞いていたけど、見事なものだったよ」

「お褒め頂き光栄です。ラウンズとして不甲斐ない戦いをする訳にもいきませんので……うまく事を運べて安心していきます」

シミュレーターでの訓練や稼働実験・武装テストなどでKMFに乗る機会はあったのだが、一瞬の判断が生死を分けると言われる戦場で1年近いブランクは致命的な事になりかねない。

今回は私もモニカも無事だったし、ある程度の“勘”も取り戻せたので次からは危なげない戦い方が出来るだろう。

「それにアツシュフォード卿と枢木卿の働きも見事だったよ。この戦果ならば皇帝陛下も喜ばれるだろう」

「ありがとうございます」

「光栄です」

シュナイゼル殿下の賞賛に答えるアツシュフォードと枢木だが、私には皇帝陛下が喜んでいる姿がまったく想像できない。

皇帝陛下は、ラウンズが挙げた戦果を気にしている様には見えな
いんだよね。

「シュナイゼル殿下、ひとつ宜しいでしょうか」

「どうしたんだい、クルシエフスキー卿？」

「ポルトガル州からの侵攻はどうなったのでしょうか？」

ポルトガル州とスペイン州の州境では両軍が対峙している状況で、
こちらの上陸と同時に侵攻を開始する手筈であった。

あちらにはE・Uの主力KMF“パンツァー・フンメル”が重
点的に配備されているとの話も聞いていたが、大丈夫なのだろうか。

「それは私から説明しましょう」

「マルディーニ伯爵」

「簡単に言えば、あちらでは殆ど戦闘らしきものは起こっていないのよ」

「州境での迎撃を放棄したのですか？」

「ラウンズ6人が戦線に投入されたとの情報が州境のスペイン州軍にも届いていたらしくてね。州境に居た部隊の4分1がマドリール方面に即時退却、それに合わせる形で他の部隊も徐々に後退しているのよ」

「こちらの侵攻はその退却スピードに合わせている、という事ですか？」

「ええ、だから戦闘といえる程のものは起こっていないの。多少の銃撃戦は報告されているんだけどね」

州都マドリールは周囲を山に囲まれており守りやすい場所ではある。

各地に分散している防衛戦力を集中させたいのかもしれないが、本来なら遅延作戦を展開してしかるべき状況だと思っただけ……。

「ともかく、今回の作戦は終了だよ。君達は身体を休めてくれ」

「まだ1時間程度しか行動していないのですが？」

「先程言ったように今のところ抵抗が無いからね、切り札を簡単に切ってしまうと価値が下がってしまう」

「……戦線がマドリード近郊に及ぶまで待機ですか？」

「さあ、抵抗が激しい場所があれば君達に出で貰いたいと考えているけどね」

温和な笑みを浮かべながら答えるシュナイゼル殿下の様子からして、問うても答えてくれる気はないのだろう。

私達ラウンズに課せられた任務は、E・U・戦線への参加。

具体的な目的が指定されていない為、基本的には遠征軍と歩調を合わせざるを得ない。

「……そういうことでしたら、しばらく休ませて頂きます」

「おや、意外とすんなり受け入れたね」

「戦闘に参加するという目的は既に果たしていますし、制圧作業なんて私達には出来ませんから」

「遠征軍として来ている彼らは優秀だよ、しばらくは彼らの働きを見守って欲しい」

私達に出来るのは敵を攻撃する事だけ、その後の施設占領や陣地の構築などは専門の人間がやるべき事だ。

同じ軍人といえども分野が違えば素人である事に変わりはなく、口出した所で邪魔になるだけだろう。

「了解です、それでは失礼」

「ついでに言うようで悪いのだけど、アッシュフォード卿と枢木卿を貸してもらえないかな？」

「戦闘指揮は私が執る事になっているのですが？」

「違うよ。少し話し相手として貸して欲しいというだけだよ」

「……本人達が同意するならば、どうぞ」

「ありがとう、引き留めて済まなかったね」

「いいえ、では失礼します」

アッシュフォードと枢木を残して、4人で艦橋から出る。

後ろ髪引かれるような様子のジノが居たりもするが、強引に引っ張って連れて行く。

「でも、良かったのかしら」

「何が？」

「ゆっくりお茶なんて飲んでいて良いのかって話よ」

艦内探検だと意気込んでいたジノとそれに追従したアーニヤの2人と別れた私達は割り当てられた士官室で、ゆったりとお茶を飲んでいる。

すると、先程まで思案顔であったモニカが疑問をぶつけてくる。

「不満？」

「戦うのが私達の職務でしょう」

「……私達が出れば勝てる、けれど私達が出なくても勝てるならそれに越したことはないだろう？」

「それはそうだけど……」

「私達が前に出過ぎれば自然と頼るようになる。それは避けなきやいけない状態だ」

「そういうものなの？」

「そういうものだよ。私達は戦況をひっくり返せるジョーカーであれば良い、常在戦場である必要は無いよ」

あくまで私の考えではあるが、紛争や小規模戦争の際にラウンズの前線投入が少ない理由はこれだと思っている。

切り札は出し惜しむからこそ価値が出る、とでも言うべきなのか。

「その辺りはイマイチ理解し難いわ」

「シュナイゼル殿下が私達に休めといった理由なんだけどね」

「使えるものは使えば良いと思うのは間違ってる？」

「いや、間違ってる。けど、使うなら最大の効果を発揮する様に使うべきだって話」

テーブルに肘を寄せ、いささか行儀の悪い姿勢で眉間に皺を寄せながら思案するモニカの姿に思わず苦笑を漏らす。

文武両道を地で行く娘なのにこついった駆け引き、悪い言い方をすれば謀略が絡む話には弱い。

クルシエフスキー家は上位貴族であり駆け引きめいた事も多々あ

る筈なのだが、そういった事柄には関わってこなかったのかもしれない。

普通の親ならば子供にそんな面を見せないようにするだろうし、当然といえば当然なのかもしれないが。

「眉間にしわ寄ってるぞ」

「っと、いけない」

はっとした様子で眉間をマッサージしている姿に再度笑みを零す。

10代なんだし気にする必要も無い気がするのだが、女の子は若い時からのケアが大事なんだと言っていた気がする。

まあ、モニカが綺麗だと見ていて目の保養になるから良いんだけどね。

「そうやってる姿は小動物みたいで可愛いな」

「……ユーリって、照れ屋の癖にさらっと恥ずかしい事言う時があるのよね」

「自覚はしてる」

「性質が悪い性格ね、嫌いじゃないけど」

「それはどうも。……場所が変わっても、話の内容はあまり変わらないな」

「いい加減付き合いも長いからね。こついう関係は嫌い？」

向けていた視線を一度天井へとずらし、再度私へと視線を向ける。

僅かに首を傾げながら問いかけるモニカの姿にいつも通りの返事を返す。

「いや、心地いい関係だと思ってる」

「そう、同じ考えで良かった」

コロコロと笑う姿に安堵感と嬉しさを感じる辺り、私も随分とモニカに入れ込んでいるのだなと実感する。

一番身近な存在だからなのか、それとも特別だと認識しているからなのかは区別が付かないけれど、大事にしていきたい関係だと思う。

「そういえば、明日からどうやって時間を潰そうか」

「出撃しない事が前提なんだ……」

「どんなに早くても数日は掛かるんだから仕方がない」

「んー、毎日お茶会する？」

悪戯っぽい笑みを浮かべながらの問い掛けに、勿論と返ししながら今後の予定を練っていく。

振って湧いた突然の余暇、一体何日間の休みになるのやら。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
.

連続更新はそろそろ終わりです。

今回は閑話のようなお話、あと2話ぐらいでスペイン州攻略戦が終わる予定ですがE・U・編はいつ終わるんだろう……。フランス州侵攻はR2開始後が良さそうだから、アフリカ攻略が先かな？

どうにもライとスザクの出番が無いのですが、どうやって作るうか。

ご意見・ご感想宜しくお願いします。

予期していなかった休日が2桁に達した頃、ついに私達の出番が回ってきた。

「抵抗らしい抵抗もないまま進撃した結果、予想以上に早くマドリート近郊に到着したよ」

艦橋に集められた私達に対して、シュナイゼル殿下から説明が行われる。

当初はまったくの無抵抗さから何かの罠があるのではないかと疑いながらの進軍だったのだが、進めど進めど何の変哲もない光景が広がっているだけだったらしい。

遅延作戦をする訳でも無く罠を仕掛ける訳でも無い、一体何を考えているのやら。

「直ぐに攻略を始めるのですか？」

「いや、戦闘が無かったとはいえ連日の行軍で兵にも疲れが溜まっている頃だ。一日猶予を置いてからだね」

「……明日ですか」

「州知事に対して降伏勧告も既に出している、期限は明日の午前9時だ。おそらくは拒否されるのだからうけどね」

「未だ戦力の大半を残している現状で降伏を受け入れるつもりは無いだろう。」

「今回のスペイン州軍との交戦は私達が上陸した北部沿岸での戦闘のみ、後は散発的に銃撃戦が行われる程度であり戦力には随分と余裕がある筈だ。」

「……この中で視力に自身がある奴は居ないか？」

「いきなり何を言ってるのよ」

「唐突過ぎ」

「……私達の進路上にKMFらしきものが見えるんだが確認してくれないか？」

「ん、空に？　　おいおい、E・Uもフロートユニットを実用化したのか」

「本当だ。でも“パンツァー・フンメル”とは違うみたいだけど」
「新型かな？」

中継地を経由しマドリッド攻略の為に飛行していた私達の進路上に現れた謎の飛行物体。

その造形はランスロットのようなスリムな人型であり、E・Uが配備している“パンツァー・フンメル”とは大幅に異なる印象を受ける。

このタイミングで新型機を投入、いやこのタイミングだからこそ新型機を投入したのか？

「空を飛んでいようが、落とすだけでしょ？」

「私達にとってはそうだけど、陸上に居る連中からしてみれば空からの攻撃というのは怖いものだろう」

「士気が下がるかもしれない、ということですか」

「んー、私達が手っ取り早く落とせば解決なんじゃないか？」

「珍しくジノに賛成、正論」

「自分もジノの意見に賛成です」

別に戦うなと言っている訳ではない、むしろジノの言うように素早く落としてしまえば良い。

私が問題にしているのはE・U・側にフロートユニットを作るだけの技術があり、それを実戦に投入してきた事だ。

「仕方がない、今は攻略に集中しよう」

「最初からそうしなさい」

「よし、じゃあ行っていいよな？」

「……現地時間午前9時45分、作戦開始」

作戦開始と同時に全機一斉に加速し、16機の敵影との距離を詰める。

敵機は距離を取るところか逆にこちらへの距離を詰めるように飛行しトップスピードに乗った状態で接敵、すれ違いざまにヴァリスを打ち込むも見事に回避される。

機体を反転させ直ぐ様連射し続けるが、これがなかなか当たらない。

未来位置を予測しながら偏差射撃を行うも、ひらりひらりと優美な動きで躲されていく。

「この敵、今までと違う！」

「こういふ戦いがいのある相手は良いもんだよな！」

「鬱陶しい」

私以外の面々も未だ敵機の撃墜には至っていないらしく、敵に対しての賞賛の言葉が飛び出している。

いや、気持ちは分かるけど称賛している場合じゃ無い。

> “アルミランテ” 部隊、ラウンズと交戦に入りました！<

> ラウンズは“アルミランテ”が対応する、我々は陸上の敵を排除することに集中しろ！<

地上の交信では“アルミランテ”と呼称されているが、機体名なのか部隊名なのかは不明。

Unknownと言つのも味気ないし、“アルミランテ”という名称を機体名だと思つことにする。

> 第12機甲歩兵旅団、迎撃開始<

> 第10・11機械化歩兵旅団、敵軍と交戦を開始しました！<

「でも、ちょっと不味いんじゃないかしら」

「何がだよ？」

「私達全員が上に張り付いたままというのは宜しくないな、誰かを下に行かせるか」

上へ下へと目まぐるしい機動戦闘を繰り返すも、いつこうに敵機を撃破できない。

こちらがヴアリスで射撃を行えば、あちらも肩部にマウントされた2門の単装砲にて応戦する。

近距離まで近づけば物理シールドに内蔵されたブレードによる斬撃に切り替えて応戦、一連の動きを見る限り不得意な距離が無さそうだ。

こちらに匹敵する機動性能を発揮する“アルミランテ”であるが、さすがにこのまま膠着状態が続くとラウンズとしての名折れだ。

「誰を行かせるの？」

「アーニヤ、それにモニカも下に行ってくれ」

「大丈夫なの？」

「空中戦闘は私の得意分野だ、それに機体特性から言ってモルドレ

ットとリゾルトだところという相手は面倒だらう?」

「分かったわよ。 行きましょう、アーニヤ」

「……いいの?」

「ユーリは出来ない事を言うタイプじゃ無いわ、それに下も結構苦戦してみたいだしね」

モルドレットとリゾルトが戦域から離脱し、マドリード市街地へと移動していく。

その後ろ姿に数機の“アルミランテ”が追いつがるが、進行方向を塞ぐように射撃を行う事で追撃する機体を引き剥がす。

>司令部、ラウンズ2機が市街へと向かっている!<

>“アルミランテ”部隊は何をしていた!<

「それで、お熱い会話はともかく何か策でもあるのか?」

「余計なお世話だ。 策は無い」

「って、無いのかよ!」

「策は無いが、近接戦闘なら落とせそうだ」

「……何か不安になってきたぞ」

ヴァリスを仕舞い、2つ折りになっている長剣シュベルトを引き抜く。

レーザー刃と実体刃の2つを備える複合刀であり、その大きさから対艦刀と評される事もある。

大きさ故に取り回しに若干の難があるが、慣れれば使い勝手の良い武装だと個人的には思う。

シュベルトを右手に保持し“アルミランテ”へと迫ると、あちらもブレードにて応戦する。

「残念、そこは回避するのが正解だよ」

シュベルトを横薙ぎに振り抜き、相手のブレードもろとも機体を切り裂く。

私がこの機体に取り回しの良いMVSでは無く、シュベルトを搭載した理由がこれだ。

MVSでは罅迫り合いを演じるであろう場面でも、このシュベルトなら問答無用で切り裂ける。

実体刃には不可能な、レーザー刃だからこそ出来る芸当である。

> 隊長、ウイング4が！<

> 狼狽えるな、未だに数では此方が勝る！ 囲みつつ各個撃破しろ
！<

「うわぁ、凄い切れ味だな」

「ブレードごと真っ二つ……」

「レーザー刃って凄いですね」

「賞賛の言葉は嬉しいが働いてくれ。 ノルマは4機だ」

機体がブレードごと真っ二つにされた光景にはシヨックを隠せな
いらしく、動揺を見せる敵にこそぞとばかりに畳み掛ける。

先程までは優美と称しても過言ではない機動で回避行動を取って
いた敵機が、次々と落とされていく。

2機1組のチームワークで私達を翻弄してきた敵側だが、その連
携が崩れてしまえば地力で勝るこちらが有利になる。

> くっ、単独で攻めるな、必ずツーマンセルで行動しろ！<

「部下を気遣う前に自分の心配でもしたら？」

物理シールドを構えていた機体を再びシュベルトで切り裂き、リーダー格と思われる機体へと迫る。

さすがにシュベルトの威力を警戒しているのか、単装砲による牽制を織りまぜてこちらに距離を詰めさせない。

>その機体のパイロットか！<

「戦闘中に敵と会話する趣味なんて無いけど、その機体がリーダー格だと分かって良かったよ」

>ふん、俺がリーダーだと分かったからといって何になる！<

「頭を潰すのは戦術の基本って意味だよ！」

ヘダルを踏み込みアリーユニットの出力を目一杯上昇させ、余計な機動を取ること無く一直線に相手との距離を詰める。

そうはさせるかと単装砲が放たれるも、さすがに機体を動かすだけの最小限の動きで回避する。

>亡霊風情が！<

「褒め言葉をありがとう、そしてさようなら」

これでとどめだとシュベルトを振り切るも、その刃は胴体ではなく右腕を切り裂くだけに終わる。

避けられたと思うのも束の間、背後に回った“アルミランテ”に對する為、すぐに機体を後方へと向けようとするも振り抜いた直後はシュベルトの大きさも相まって大きな隙が生まれる。

>スペインは俺達のものだ、貴様らブリタニアには渡さん！<

ブレードを振りかぶり、こちらへと肉薄する“アルミランテ”。

普通ならば、このまま直撃を受ける。

だが、あくまでも普通ならばの話、私達ラウンズが普通である訳が無い。

アーリーユニットの右半分の出力を最低限まで絞り、逆に左半分は最高出力のままにする事で強引に機体を回転させ、回避する。

>くっ、まだ！<

「いいや、今度こそ終わりだよ」

回転させた勢いで、振り切ったままであった右手のシュベルトを“アルミランテ”の背後から叩きつける。

防御する事も回避する事も出来ず、あっさりと切断された機体は落下し爆発する。

安堵のため息を吐きながらディスプレイを確認すると、攻撃の直撃こそ受けていないものの先程の無理な機動により関節部へのダメージが報告されている。

戦闘に支障があるレベルでは無いが、2度3度と同じ事をやれば間違い無く壊れる。

「まあ、残るは地上だし心配ないか」

「ウインスレット卿、大丈夫でしたか？」

「アッシュフォードか、そちらも片付いたのか」

「はい、片付けた直後にソーサラーが凄い機動をしているのが見えたもので……」

「大丈夫だ、少し機体にダメージはあるが戦闘続行に支障は無い。……専用機じゃなかったら空中分解してそうだけど」

「さらっと怖い事言わないでくださいよ」

サザールランド辺りで同じ機動をとれば間違いなく右腕は吹き飛ばし、機体フレームも歪むだろう。

当初から空中機動を考慮している専用機だからこそ耐えられのだ

から。

「ジノと枢木は？」

「南部方面に行くと、飛んで行きました」

「私が最後だったのか、不甲斐ない」

「隊長機が相手でしたから仕方無いですよ、僕達はごっしましよるか？」

リーダーで確認する限り、モニカとアーニャはマドリードの中心部に陣取っている様子だ。

ジノと枢木が南部方面、東部は元々開けてあるから選択肢は北部と西部の2つ。

「スペイン州軍の主力は西側みたいだし、私達も西部に移動しよう」

「了解です」

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D
.

スペイン編があと2話で終わるなんて言った奴は何処のどいつだ。
マドリードとバルセロナの攻略でそれぞれ1話ずつの予定だったんですけどねえ……。

前々回よりは戦闘描写を頑張ってみました。やっぱり力量不足故に苦しい文章になっています。

“アルミランテ”は完全にオリジナル設定
ブリタニアの一方的な展開もどうかと思ったので急遽追加してみました。

ご意見・ご感想よろしくお願いします。

マドリード西部へと移動してきた私達は、上空から敵陣への射撃を実行していた。

銃口をずらし照準を合わせ、トリガーを引く。

その繰り返しだ。

「まるで射的だな」

「不謹慎ですよ、ウインスレット卿」

「七面鳥撃ち」という言葉があるが、今の状況はまさにそれだろう。

……相手が地上なので“モグラたたき”の方が適切なのかもかもしれないが。

「確かに不謹慎だな。けれどもこの状況はあまり気分の良いものではないだろう?」

「それはそうですね……地上は攻めきれないようですし、私達も動いた方が良いでしょう?」

「……地上に降りて、攪乱でも狙いに行くべきか」

「はい、それが」

> 前へ出すぎだ、戻りたまえ！<

> 大丈夫です！ 私が <

アッシュフォードの言葉を遮って聞こえてきたのは、怒声とそれに反発する女性の声。

おそらくはブリタニア側の通信だとは思っけど、一体どういう状況なのか。

「ウインスレット卿、今のは？」

「命令を無視している奴が居るんだろう、どこかは特定できないが」

ヴァリスを打ち込むスピードを緩めず、射撃を行いながら戦場を見渡してみるも、数が多すぎてどの機体の事を指しているのかを特定できない。

西部戦線だけでも200機近くのKMFが投入されており、司令部でもなければ何処に誰が居るかなど把握することは出来まい。

「探しますか？」

「この戦況でするべき事では」

「居た！」

「って、おいアッシュフォード！」

この状況でするべき事ではないと言いつもりだったのだが、それを聞かずに急加速で別の場所へと移動するランスロット・クラブの後ろ姿が見えた。

放っておくべきか状況確認に行くべきかを少し悩んだ後、司令部へと連絡し状況把握をすることを優先させる。

> ゴットバルト准尉、それは命令違反だぞ！<

「ナイトオブツィーより司令部へ、先程から叫んでいるのは何事だ？」

> い、いえ！ ラウンズの方のお耳に淹れるような事では <

「私は何事なのかと聞いているんだ、ゴットバルト准尉とやらは何をしている？」

> そ、それが単独で敵陣地へと突撃を行ってまして……<

「単独ねえ……何処に居る？」

> エリアE8の地点ですが……<

「そうか、職務中に邪魔をした」

すぐさまエリアE8の場所を確認し、機体を移動させる。

戦場で1人の人間を優先するのは褒められた判断ではないのだが、ゴットバルトといえばブリタニアの名門貴族。

それだけなら別にどうでもいいのだが、私の記憶が正しければ以前エリア11で大問題を起こした男の名前がジェレミア・ゴットバルトという名前だった筈だ。

おそらくはゴットバルト准尉はその近親者、そして無茶な行動の理由は汚名の返上と名誉挽回といった所だろう。

そんな理由を推測しながらエリアE8へと移動していると何かを守るかのように地上でMVSを振るうランスロット・クラブの姿を確認した。

モニターに映る画像を拡大すると、ランスロット・クラブの近くには大破し動けなくなったサザーランドの姿が写っている。

この機体に搭乗しているのが問題のゴットバルト准尉という訳か。

まったく世話の焼ける。

ヴァリスの代わりにシュベルトを展開し、上空から機体を急降下させる。

ランスロット・クラブが対応しきれなかった背後の機体を真っ二つに切断する。

「ウインスレット卿！」

「あまり感心できない行動だな？」

アッシュフォードは驚きを見せながらもMVSによる敵機への攻撃は忘れていない。

かくいう私もシュベルトを右へ左へと振り回し、数機纏めて切り裂いており戦闘から意識を逸らすつもりは無い。

「助けられる命を助けただけです」

「……己の領分を弁えずに無理な突撃を掛けた兵士をわざわざ助けに行くのか？」

「確かに無理のある行動です。でも、僕は救える命を見捨てたくありません」

「……ここで問答しても双方納得の出来る意見なんて出ないだろうし、さっさと救助の算段でも建てるか」

「はい！」

私とアッシュフォードの価値観の違いは乗り越えられるとも思えないし、そこまで歩み寄ってあげるつもりも無い。

“自軍の損失は最小限に、そして敵には最大の損害”

まあ、それだけを考えられれば理想なのだろうけど現実はそのほ
いかない。

「ここで応戦しなくても、コックピット部分だけ回収すればいいん
じゃないか？」

「先程試したのですが、その間に集中放火を喰らいまして……」

「……片方が援護、片方が回収という役割で良いか？」

「はい、僕が援護役をやりますので回収役をお願いします」

「……そちらは荷が重いぞ」

「僕の我儘ですから、自分の行動には責任を持ちます」

次から次へと湧いてくる“パンツァー・フンメル”を切り裂きながらもキツパリとした口調で答えるアッシュフォード。

よくぞ他人の為にそこまで出来るものだと内心で感心しながら、
事を進める為の準備を始める。

「ゴットバルト准尉、聞こえているなら応答しろ」

>は、はい！<

「単刀直入に言う、こちらが合図を出したら脱出しろ。 コックピットはこちらで回収する」

>ですか <

「返事は、はいかYesの二択だ」

幼さを感じさせる女性の声には戸惑いの感情が乗っているが、彼女を救助する事は既に私の中で決定していること。

異論を認めるつもりも無いし、無駄に時間を浪費したくもない。

>……はい<

「アッシュフォード、任せた」

「Yes , My Lord .」

「……私は何時から上官になった？」

「何となくです。 それに“はいかYes”の2択と言っていますのでそれに乗っかっただけです」

アッシュフォードは私に対してこういう冗談めかした事を言う性格だっただろうかと若干の疑問を持ったが、今考えるべき事では無いと思ひ至り思考を切り替える。

アーリーユニットの出力を少しずつ上昇させ、足を接地している地面から僅かに離す。

急加速できる体制を整えながら、シユベルトを仕舞い代わりにヴアリスを片手のみに構え周囲を牽制する。

「イジエクト」

私の合図を聞き、ゴットバルト准尉がイジエクションシートを移動させる。

それを見た後、アーリーユニットの出力を最大まで上昇させ、ソーサラーを急加速させる。

慌てた敵機が銃口をこちらへと向けてくるが、現有機で最高の運動性能を持つソーサラーの速度にはついて行けず放たれた銃弾は空を切る。

そしてその隙を付く形でランスロット・クラブがMVSで斬りかかり、破壊する。

>きゅあー！<

「多少の揺れは我慢してくれ。アッシュフォード、後は頼んだ」

「はい！ よろしく願います」

射出されたコックピットを確保し、直ぐ様前線司令部へと移動を開始する。

空を飛んでいる機体というのはやはり注目を集めやすいのか、すぐさま対空射撃が開始される。

私単独なら反撃しながらの離脱を実行するのだが、現在はコックピットを抱えた状態なので一直線に戦域から離脱する。

……戦場で人命救助なんて初めての経験なんじゃないだろうか？

ゴットバルト准尉を無事に司令部付近の医療部隊に引渡し後前線まで戻ってくると一進一退の状況から変化し、ブリタニア軍がスペイン州軍の防衛ラインを押し込み破りそうな戦況へと転んでいた。

そして一番防衛線を押し込んでいたのはエリアE8、先程の救助エリアだった場所だ。

「アッシュフォード、状況は？」

「左翼が防衛ラインをもう少しで押し切ります、先程の救助作業の際に周りを切り倒したおかげである部分の防衛ラインの戦力が随分と薄くなつたみたいです」

人命救助はともかくとして、結果的には戦況が良い方向に転がったのは幸いといったところか。

防衛ラインを一箇所でも突破できれば、相手を一気に崩すこともできる筈。

そう考え隣接するエリアE7へと移動し、上空からのヴァリスによる射撃を再開する。

武装だけ破壊するなんて妙な真似はせず、胴体部分やコックピット部分に容赦なくヴァリスを打ち込み破壊する。

相手に情けを掛ける気もないし、戦場で敵対している以上は命を奪うことに躊躇したりはしない。

>亡霊が戻ってきやがった！<

>亡霊なら亡霊らしく成仏しやがれ！<

「……大人気ですね、ウインスレット卿」

「私としても予想外、それに正直反応に困る」

私に付けられる“亡霊”という名には2つの意味がある。

行事への参加が少ないことを他の貴族から揶揄されて、私個人に付けられる“亡霊”というのが1つ。

もう1つは私の回避機動が他と比べて動きが小さく、まるで攻撃がすり抜けるように見える様から付けられた“亡霊”という意味。

今回の場合は後者の意味合いのだが、“亡霊”という呼び名は誇るべきなのか迷う。

「異名が付くのは名誉な事なのでは？」

「よく考えろ、ラウンズで私以外に該当するのはブラッドリー卿だけだぞ」

「……ブリタニアの吸血鬼、でしたか」

「そう。他のメンバーに異名は確認されていないし、寧ろ嫌われ者に付けられるんじゃないかと最近思い始めた」

「ブラッドリー卿はともかく、ウインスレット卿は違いますか？」

何気にアッシュフォードがブラッドリー卿の事を嫌われ者と断言しているが、あえて気にしないことにする。

ブラッドリー卿の対人関係の悪さは今に始まった事でも無いだろうし、あの人に好意的な人物を今まで見たことが無い。

グラウサム・ヴァルキリ工隊のメンバーなら別かもしれないが、あれは仕事であって好意とは違う気もするので判別が難しい。

「いや、私の評判もあまり良いものではない」

「そうなんですか？」

「……無駄話にこの辺で終わりだ、押しこむぞ」

「はい！」

一度崩れた戦線を劣勢のスペイン州軍が再び構築しなおす事は出
来ず、西部ではブリタニア軍が防衛ラインを突破。

西部戦線でのスペイン州軍の敗北が決定した。

北部及び南部の戦線でも西部戦線での敗北が耳に届くこととなり、
残存部隊が東部方面へと撤退を始めた。

ブリタニア軍は追撃を行わずマドリード周辺の残敵掃討に専念、そして歩兵部隊によりマドリードの主要施設を占領。

「案外、短時間で終わったな」

「長引かないのは良いことでしょうか。それに、スペイン州攻略はまだ終わりじゃないわよ」

ビスケー湾の空母とマドリードを直接行き来するのは距離が遠くエネルギー不足が懸念された為、中継地点として設定されたバリャドリッドの基地まで私達は後退してきた。

空母から発艦してきた時もこの基地を利用したのだが、エネルギーの補給を早急に済ませ再び移動を開始したので滞在時間は全員合わせても僅か数十分といったところ。

先程の戦闘で負傷した兵士達もここに集められ輸送機で本国へと送られる事になっている為、多数の医療救護車の姿が見える。

「分かってるよ。スペイン州最後の抵抗は恐らくバルセロナ、もしかしたらフランス州軍やイタリア州軍が出張ってくる可能性もある訳だし」

「現実的に考えて、他州からの援軍って有り得るのかしら？」

「可能性としては低いけど、牽制の為に部隊や艦隊を動かしてくる

可能性は否定できないから警戒は必要だと思っ」

「……そうすると、ピスケー湾も危険よね」

「まあ、あの殿下が何も考えていない訳が無いし、私達が心配する事でもないだろう」

「……いいのかしら？」

未だに心配そうなモニカの言葉に心配いらぬ事を伝えつつ、視線を動かすと何やら落ち着きの無い同僚の姿が見えた。

その視線の先に有るのは……医療救護車？

「アッシュフォード、そんなに気になるなら行ってくればいいじゃないか？」

「い、いえ、僕は別に気にしている訳では無くて……」

「そういう言い訳は、挙動不審な様子を直してから言うべきだな」

「……そんなに変に見えましたか？」

「この服装じゃなかったら、不審者と思われるも仕方が無いレベルだ」

自分の落ち着きのなさを自覚したのか、肩を落としてしょんぼり

とした様子。

多少大袈裟に言った“不審者”という言葉が随分とショックだったようだ。

「ユーリ、あまりからかって遊ばないの」

「遊んでいるつもりは無いんだけど……とにかく、気になるなら行けばいいじゃないか」

「……いいのですか？」

「作戦は終わっている、自由に過ごしても構わない」

私の言葉に行く決心がついたのか、失礼しますとの言葉を残し早速で医療救護車の方へと向かっていった。

そんな様子を見ていたジノ達から、何の話だと問われたので先程の救出劇について簡単に話す。

「まあ、ライらしいと言え無くもないな」

「でも、立場的に正しいかは疑問」

「……ゴットバルト」

ライの行動に関してジノは肯定派、アーニヤは否定派、枢木はよく分からない。

エリアー１に居た訳だし、ゴットバルトという名に何か思うところがあるのかもしれないけど。

反応を見せなかったモニカに視線を移すと、私の視線に気づき肩を竦める。

アツシュフォードと枢木への対応は、相変わらずの素っ気無さのようだ。

仲良くしろとは言わないけど、せめて普通の会話ぐらいは出来る日が来ることを祈っておく。

「失礼致します！ ウィンスレット卿、通信が入っております」

「誰から？」

「シュナイゼル殿下です」

軽い談笑を交わしていると、通信が着ているとの報告を受ける。

相手はシュナイゼル殿下、次の攻略戦の打ち合わせでもするのだろうか？

「そう……場所は？」

「あちらに見える衛星通信車です」

「分かった、ありがとう」

教科書道理の見事なブリタニア式敬礼を残し、立ち去っていく兵士の姿から視線を外しモニカ達に少し外す旨を伝える。

いつてらっしゃいの言葉を背中に受けながら、衛星通信車の元へと移動し、シュナイゼル殿下からの通信を受ける。

私としては、バルセロナ攻略の為の打ち合わせだと思っていたのだが、シュナイゼル殿下の口から聞かされたのは予想だにしない言葉だった。

「……………殿下、もう一度仰つただけですか？」

「君とクルシエフスキーには本国からの帰還命令が来ていてね、明日には此処を經つて本国へと戻つてもらつよ」

「……………理由をお聞きしても？」

「詳しくは知らない、恐らくは過剰戦力だと判断されたのだと思う」

「私とモニカはファランクス総監から戦場に出ると命じられた身なのですが……」

今回のE・U・戦線へのラウンズの派遣は、ファランクス総監の意向が強く働いている。

特に私とモニカには絶対に派遣メンバーに入れるとお達しが来るほどであり、戦場に出したがっていた筈なのだ。

仮にラウンズ6人が過剰戦力だと判断したとしても、帰還させるべきなのはジノとアーニヤであって私とモニカでは無い。

「そのファランクス総監からの命令書だよ、君が帰ってしまうのは残念だけどね」

「……はあ、命令受諾しました。他のメンバーにも伝えてきます」

「明日には輸送機がそちらの到着する手筈になっているから、それに乗って帰還して欲しいとのことだよ」

「了解です」

衛星通信車から離れ、先程の通信内容を話すためモニカ達の元へと戻ると、アッシュフォードが嬉しそうな表情で戻ってきていた。

あの時、助ける事となったゴットバルト准尉は大した傷も無かったらしい。

残念ながら機体を壊してしまったことと命令違反は変えようの無い事実なので、それなりの処分があるようだが、アッシュフォードとしては准尉が元気だった事と本人の目に強い輝きがあった事から安心したらしい。

今回の経験で、あの准尉が少しは大人しくなればいいけれど……。

アッシュフォードの話聞いた後、今度は私が先程のシュナイゼル殿下との通信内容を伝える。

5人の反応は皆一様に驚きと疑問の表情、つい数分前の私も同じような表情をしていたのかもしれない。

フアランクス総監からの命令である事、明日には迎えが来る事などを伝えると何かを聞いたそうな表情をしていたメンバーも引き下がった。

仮に聞かれたとしても、私自身が今回の命令の意図を捉えきれていないので答えようが無いのだけだ。

バリヤドリッド基地で一夜を過ごし、翌日には予定通りに輸送機が到着。

ソーサラーとリゾルトの2機を載せ離陸準備が整った後に、私とモニカも搭乗する。

軍用の輸送機といえば無骨な内装を想像しがちだが、私達ラウンズ向けに手配される輸送機は一般的な旅客機でのビジネスクラスに当たる設備が整えられている。

流石にファーストクラスト程の豪華さは無いが、客室乗務員が常駐し飲食も可能である為、軍用機というより民間の旅客機に乗っている気分になる。

「相変わらず軍用機には見えない作りだな」

「あら、快適でいいじゃない？」

ゆっくりとお茶を飲みながらの優雅な空の旅だが、片道9時間も掛かるのが難点だろうか。

シートを倒して睡眠などを取る事も出来る作りではあるが、快適な睡眠とは程遠い事に加えて、近い位置にモニカが居るので安心して眠れそうに無い。

「私の顔をじっと見詰めてどうかしたの？」

「どつやって時間を潰そうかと考えていただけ」

白くほっそりとした指を唇に当て、んーと唸りながら思索するモニカの姿を改めて見詰める。

鮮やかな黄金色の髪、穏やかな光を宿す青色の瞳、雪のように白い肌に女性らしい柔らかな曲線。

一般的な感覚で考えれば、モニカは間違いなく美人に分類される。それについて異論は無いし、私自身もモニカの事を素直に美人だと思っっている。

ドレスで着飾り、口を開かず黙ってさえいれば“深窓の令嬢”と表現しても間違いない容姿だ。

見た目だけなら品のあるお嬢様といった雰囲気なのだが、相変わらず私と2人きりだと所作や言動が少し子供っぽくなる傾向がある。

そういった面を見る事が出来るのは悪い気分では無いし、それはそれで可愛らしいとは思っただけど……。

「私と話をしていれば、自然と過ぎるんじゃないかしら？」

「……9時間も会話し続けるなんて、もはや嫌がらせの域じゃないか」

「ふふっ、ユーリは本当に素直じゃないわね」

「……どういう意味？」

普段見せるような朗らかな笑顔ではなく、口端を僅かに吊り上げた意地悪な笑みを見せながらこちらを見据えてくる。

モニカも何気に性格が悪いので、多少の警戒が必要だ。

「私が考え事している最中に、ずっと私の事見てたでしょう？」

「ノーコメント」

「それ、告白してるようなものよ？ それに……ユーリのえっち

「いや待て、何の話だ？」

「だって、私の胸の部分にも視線を向けていたでしょう？」

先程、モニカの姿を見ていた時に頭から順に下の方向へと視線をずらしていったのは事実だ。

確かに肩部や胸部を見て女性らしい柔らかな曲線と表現もしたが、別に不埒な感情があった訳じゃない。

「いや、あれは」

「ユーリも男の子だし、女の子の身体が気になるのよね？」

「だから……」

両手で胸を隠しながらも、表情はニコニコとしているので間違いなく確信犯だ。

その後もしばらく釈明を続けるも取り合ってくれる様子が無いので、釈明を諦め不貞寝することにする。

「って、もう拗ねちゃった？」

「……違う、ただ寝るだけ」

「ふふっ、そっこのを拗ねてるって言うのよ」

私の行動に対して何かを言っていたようだが、久々の遠征は身体に意外と負担を強いていたらしく、直ぐに眠りに落ちたので内容は分からない。

……眠りに落ちる寸前に聞こえた“おやすみなさい”という優しい声と、頭を撫でられているような感触は、きつと気のせいだ。

/ Chapter
O l i v e r 2 1
P a r t - E u r o
4 . U n i v e r s e
E N D
W a r

E・U・編強制終了、これ以上延ばすと作者のモチベーションが持たないので、また日常話に戻ります。

本来は、ここからアフリカ侵攻の話へと繋がっていく筈だったんですが……未来に持越しです。

今回の話では、ライとの親密さが少しだけ上昇。

書いた後になって、ライよりもスザクの方が適任だった気がしてきましたが……深くは考えない事にします。

ゴットバルト准尉こと、リリーシャ・ゴットバルトはピクチャードラマにて名前だけ登場したキャラです。

オレンジ疑惑で家の方もダメージを受けて、兄を慕っていた妹リリーシャが嫌疑を晴らすために騎士となったという経緯です。

354

現時点での最長話となった“Chapter 21”ですが、当初の予定では輸送機内の描写は無かったんですね。

別に有っても無くてもストーリーに影響はしませんが、ヒロインなんだから出番が多くても良いですよね？

今話では主人公がモニカの事を子供っぽいと評していますが、“Chapter 02”でのモニカも主人公に対して幼い一面があると評しています。

お互いが相手を自分より子供だと認識していますが、どちらかと言えば主人公の方が幼いという設定です。

“ 退屈は大人の贅沢 ” という諺がある。

「 何もする事が無い 」 というのは、逆に言えば「 何でも出来る 」 という意味であり、そう考えれば “ 退屈 ” というのは非常に贅沢な悩みだとも言える。

……しかし、実際にその状況に置かれてみると贅沢だとは到底思えないのが実情だ。

ベッドに身を沈め、大きく息を吐く。

服に皺が付いてしまうと一瞬考えるも、どうせ人に見せるわけではないのだから気にしない事にする。

しかし、平日の真昼間だというのに、自室のベッドの上に居るのは何だか申し訳なく思えてくる。

私は休暇の身なのだから部屋でゆっくり過ごしていても何ら問題ないんだけど、やはり居た堪れない気分になってしまう。

仕事依存症なのかなあとも思ったけど、私以上の仕事量をこなしているユーリは、私が見かける限りでは余暇を楽しんでいた筈だ。

紅茶を自分で淹れるのも趣味だと聞いたし、読書やピアノを弾くのも趣味らしい。

こうして考えると多趣味なユーリと比べて、私は趣味といえるようなものが無い。

もちろん楽器は弾けるし、読書だってする。

紅茶だって淹れようと思えば出来ない訳ではない。

けれど、それらの行動に対して楽しいという感情を持てるかと言われると首をかしげざるを得ない。

「……ユーリの馬鹿」

事の始まりは、ユーリと一緒に休暇を取って出掛けようとした事。

久しぶりの2人でのお出かけということで、年頃の女の子のように前日から着ていく服を選んでみたりと楽しみにしていた。

なのに

普段の生活習慣の関係から昼間に眠れる訳も無く、仕方なしに自室からダイニングへと移動すると、テーブル一杯に広げられた紅茶の茶葉が目に入った。

その傍らで楽しそうに茶葉をブレンドしている女性、もとい私の母親がこちら気づきに声を掛けてくる。

「あら、まだ出かけていなかったの？」

「……緊急の仕事で休暇は取り消しなんだって」

「あらら、せっかく着飾ったのに残念ね」

「……別に、ただの普段着よ」

穏やかな笑みを浮かべる母親に素っ気なく返事を返す。

私の素っ気ない態度を気にした様子は見せないが、それがまた複雑な気分になさせてくれる。

以前と比べれば会話は劇的に増えた方なただけど、少しギクシャクした関係なのは変わっていない。

「ふふっ、モニカは普段着を前日から準備しておくの?」

「……」

「モニカも女の子だもの、気になる男の子には綺麗な姿を見て貰いたいよね」

「だから、私とユーリはそういう関係じゃないって言ってるでしょ?」

私の抗議にも表情は揺るがず、微笑ましいものを見るような表情のままだ。

「そういう事にしておきましょうか」

「……お母様、信じていませんね?」

「いいえ、ちゃんと分かっていますよ」

「もっ……」

楽しそうな口調で答えているので、私の反応を楽しみたいだけなんだろう。

昔のお母様はこういうタイプでは無かったと思うんだけど……。

特製のブレンド紅茶を飲みながら静かな時間を過ごしていると、その静寂を嫌うようにお母様が声を掛けてくる。

「ねえモニカ、今度ユーリ君を家に連れてきてね」

「……突然どうしたの？ それにユーリ君って何？」

「モニカと同じ年なんだから、そう呼んだ方が良いかと思って」

私の知る限り、ユーリを“君”付けして呼んでいる人物は、あの変人伯爵ぐらいだった筈。

ただ、ファーストネームに“君”を付けて呼ぶのは間違いなくお母様だけだ。

ユーリの幼馴染であるアスティアは“さん”付け、私やリリシアは呼び捨て、後はファミリーネームに“卿”が多い。

「恥ずかしいから、本人の前で呼ばないですよ？」

「そうかしら、モニカの話聞く限りはこれくらいで怒ったりはしないと思っただけだ」

「ユーリは怒らないだろうけど、私が恥ずかしいの」

「残念、でも本人が許してくれたら良いわよね？」

「……はあ、その時は好きにして」

ため息を吐きながら、一応の譲歩を示す。

これくらいで怒ったりはしないだろうけど、間違いなく困惑する。

お母様のような掴み所の無いタイプは、恐らくユーリが苦手とする相手だろうし。

360

「そういえば、会いたい理由って何なの？」

「直接会ってお礼を言いたい」

穏やかな表情からは、嘘を言っているようには見えない。

けれど、会ったことも無い相手に“お礼”とはどういうことなのか。

「会ったことも無いのに、どうしてお礼なんて話になるの？」

「私は、いいえ夫も含めてなんだけど、ユーリ君にはとても感謝しているのよ」

「……余計に意味が分からないんだけど」

「ふふっ、私はこう言いたいだよ。 “ モニカを可愛くしてくれて、ありがとう ” ってね」

「だから、意味が分からないんだってば……それに、そんな事言われても困るに決まっていますでしょう?」

初めて会った相手に、いきなりこんな事を言われればユーリでなくとも困る。

というか、私が恥ずかしいから止めてほしい。

「モニカは自覚が無いのね」

「……何の話?」

「士官学校に入る前のモニカだったら、私とこんな話をしていたかしら?」

「……」

確かに昔の私だったら、こんな風にお母様とお茶を飲みながらの

雑談なんてしなかった。

冷めた性格だった私は両親を含めて周囲とは距離を取っていたし、両親もそんな私に対して接し方や距離感を掴みかねている様子だったのを覚えている。

声を掛けられれば答えるし、会話が無かった訳ではない。

けれども、感情を乗せた声での会話は殆ど無かったし、こういった雑談なんて皆無だった。

今もそうなんだろうけど、世間的に見れば実に可愛げのない娘よね。

「分かってくれた？」

「……言いたいことは分かったけど、それをユーリに言うのは止めて。余計な心配なんて掛けたくない」

「うーん、出来れば言葉として伝えたいんだけど……」

「駄目」

どうしてもというお母様に対して、駄目だときっぱりと伝える。

ユーリは自分では冷淡だと思っているみたいだけど、相手に対して気を使うタイプなので話を聞いたら余計な気を回しかねない。

唯でさえ私が色々頼って迷惑を掛けている上に、家族関係なんて余計な重荷を背負わせたくは無い。

「残念ね」

「というより、連れてくるなんて言った覚えもないんだけど」

「少し気が早かったかしら……そういえば、モニカ着替えた方が良
いんじゃないの？」

「どつして？」

「服、皺が付いちゃってるわよ」

お母様の指摘に視線を服へと移すと、確かに皺が寄っていた。

元々皺が付きやすい服だった事に加えて、ベッドに飛び込んだのが原因か。

家の中に居るのだから気にしなくてもいいのだけど、女の子として身嗜みは整えておくべきかしらね。

「そうね……ついでにシャワーも浴びてくる」

「いつてらっしやい」

部屋を出る娘の後ろ姿を苦笑しながら見送る。

お出かけが取り止めになった事が余程気に入らないらしく、珍しく拗ねた様子だった。

以前とは違い、喜怒哀楽の感情を率直に表に出すようになった娘はとても可愛らしい。

私のウェーブがかった髪とは違い綺麗なストレートの髪は清楚さを感じさせ、平均からすれば少し控えめのスタイルも女性からすれば理想的なモデル体型ともいうべきものであり、余程特殊な趣味じゃない限りは男の子が放っておかないタイプだと思う。

家柄とか身体目当ての相手が寄り付かないか心配だけど、モニカも相手の見極めぐらいは出来るだろうし、仮に強引に迫られても軍人なので何とかなる筈……いや、それ以前に普段はユーリ君と一緒に行動しているらしいし心配いらないのかしら？

うん、親の鼻屑目を差し引いても、モニカは本当に可愛らしく、そして美しくなったと断言できる。

後はモニカのお眼鏡に叶う相手が必要だけど……どう考えてもユ

ーリ君しか居ないわよね。

それにしても、と思考を切り替える。

こうして娘のモニカと他愛無い雑談が出来るようになったのは、5年程前だっただろうか。

モニカは幼少の頃から聡明な子だった。

良く言えば大人びた思考を持ち、悪く言えば子供らしくない子だった。

子育てには手が掛かると愚痴を零す人も居るが、親というのは子供に迷惑を掛けられる事を喜ぶ性質がある。

そんな苦労を重ねて、成長していく我が子を見るのが親の喜びだと私は思っている。

子育ての苦労を予想していた私だったが、娘であるモニカはほとんど手の掛からない子で、正直拍子抜けしていた。

言葉を話せるようになる頃には、私達の手を借りずに何事もこなすことが出来る様になっており、私と夫は寂しさを感じながらも聡明な娘の成長を見守り続けた。

私も夫も、モニカに家を継がせようとか、有力者に嫁いでほしいなんて考えた事は1度も無い。

モニカ自身が好きになった男性と結婚して、幸せそうな晴れ姿を

見せてくれれば良い、というのが私達夫婦の共通見解だった。

欲を言えば、孫を抱いてみたい、名付け親になりたいとも考えていたけれど、それはまだまだ先の話だと夫と共に笑いあったものだ。

しかし、そんな私達の暢気な考えはモニカが成長していくにつれて危機感へと変わっていった。

話しかければきちんと返事を返すし、手伝つてと言えば手伝つてくれる。

けれど、その会話の声に楽しいという感情を感じられた事は無く、手伝いに関しても喜ぶ訳でもなければ嫌がる訳でもなく淡々とこなしていた。

通っていたスクールでもそんな様子だったらしく、孤立こそしていないものの友人と遊んでいる様子などがあまり見られないので心配だと教師から伝えられた事もあった。

モニカから声を掛けられる事も殆ど無くなり、本来積極的に話しかけるべきである私達もモニカに対して気後れしてしまい、自然と会話が減ってしまった。

そして、年齢が2桁に達した頃には、モニカ的笑顔を見ることが無くなった。

いや、正確に言えば少ないながらも見る事はあった。

しかし、それらは全て取り繕ったような“仮面の笑顔”とでもいうべきもので、私達が望んだものでは無かった。

私達夫婦も座視していた訳ではなく、色々と会話の機会を作る為に手段を講じたが、それらは全て満足のいく結果には結びつかなかった。

諦めかけていたある日、数年ぶりにモニカから声を掛けられた私達は士官学校へと進みたいとの希望を打ち明けられた。

私も夫も聞かされた当初は難色を示した、大事な一人娘を軍人なんて危険な職業に就かせたくないとの想いが有ったからだ。

私達との関係が拗れているのはまだ良い、ブリタニアの最高学府と言われるアカデミーへの進学を進めたのだから、モニカが常に抱いている物足りなさを埋めてくれる人が居るかも知れないからという考えからだ。

同時に、モニカにとって初めての自己主張を私達の考えで曲げてしまっても良いのだろうかという想いもあった。

結局、三日三晩悩んだ後、モニカの希望を受け入れて士官学校への入学を認め送り出した。

変化があったのは年末、士官学校の寮から帰省してきたモニカを出迎えた時の事だ、あの時の情景は未だによく覚えている。

「ただいま、帰りました」

「おかえりなさい、モニカ」

「うむ、無事に返って来て何よりだ」

全寮制である士官学校から戻ってきた娘を夫と共に出迎える。

相変わらず淡々とした様子だけど、特に怪我などをしていない様子も見られず、母親としては一安心。

「外は寒かったですでしょう？ 暖かい食事を用意しているから、一緒に食べましょう」

「フィオナが随分と張り切って用意していたんだぞ」

歪な親子関係とはいえ、しばらく離れていた娘との再開はやはり嬉しい。

少し張り切りすぎてしまい、メイド達と一緒に大量の食事を作ってしまったのだけど……大丈夫よね？

寒い玄関から、暖かいダイニングへと移動しようとするが、モニカだけは未だに玄関に立ったまま動いていない。

「モニカ、どうしたの？」

「……あの、えっと」

先程までの淡々とした様子とは違い、困惑したような表情で視線を忙しくなく動かしていた。

そんなモニカの様子に、思わず私は夫と顔を見合わせる。

少なくとも、以前のモニカはこんな表情をしなかったし、先程の声も明らかに困惑という感情に染まっていた。

「少し落ち着いて、ね？」

「……私は必要無いつて言ったんです、でもアステアがどうしてもって……ユーリまで賛成してしまったから仕方なく買ってきただけ……」

困惑した表情と声で言い訳らしき事を言いながら、私達に1つの箱を差し出して来る。

それを受け取り、よく見てみるとお菓子の箱だった。

「ふむ、これはどうしたんだ？」

「……お土産です、久しぶりに実家に戻るなら必要だって言われて」

「お友達から勧められたの？」

「はい。 ユーリが賛成しなければ、買わなかったんですけど……」

先程から名前の出てくる“アステシア”と“ユーリ”というのは、恐らくは同期生……よね。

特に“ユーリ”という名前を呼ぶ声には少しだけ感情がこもっているように感じられる。

名前の響きからして男の子……モニカも女の子だし、異性的な意味合いで気になっているのかもしれない。

「良いお友達が出来たのね」

「そうだな、ぜひ私達にも切欠なんかを話してくれないか？」

「……切欠は秘密です、恥ずかしいですから」

視線を逸らし僅かに頬を赤くしながら答えるその姿は、私達が見慣れてしまったモニカの姿とは大きく違っており、私は衝撃を受けた。

その姿からは送り出す前の無感動な様子は感じられず、ちょっと大人しい年頃の女の子にしか見えなかった。

同時に、モニカの希望を尊重し士官学校へと送り出したのは間違いでなかったのだと確信し、思わず涙がこぼれそうになるが、ぐっと堪える。

モニカの前で泣いてしまつと不振がられてしまつ。

なにより、横に居る夫が先程の恥ずかしいという発言について聞きたいらしく、そわそわと落ち着かない様子なので、それを抑えなきゃいけない。

父親として聞きたい気持ちも分かるけど、モニカの初恋かもしれないんだから少しは遠慮してもらわないと。

「奥様、聞いていらつしゃいますか？」

昔の事を回想していると、いつのまにか近づいて来ていたメイドに声を掛けられる。

つい深く考え込んでしまつたらしい。

「あら、御免なさい。どうかしたの？」

「お嬢様にお客様が入らしております」

「特に予定は無かった筈だけど……見合いの話ならお断りして置いてね、それから」

「奥様、今回入らしているのはお嬢様の同僚の方です」

モニカの同僚というと、ラウンズの方かしら？

今までに家に友人を呼んだ事は無いし、連れてきた事も無いから誰なのか目星を付け難い。

「どなたが来ているの？」

「ウインスレット卿です、お嬢様の同期生に当たる方だったかと」

ウインスレット卿……ユーリ君の事よね。

仕事を片付づけて、モニカを再び誘いに来たのかしら？

何にせよ、直接会うチャンスなのは事実、これを逃す機会は無いわ。

「ここに通して頂戴」

「よろしいのですか？ お嬢様は今入浴中ですが……」

「その間は私が応対するわ、一度話してみたいと思っていた相手だしね」

「畏まりました」

温くなってしまった紅茶を飲み干し、温かな紅茶を淹れる準備をしながら噂の彼へと思いを馳せる。

さて、義理の息子候補のユーリ君は一体どんな子なのかしら。

出来れば、私と話の合う子だと嬉しいんだけど……紅茶を楽しむ趣味がある事を祈りましょうか。

乙女チック モニカ

ごめんなさい、冗談です。

乙女な描写なんて有りませんでしたし、フィオナさんの独白と回想が長い……。

昔のモニカさんは、家族に対しては丁寧な言葉使いでした。

時を経るごとに、現在の様な少し砕けた言葉遣いへと変化しました。

クルシエフスキー夫妻はユーリと面識がありません。

パーティー等で会う機会ぐらい有っただろうって？

ユーリが“亡霊”と呼ばれる理由を思い出せば解決する疑問です。

374

第4章のテーマは決まっていますが、恐らく平凡な日常が描かれる筈です。

……モニカさんとユーリの関係進展は果たして有り得るのか？

そろそろR2本編が見える位置まで進みましたが、突入した場合は第2次トウキョウ決戦後の神根島から変化させる事になります。

しかし、これだと終盤までは原作をなぞるだけ or もしくは関わらないという微妙な状況になるんですね。

「意見・感想よろしくお願いします。」

Chapter xx - Zwei Wirklichkeit (前書き)

今回のお話は、本文とは雰囲気異なります。

少しえっちな描写もあるので、苦手な方はUターンをお願いします。

「きゃー！」

小さな悲鳴と共に、モニカが純白のシーツへと倒れこむ。

その衝撃で鮮やかな金髪が白いシーツへと広がり、扇情的な光景を演出している。

「あの、ユーリ？」

「……」

モニカは困惑した表情で自分の上に覆いかぶさるユーリへと問いかけるが、ユーリは常の表情と変わらず無言のまま。

押し倒した勢いの情欲でもなく、かといって押し倒した事への困惑でもない。

何かを思索するような表情のまま、モニカの顔をじっと見つめ続けている。

「……私と、こういう事したかったの？」

「……」

「……ユーリ」

「多分、違うと思う」

無言のままだったユーリが、ようやくモニカの問いかけに答える為に口を開いた。

先程の困惑の表情から回復したモニカとは対照的に、今度はユーリの表情が困惑へと染まっている。

その表情に浮かぶのは、この状況に対しての困惑と押し倒した事への罪悪感か。

ユーリの表情に何か感じ入るものがあつたのか、モニカは投げ出されていた左手でユーリの頬に優しく触れる。

「ゆっくりでいいから、ね？」

柔らかい、そして何処か愛おしいような表情でユーリの頬を撫でながら先を促す。

子供をあやす母親のような優しい声でモニカが問うと、ユーリはゆっくりと口を開く。

「……こういう事をしたかった訳じゃない」

「じゃあ、どうして？」

「……多分、モニカを私のモノにしたかったからだと思う」

モニカは目を見開き、ユーリの言葉に驚いた様子を見せるが、すぐに先程までの優しげな表情へと戻した。

対して、ユーリは何処かバツの悪そうな表情でモニカから視線を逸らす。

その行動に小さく笑みを零しながら、モニカは自分の想いを伝える為に言葉を紡ぐ。

「ねえ、私達が約束した時に、私が言った言葉を覚えてる？」

「……“私は貴方の全てが欲しいの、そして私の全てを貴方に上げる”」

「正解。言葉通りにとるなら、今回のユーリの行動は決して間違っていないのよ？」

「でも、あれは」

あの言葉はそんな意味では無かったと否定の言葉返すユーリに、モニカも静かに頷き同意するが、でもねと言葉を続ける。

「心だけでは満足できなくて、身体も欲しいと思った。 別におかしな考えでは無いのよ」

「……………」

「だから、いいよ」

「えっ……………」

モニカの放った言葉の意味を理解出来ず、ユーリは逸らしていた視線をモニカへと戻した。

真意を探るかのように真っ直ぐな瞳でモニカを見つめるが、対するモニカはやはり優しく愛おしげな表情で見つめ返す。

その表情と瞳からは、冗談ではなく本気で言っている事が感じられ、ユーリは動揺する。

ユーリの動揺を知った上で、モニカは優しく言葉を重ねる。

「ユーリが私を欲しいなら、私の全てをあげる」

「……………」

「でもね、1つだけお願いがあるの」

「……………お願い？」

「私を、愛して欲しい」

「……………」

「“好意”ではなく“愛”が欲しいの。……………単なるお願いだから、聞き流してもいいけどね」

付き合いの長いユーリだからこそ断言出来た、モニカは一切の冗談を言っていないのだと。

悪戯めかした笑みを浮かべながら話すモニカの表情には嘘は見られず、身体を許す事も本気なのだ。

本来ならば受け入れられた事を喜ぶべきユーリは、自身のモニカに対する行動を未だに自分の中で許容出来ておらず、身体を硬直させたまま行動する事が出来ない。

そんな心境を見透かしたモニカは、上に覆いかぶさっているユーリの首に両手を回し、柔らかな唇を押し当ててみる。

「ん……………うん」

鼻にかかった甘い声を漏らしながらのキス。

驚きに染まったユーリの表情とは対照的に、少しだけ頬を赤く染

めながらもモニカは楽しそうな表情。

「ふふっ、セカンドキスってありかな？」

「……聞いた事無い」

「こーら、目を逸らさないの」

モニカは首に回していた手に力を籠めて、ユーリの顔を近くへと引き寄せる。

引き寄せられたユーリは、モニカの上気した頬や潤んだ瞳を間近で見えてしまい動揺を表情へと出してしまう。

その様子に気を良くしたモニカは笑みを深め、ユーリの耳元で甘く艶やかな声を出して気分を高揚させようとする。

「ねえ、私の胸、ドキドキしているの分かる？」

「……人の心音が気にする余裕が無い」

「照れてるんだ？ 可愛い」

首に回していた手を降ろし、ユーリの左手を掴んで自身の左胸へと誘う。

間に下着と服を挟むとはいえ、女性らしい膨らみの暖かさと柔らかな感触は十分に伝わり、動揺に拍車が掛かるばかりのユーリは常には見られない頬を赤くした表情で身を固くする。

一見して積極的に行動しているモニカだが、頬は赤く染まり呼吸も乱れている事から、こちらもユーリと同程度には恥ずかしさを感じている。

赤く染まった頬と潤んだ瞳、そして近距離に居る事で初めて気づく女性特有の甘い香り。

そんな様子を至近距離で見せられ、完全に硬直しているユーリにモニカは甘い声で囁くように問いかける。

「続き………する?」

“夜中テンション”で書き上げました、ごめんなさい

本来はChapter 23の一部分だったんですが、現時点でのユーリはこんな行動取らないということで削りました。何か強いショック(モニカが負傷したとか)を受けた場合には、こんな感じで迫ってしまう可能性有りですけどね。

思いつめた状況なので、ユーリが一段と子供っぽくなっています。対するモニカは、そんなユーリを見て自分がいなきや駄目だなと改めて実感する……といった心境の筈。

この部分の話はどうしても1人称では書けなかったので3人称になっています。

あと、調子に乗って少しだけえっちな描写が書かれています。このくらいはセーフだと信じたい。

水気を含んだ髪というのは、どうしても重くなってしまうのか。

意味の無い事であると分かっているけど、内心で愚痴を零してしてしまう。

鏡に映る私の髪は腰の辺りまで届く長さで、立派なロングヘアと言ってもいい。

昔は肩口のやや下辺りまでのミディアムだったが、“髪は長いほうが好き”なんて言葉を真に受け、ここまで伸ばしてしまった。

あの時の言葉が本気なのか冗談なのか今でも分からないけど……まあ、私の髪を気に入ってくれているのは事実の様なので、伸ばす為の努力が無駄じゃなかったのは幸いかな。

いつまでも鏡の前で唸っている訳にも行かないので、テキパキと髪を乾かし、服装を整える。

今回の服装は白いシャツの上に水色のカーディガンを羽織り、それに合わせる形での白いミニスカート。

派手さは無いが、家で過ごすには悪くない選択だと思う。

あと半日、何をして過ごすつもりかしら？」

「初めまして、ご夫人。 ユーリ・ウィンズレットと申します」

突然のキャンセルを謝罪する為に、直接クルシェフスキー家に足を運んだのがつい先程の事。

メイドに案内をされたのは、目的のモニカではなくクルシェフスキー侯爵夫人の前だったのだが、これはどういう意味で受け取ればいいのか。

とりあえず挨拶をと思い実行してみるも、夫人にはくすくすと上品に笑われてしまう。

「ふふつ、ごめんなさい。 貴方はお友達の家遊びに來ただけなんだから、もっと楽しんでいいのよ？」

笑みの意味が分からず困惑していると、ようやく笑みを収めてくれた。

普通に挨拶しただけなのに、何故笑われたのか未だに理解出来ないんだけど……。

「初対面、それも目上の相手に対しての最低限の礼儀のつもりなのですが」

「私としては少し不満ね。貴方はモニカの大事なお友達なんだから、もっと気安く接していいのよ？」

「気安くと言われても……」

「まずは私の事を名前で呼ぶ所が始めましようか。はい、フィオナさんって呼んでみて？」

「……フィオナさん」

「うん、よく出来ました」

満面の笑みで褒められ、なんとも形容しがたい微妙な気分させられる。

夫人、もといフィオナさんのようなタイプはどうしても苦手だ。

嫌味な性格をしている相手ならば、こちらも嫌味で返せるのだが、フィオナさんのように優しげな相手には取るべき対応が分からない。

……友人の母親というのも、私を困惑させる一因なのかもしれないが。

「ユーリ君なら、大丈夫そうね」

「……突然どうされたのですか？」

聞きなれない呼び名で呼ばれるも、フィオナさんからしてみれば自分の娘と同じ年なのだから、君付けで呼んでもさして不思議では無いのだと内心で結論付けて、あえて触れない事にする。

君付けは呼ばれ慣れていないから、注意しておかないと自分の事だと気付かなくなりそうなのが少し怖い。

「ちょっとした家庭の事情なんだけど、あまり詳しく話すとモニカに怒られちゃうから話せないのよね、ごめんなさい」

「いえ、お気になさらず」

先程とは違い少し困ったような表情で話すフィオナさんの様子から、結構重い内容なのだと当たりをつけるが、他人の家庭事情に首を突っ込む気は無いので無難な返事を返す。

その返事を聞いたフィオナさんは、どこか申し訳なさそうな表情で笑みを返してくれた。

「あっ、でも、これだけは言わせて欲しいの」

「何でしょうか？」

「ありがとうございます、ユーリ君」

「……何に対してのお礼なのかは解りませんが、どういたしまして」

「うん、本当にありがとう」

初対面の相手に突然のお礼を言われて困惑するも、モニカに関する事だろうと考えついた。

モニカの事以外で私とフィオナさんに接点なんて無い訳だし、それ以外の理由が思いつかないだけでも言う。

詳しい理由が気にならないと言えば嘘になるけど、何処か憂いを帯びたような表情をしているフィオナさんに問う気にもなれなかった。

「そういえば、ユーリ君っていう呼び方は嫌だったりする？」

若干の気まずい雰囲気から脱して、フィオナさんお手製の紅茶を頂いていると何かを思い着いたかのように尋ねられる。

私の中で、君付けについては特に問題は無いとの結論が出ていたので、その旨を伝えておく。

「良かった。 モニカから本人の許可が無いと駄目って念を押されてから、少し安心したわ」

「モニカ……さんは、そんな事言ってたんですか」

「無理して“さん”付けしなくていいのよ？」

「……お言葉に甘えさせて頂きます」

呼び捨ては不味いかと思ひ咄嗟に“さん”付けで呼んでみたのだが、フィオナさんは苦笑いを浮かべながら必要無いと言ってくれた。

“モニカさん”なんて呼び方には違和感があるので、内心では助かったと安堵する。

「うーん、もうちょっと砕けた話し方は出来ないかしら？」

「……善処はしてみます」

「出来るだけ慣れてくれると嬉しいわ、今後とも末永いお付き合いになるだろうしね」

“末永いお付き合い”という単語に少し違和感を覚えるが、親として娘の交友関係を心配した上での発言なんだろうか。

だとしたら、取り敢えずモニカの友人としては合格という認識で良いのかな。

……いや、フィオナさんの発言は自分に慣れてくれると嬉しいという意味だから、モニカは関係無いのか？

「……あの、末永いお付き合いというのは？」

「ふふっ、ヒ・ミ・ツ」

上品な笑みを携えていた表情から、悪戯っぽい笑みへと変化させ、楽しそうにしているフィオナさんからは答えを聞けそうに無い。

一児の母にしては若い外見のフィオナさんが、唇に指を当てている様はとても綺麗で魅力的に映り、一瞬見惚れてしまいそうになるが慌てて正気に戻る。

だが、そんな私の様子をフィオナさんは見逃していなかったらしい。

「あらら、ユーリ君、もしかして私に見惚れてた？」

「……違います」

「ユーリ君みたいな格好いい子に見惚れられるなんて光栄ね。私もまだ女としての魅力は十分かな？」 私

「だから、フィオナさんの勘違いです」

「照れてる男の子って、可愛いわ……」

そのセリフだけ聞くと、危ない人に聞こえますよとの言葉を思わず口に出しそうになり、慌てて口を閉じる。

フィオナさんが実際にそついう趣味なのかは知らないが、さすがにこれは失礼だ。

「……フィオナさんとモニカって本当に似てますね」

「あら、そつ?」

「ええ、私に対して可愛いなんて言う所とか、その悪戯っぽい笑みとかがそつくりです」

「そつか、似てるんだ……」

若干の嫌味を籠めて発言したつもりなのだが、フィオナさんは私の言葉を聞いて何故か嬉しそうにしている。

嫌味や皮肉が通じないタイプ……とは違つと思つただけだ。

「褒めているつもりはありませんよ？」

「ううん、私とモニカが似てるって言われて嬉しかったのよ」

「……母親って、そういうものなんですか？」

「どうなのかしらね……私だけかも」

私の発言に困つたような、けれど少し嬉しさの混じつた表情で答えられる。

親が子に対して持つ感情というのはよく分からない。

私自身が親という存在の印象が薄いせいもあるが、子供は親の心を知らずに育つとも言つし、知らないのが普通なのかもしれない。

実際に親の立場になれば当然分かるのだろうけど、親になるということはパートナーが居て、その女性との間に子供が居ることが条件となる。

……自分がそんな光景に居ることが、まったく想像できないのは年頃の男としては悲しむべきだろうか。

「お母様」

似ている発言以降、ご機嫌なフィオナさんと雑談を交わしている
と、部屋の扉が開けられ聞きなれた声が聞こえてくる。

その声に釣られて視線を扉へと向けると、見慣れない格好のモニ
カが居た。

「……ユーリ？」

「お邪魔してる」

「あら、意外と早かったのね」

「……」

部屋の入り口付近で思わず固まっているモニカに、私とフィオナ
さんが声を掛けるが、未だに状況が把握出来ていないらしく固まっ
たまま。

立ち竦んでいるモニカの服装は白いシャツに水色のカーディガン、
白いミニスカート。

モニカの私服は身体のラインが出るような物が多いと思っていたが、今回の服装は割とゆったりとした服装だ。

加えて、普段は結っている髪を完全に流している状態なのも珍しく、服装と相まって新鮮な印象を受ける。

「モニカ、こっちで一緒にお話しましょう?」

「……うん」

ようやく硬直から抜けだしたモニカが、私の隣へと腰掛ける。

その様子を見ていたフィオナさんが、微笑ましそうな表情をしていたのは見間違いない……だと思っ。

「モニカ、髪が濡れてる」

「えっ、あ、うん。 さっきまでシャワーを浴びてたから」

「……何でそんなに動揺してるの?」

「いや、別に動揺なんてしてないわよ」

捲し立てるかのように話す様子からは、どう見ても動揺しているようにしか見えないのだが……。

そんな私達の様子に、やはり微笑ましそうな笑みを浮かべながらフィオナさんが答えてくれる。

「ふふっ、お風呂上りにユーリ君の隣に座っちゃって、ドキドキしているのよね」

「お母様！」

「あらあら、ごめんなさいね」

あらあらと困った風に言っただけではいるが、表情は笑っており、明らかにモニカの反応を楽しんでいる。

モニカの性格はやっぱりフィオナさんの遺伝か……。

「もう……ユーリ、お母様に変な事を言われたりしてない？」

「いや、ただ雑談に興じていただけで特に変わった話はしてないけど」

「そうよね、私とユーリ君で少し意味深な会話をしただけよ」

私に対するお礼や、似ているとの発言をした時のフィオナさんの反応などを伝えず、何事も無かったと済ませようとしていたのに当事者たるフィオナさんが余計な爆弾を投下してくれた。

その発言のおかげで、モニカから疑いの視線がこちらに向けられていて居心地が悪い。

「モニカ、別にそんな意味深な会話は」

「駄目よ、私とユーリ君の2人だけの秘密なんだから」

「……随分お母様と仲良くなったのね、ユーリ？」

ジト目でこちらを睨むモニカに、ニコニコと笑みを浮かべるフィオナさん。

私が何をしたというのか……。

「……そろそろお暇させて頂きます」

「もう帰るの？」

「仕事を抜け出して来ているからな、そろそろ戻らないと」

「あら、残念ね」

仕事を一端キリの良い所まで終わらせて、ここに来ているので仕事
事が片付いた訳ではない。

メリッサが処理できた量によって残りの仕事時間が変わるので、
今日中に終わる量だといいいんだけど。

「突然の訪問でご迷惑をおかけしました」

「気にしないで良いのよ、またいらっしやいね?」

「機会があれば、お邪魔させていただきます」

「ふふつ、頻繁に来てくれると私とモニカが喜ぶわよ?」

「……考えておきます」

最初は上品な印象を受けたフィオナさんだったが、やはりモニカ
の母親だなと改めて実感する。

性格的に似ているのもそうだが、モニカを軽くあしらっている様
はさすが一児の母親というべき光景だった。

「またね、ユーリ君」

「はい、失礼します。 モニカも 」

「見送りぐらいしてあげるわ」

「いや、別に」

「いいから」

この部屋で別れようと声を掛けるも、モニカに腕を取られ強引に引っ張られていく。

閉まるドアの隙間から最後に見えたのは、フィオナさんの苦笑した表情だった。

腕を引っ張られながら、来た時とは逆の方向に屋敷の廊下を進む。

玄関付近に來ると、バツの悪そうな表情で小さくごめんなさいと謝りながら、腕を解放してくれた。

しおらしい態度のモニカに少し戸惑いながら、門へと向かっていく。

「……本当にお母様と仲良くなったのね」

「意外と親しみやすい人で助かったよ」

「ユーリは、お母様みたいなタイプが苦手だと思っていたんだけど？」

「いや、実際苦手だよ。でも」

「でも？」

足を止め、モニカの顔をじっと見つめる。

その視線に気づき、モニカも足を止めてこちらを見据える。

「似ていたからな」

「何に？」

「モニカとフィオナさんが似ていたんだよ。母と娘だから当然といえは当然なんだけど」

「……私とお母様、似てるんだ」

フィオナさんへ告げた事と同じ言葉を告げると、返って来た反応はこちらもフィオナさんと同じ嬉しそうな表情。

……モニカとフィオナさんの仲は良さそうだったんだけど、こんな反応を返すということは、以前は仲が悪かったのか？

「……同じ反応が返って来るとは思わなかった」

「お母様にも言ったの？」

「ああ、悪戯っぽい所が似てますねと言ったら、今のモニカと同じような反応が返って来たな」

「……そっか、ありがとう」

「何に対してのお礼なのかは聞かない事しておく」

「うん、ありがとう」

瞳に涙を浮かべながらも笑顔でお礼を告げるモニカの表情は、とても綺麗で魅力的なものだった。

内面だけでなく、外面も似ているんだなと実感しながら、ハンカチを渡して涙を拭くように告げる。

自分では涙を浮かべていた事に気づいていなかったらしく、ハンカチを受け取ると直ぐに顔を背けてしまう。

背けた顔が恥ずかしさから赤く染まっていたので、少しだけ笑いを漏らすと赤く充血した瞳でこちらを睨みつけてくるが、涙目の状態で睨まれても怖いどころか、可愛らしく見えてしまうのは「愛

嬌と言ったところだろうか。

そうこうしている内に迎えの車が門の前へと到着し、それに乗り込む。

「それじゃあ、失礼する」

「うん、また明日」

Chapter 23 - Pretty Woman Part .
2 END

意外と早めに続きを投稿

Part 1に引き続き、モニカ母ことフィオナさんが出張っております。

当初はここまで出番は無かったんですけど……

Part 1とpart 2を合わせて24.1KB、2話セットの話では一番長いお話となりました。

その他2話セット

Investiture 19.7KB

Summer Days 18.6KB

CSS 18.8KB

P.S.1

今回は、みんな大好き“ブリタニアの吸血鬼”ことブラッドリー卿のお話！……かもしれない。

P.S.2

深夜テンションで書き上げた“Chapter xx - Zweirkliechkeit”ですが、改めて読み返してみると三人称の文体が色々とおかしいので取り下げようかと思ったんですが、web拍手が普段の倍以上送られてくる……。みんなはそんなにえっちな描写が好きなのか、と思わず問いたくなりましたが、実際はキスして胸に触れただけなんですけどね？

……取り下げたいけど、好評だったのが分かるから下げづらい。
加筆修正の道を探った方が利口かなあ。

ガリガリと規則的に何かが擦れる音が聞こえる。

その音の発信源は、同じ部屋に居る人の行動によって起こっているものだと理解はしているのだが……。

「……ブラッドリー卿、何をしていますか？」

「卿の目は節穴かあ？ 見て分かるだろうが」

ええ、見れば分かります。

ナイフを丁寧に研いでいるんですね。

「……意外と律儀なんですな」

「突然なんだ？」

「いえ、使うかどうかも分からないナイフを何時も携行して、なおかつ自分で手入れをしていますから」

何処からとも無くナイフを数本取り出して、何処かの誰かと険悪になっている光景を何度か見掛けるのだが、何時も持ち歩いて

正直邪魔じゃないんだろうかと日頃から不思議に思っていたりする。

一般的に見られるシンプルなものではなく、取り回しに難があり
そんな形状なんだけど……。

「ふん、いざ使う時に切れ味が悪くては殺せないだろう」

「……それ、投函するためのナイフじゃなかったんですか？」

「ナイフである事に変わりはない。突き刺すだけでなく切り裂く
のにも使えるというだけだ」

黙々とナイフを研ぐブラッドリー卿の姿は、普段のイメージとの
違いから新鮮な印象を受ける。

自称“殺人の天才”、そして“ブリタニアの吸血鬼”との異名で
も呼ばれる。

破壊と命を奪うことに至上の価値を見出し、軍に身を置いている
のも合法的に殺人が許されるからという他に類を見ない理由。

誰がどう見ても、“異常”と断じるだろう人物が律儀にナイフの
手入れをしている光景は、やっぱりイメージとのギャップが感じら
れる。

専門の職人にも研いでもらえば良いのに、自分でこなす辺りは
意外と几帳面なかのかもしれない。

「そつだ、ウインスレット卿。私のパーシヴァルを何時でも出せるようにしておいてくれ」

「オーバーホール自体は今日にも終わりますが……出撃の予定でもあるんですか？」

パーシヴァルは現在、オーバーホールを行なっているため分解整備中。

基本的な整備は各自の専属チームが行うのだが、オーバーホールはETRLと専属チームが共同で行なっている。

ランスロットとクラブに関しては一切関与してないけど、おそらくキヤメロットが頑張っている筈だ。

「ああ、E・U・に行ってくる」

口の端を吊り上げた嫌な笑みを浮かべるブラッドリー卿。

その表情は待ち遠しくて堪らないといった様子なのだが、楽しみにしている内容が内容なのでこういう反応をしたものなのかと少し迷う。

敵に向かって“さあ、お前の大事なモノを飛び散らせる！”とか叫ぶ人だからなあ……。

「交代ですか？」

「いいや、単純な増援だ。ロシア戦線へのテコ入れだよ」

「……南ヨーロッパからアフリカの辺りには既にラウンズが4人居るんですが」

「知らないな、私はただ戦場で壊せば満足だ」

「相変わらずですね……」

ヨーロッパ方面はポルトガル州とスペイン州の制圧以降動きを見せていないが、アフリカ方面では着実に占領地を広げている。

E・U・と一言に言っても範囲は広く、ヨーロッパを中心として東はロシア、南はアフリカまでを勢力圏内としている。

今回ブラッドリー卿が赴くのは、ロシア州東部の極東管区から西に侵攻していく地域らしい。

アフリカでの砂塵、高緯度地域での低温環境などKMFにとって過酷な環境での運用になりそうだ。

アラスカに配備されている部隊には寒冷地用の改修が施されたりしているけど、遠征軍にそんな改修を施す暇はあったんだろうか……。

ナイフが研がれる音をBGMに、スペイン州で遭遇した新型機についてのデータを流し見する。

私が撃破した機体は真つ二つに切断してしまい研究に使えるような状態では無かったが、他のメンバーが撃破した機体は比較的損傷が少ない状態であった為、回収し本国へと運んできた。

運ばれてきた機体をETRLで分解・調査し、捕虜から得られた情報を追加したものがこのデータだ。

このデータを見る限り性能としては第七世代量産期相当、つまりは“ウオード”や“ガレス”といった機体と同程度の性能を発揮することであり、ブリタニア軍の主力である“サザーランド”では少し分が悪い相手ではある。

ただ、“パンツァー・フンメル”と比べて高いコストと低い生産性から、未だに少数の配備に留まっているとの情報がある。

予算の問題はどここの国でも事情は同じなんだと、少しだけE・U・に親近感を覚える。

交戦中の敵国に親近感を覚えてどうするんだとも思ったが、騎士としてではなく技術者としての親近感なので許される筈。

そんな心境は置いておくとして、このデータの中で少し面白いと思ったのが“Mk5-E6E3”には共通の正式名称が存在しない事だ。

E・U・域内の4州が共同開発した機体という特殊性故なのか各州で独自の名称が用いられているそうで、“アルミランテ”という名もスペイン州軍のみで通用する名称らしい。

イギリス：Valiant（ヴァリアント）　ドイツ：
Fluegel（フリューゲル）
イタリア：Orione（オリオーネ）　スペイン：
Almirante（アルミランテ）

このややこしい名称で混乱する事を避ける為、ETRLでは形式番号である“Mk5-E6E3”で呼称する事を決めている。

軍では仮称を付ける事を検討しているらしいが、どんな名称を付けるのか少しだけ楽しみにしている。

酷いセンスじゃない事を期待したいけど、敵だからという理由で妙な名称を付ける可能性が高そうなのが少し心配。

「ブラッドリー卿、質問してもいいですか？」

「手短にしる」

「……ヴァルキリエ隊のパイロットスーツって、ブラッドリー卿の趣味なんですか？」

せつかく2人きりなので前々から気になっていた事を思い切って聞いてみる。

パイロットスーツは全身を覆って保護するのが主目的なのだが、ヴァルキリエ隊のパイロットスーツは肌が露出している面積が非常に大きい。

本来果たすべき役割を放棄している、あのパイロットスーツらしきものは一体何なのだろうか。

私の質問が意外だったのか、ナイフを研いでいる手を休め、身体ごとこちらへと向けながら答えてくれた。

「なんだ、卿も色を知るお年頃かあ？」

「純粋な興味ですので、ご心配なく」

「私の部隊に文句を付ける前に、卿の相方のパイロットスーツに文句を付けたらどうだ？」

モニカのパイロットスーツは……何を思っただのデザインにしたのが未だに理解に苦しむ。

本人曰く、見えているのは下着では無いとの事だけど、そういう問題なんだろうか……。

「あれは指摘しても無駄でした」

「……指摘したのか」

「ええ。ちなみに返事は“機体の中に居るんだから誰も見ないじゃない、それにこのデザイン何かおかしいの？”というものでした」

「……平然としているアレもそうだが、直接言った卿もどうかと思うがな」

「その辺りは気にしないでください、それでどうなんですか？」

本来の趣旨からずれ始めているので改めて問い直すと、ブラッドリー卿にしては珍しい苦々しそうな表情で答えてくれた。

「私の発案では無い、あの馬鹿が勝手にやったことだ」

「馬鹿？」

「ああ、改めて思い出すと忌々しい奴だ」

「その人の事、気に入っていたんですか？」

「知らん。あの馬鹿は私がラウンズになって1年経った頃に死んでいるし、確認する術も無い」

「……やっぱり気に入っていたんだと思いますよ」

「何故だ？」

「亡くなった時期、覚えているじゃないですか。 どうでもない人間なら、直ぐに忘れるでしょう？」

「……ふん、どうでもいい事だ」

捨て台詞のような物を吐いたブラッドリー卿は中断していたナイフ研ぎを再開した。

……もしかして照れてる？

男の照れた様子なんて見ても嬉しく無いんだけど、ブラッドリー卿のこういふ様子は非常に珍しい。

常ならば不機嫌そうな表情、もしくはニヤついた表情を浮かべる事が多い人なので尚更珍しく感じる。

嫌われ者で色々性格に問題はあるけど、やっぱりブラッドリー

卿の事は案外嫌いじゃない。

……こんな事言ったらモニカに文句を言われそうだから、決して口外しないけど。

Chapter 24 - Existence of Vamp
i r e E N D

ルキアーノは昔から、あんな性格だったんだろうか、というちよつとした疑問。

どんな家系なのかすら分からないので、推測のしようがありませんけど、昔は良い人だったり……しないかなあ？

ヴァルキリエ隊のパイロットスーツは永遠の謎です。

さすがにルキアーノが指示した訳じゃないだろうという考えから、こんな展開になりました。

会話文は“技研”、地の文は“ETRL”といった風に使いわけようかなと画策中。

……アルファベットだとかっこ良く見えると考えてしまう私は、厨二病？

次は、幼馴染こと“アステシア・ローグライア”とのお話の予定です。

原作キャラが一切登場しない誰得な話になります。

せっかく設定したオリジナルキャラで、愛着もあるので見逃してください。

ご意見・ご感想お待ちしております。

Chapter 25 - Real Intention

“Development and Test Command”

通称DTC、もしくは開発実験集団と呼ばれる装備品の評価を行うための軍組織のひとつだ。

ETRL（帝国技術研究所）で開発されたものを軍に引き渡す際は、必ずDTCの評価を受けねばならないと定められている。

ただし、ラウンズが扱う専用機はこの限りでは無く、実質的には量産機のみが性能評価を受ける仕組みだ。

「ほれ、これが2機種分の評価データだ」

「毎回言ってますけど、わざわざ准将が対応される必要はありませんよ?」

評価データを受け取りながら、体面に座る厳つい顔をした軍人に話し掛ける。

エドワード・ハミルトン准将

DTCの司令官であり、軍の装備品を知り尽くす人物と言っても良い。

ちなみに元アグレッサー部隊所属の優秀な騎士なのだが、結婚と

同時にDTCへと異動している。

本人は加齢を理由に挙げていたが、周囲から見れば各地を転々とするアグレッシブサー部隊を嫌って毎日家に戻れる部署を選んだ、というのもつばらの見方だ。

「天下のラウンズ様がわざわざ足を運んでるんだから、俺が対応しない訳にもいかんだろう?」

「白々しいですね、素直に暇だからと言えればいいじゃないですか」

「おいおい、辛辣だな。そういうお前さんだって、幼馴染に会うためにわざわざ足を運んでるじゃねえか」

「別にアステシアに会いに来た訳ではありません。……私以外に、貴方の様な強面の相手と話し合いが出来る相手が居ないんです」

敵つい顔、色黒の肌、そして着くずした軍服。

気が弱い人間が見れば、間違いなく萎縮してしまう容姿だ。

それに、ETRLに所属しているのは基本的に民間人であり技術者なので交渉事には向かない。

普通の民間人に軍人と対等に話し合っ来ていなんて命令は、どう考えても酷だ。

……私の隣で、黙りこくっている民間人がその証拠だと思う。

「俺が気にしてる事をずけずけと言いやがって……そっちの嬢ちゃんとしてはどうよ？」

「ひゃい！ な、何でしょうか」

「……」

「ほら、怖がられたじゃないですか」

瞳にうつすらと涙を浮かべながら必死に返事をするメリッサの姿に、准将は無言だった。

確か准将の娘って、メリッサと年が変わらなかつた気がする。

まさかとは思うが、実の娘にも“お父さん、怖い”なんて言われているんだろうか？

仮にそうだとしたら、すごく不憫な人なのかもしれない。

少しだけ、同情してあげよう。

「……憐れんでるような視線を感じるのは気のせいか？」

「気のせいです。准将が強面だと改めて実感できた所で、話を戻していいですか？」

「勝手にしやがれ」

「ええ、勝手にします。このデータからですが」

「問題はコストですか」

「第5世代と比べれば、性能は隔絶してると言ってもいいんだかな」

今回、DTCに性能評価を依頼したのは2機種。

R P I - 2 1 2 B V i n c e n t W o r d

R P I - V 4 L G a r e t h

第7世代量産機として配備される事が決定している両機だが、予算の制約の為に低率生産が指示されており月間生産数は僅か10機程度。

このペースだと、サザードの置き換えに何年掛かるのか考えたくも無いのだが……。

DTCによる性能評価も終了し徐々に前線へと配備される事にな

るので、現場の声が高まれば予算も何とかなる……と思いたい。

「そついや、ヴィンセントは結局どうなったんだ？ こつちじゃ配備計画なんて耳に入らないんだが」

「総生産数は3桁未満、生産ラインも既に閉じています」

グラウサム・ヴァルキリエ隊向けに予備を含めて5機。

ロイヤルガード向けに、こちらも予備を含めて15機。

この20機以外は、どこに配備されているのかをこちらでは把握していない。

風の噂だと、未だ前線へと引き渡されずに軍の倉庫で眠っているなんて話もあったけど……。

「原因は？」

「サザールランド5機分のコストは無理が有つたらしいですね」

「……ちなみに、今回の2機種はいくらだよ？」

「サザールランドの3倍ですね、ちなみに私達の機体は10倍から15倍程度です」

専用機に関しては基礎となるフレーム部分から新規開発、ひたすらに高性能を目指しているのでこんなお値段になる訳だ。

一部のパーツに関しては共通化して費用負担を抑える努力はしているのだが、根本的に数が少ないため焼け石に水だったりする。

「それぞれ年産120機で合計240機、サザerlandなら720機購入できる値段は高いわな……」

「高性能化に伴って開発費は増加の一途を辿っていますからね、財務局では作戦機を減らす議論も始まっているらしいですし」

「騎士のお前さんとしては、数を減らすことには反対か？」

「現状でも領土が広過ぎて絶対的に数が足りていません。E・Uへの侵攻で本国の戦力の大半が出て行ってしまっていますし、増やせないのは仕方ないにしても減らされるのは正直賛成出来ませんね」

「……本国に直接攻撃してくる連中なんて居ねえだろ？」

「保険みたいなものですよ、無くても問題ないけど有れば安心するって話です」

所詮騎士の1人でしかない私が考えても仕方の無い事ではあるんだけど。

それに私が考えつく事を、あの第2皇子が考えつかない訳も無いので心配は無用かなあ……。

「失礼します」

憎たらしい笑顔を振り撒きながら“ローグライアを呼んできてやる”と言って准将が部屋を出てから、5分ほど経過。

しばらく部屋で待ちぼうけをくらっていると、涼やかな声と共に1人の女性が入室してくる。

緩やかにウェーブがかった紫色の髪に、青色の瞳、一際目立つ白いヘアバンド。

アスティア・ローグライア

私の幼馴染にして、士官学校の同期生。

現在はDTCの所属として、性能試験に従事している。

「……ウインスレット卿？」

「准将が余計な気を回したらしくてね、普通でいいよ」

肩を竦めて冗談めかしながら言うと、アスティアも表情を緩めてくれた。

昔から真面目で控えめな性格なので、こつでも言わないと堅い表情のまま話し続けてしまう。

「はい。 お久しぶりです、ユーリさん」

「久しぶり、アスティア」

「モニカさんと仲良くやっていますか？」

「何でモニカ限定なんだよ……そういうアスティアだって友人ぐらい出来たのか？」

「ユーリさんじゃないんですから、友人ぐらい居ますよ」

……それは暗に、私には友人が居ないと言いたいんだろうか？

確かに友人と言えるのはアスティア達3人ぐらいで、その他は知り合い程度でしか無いので指摘は間違っていない気もするけど。

「……あの、主任？」

服の袖を引つ張られる感触に視線を向けてみると、メリッサが居心地悪そうな表情をしてこちらを見つめていた。

……久しぶりに会ったアステシアとの会話に集中してしまって、放置したままだったのは流石に不味かったか。

そんな私達の様子に小さく笑みを浮かべながら、アステシアが気を使って声を掛けてくれた。

「初めまして、アステシア・ローグライアです。　ユーリさんの幼馴染です」

「は、はい。　メリッサ・ヴィノクール、主任の部下を努めさせてもらっています」

「技研での部下だ、落ち着きが足りないけど優秀な子だよ」

「……明日は雨ですか」

「メリッサ、後で2人つきりで話をしようか」

「いつ、いえ、主任の手を煩わせる訳には行きませんから遠慮させて頂きます」

「遠慮する必要は無い、上司と部下の信頼関係は必要な事だからな？」

「えっと、ほら、私ごときに時間を使うよりも他の事に時間を費やしたほうが」

「話し合いは必要だよな？」

「……はい」

せつかく褒めたというのに、あの反応は酷い。

いや、確かにメリッサを褒めた事なんて記憶に無い気もするけど……。

恨めしそうにこちらを見るメリッサの視線を無視しながら、そんな事を考えていると対面に座るアステイアがくすくすと小さく笑っていた。

「どうかした？」

「いえ、ユーリさんも変わったなあと思っただけですよ」

「私が？」

「ええ……昔から今のよ様な性格だったら私達の関係も変わっていったかもしれませんね」

「……婚約の話？」

「しゅ、主任！ この美人な幼馴染さんと婚約してたんですか！」

“婚約”という言葉に思わず食いついてきたメリッサの口を手で塞ぎ、強制的に黙らせる。

基本的には人見知りなので、外に連れ出すと借りてきた猫のように大人しくしているのが常なのだが、アステシアが相手だとそうでもないらしい。

モニカやリリシアの様に我が強いタイプでは無く、大人しいタイプなので波長が合うのかもしれない。

その本人は、メリッサの美人という言葉にやや頬を赤く染めて照れている様子。

……私の周りに居る女性はアステシアのお淑やかさを見習うべきだな。

「昔の話だ」

「私とユーリさんの両親が懇意でしたからね。よくある話でしょう？」

「……主任も幼馴染さんも平然としてますけど、どう考えてもよく有る話じゃ無いと思います」

一般家庭には縁の無い話かもしれないが、爵位持ちの家系では珍しくない話だ。

あくまで口約束であり実際に婚約まで進む事は少ないらしいので、

ちよつとしたお遊びみたいなものなのだろう。

「結局、自然消滅したから気にも留めて無かったけど」

「主任、それは酷いです」

「今のユーリさんの発言に少し傷つきました、私は本気でユーリさんが結婚相手だと思っていたんですよ？」

「そういう類の感情を私に持っていたのか？」

「いえ、そういう訳では無くて……見知らぬ相手に嫁ぐぐらいなら、少しでも親しいユーリさんの方が良いなと幼心に思っていたんです」

「どっちかと言えば、なのか」

そこは“ユーリさんが良かった”と言い切つて欲しかったなあと思つのは欲張りだろうか。

当のアスティアは何処か懐かしさを含んだ表情で、言葉を続けた。

「だって、幼馴染とは言つても、あまり仲良かったとは言えないじゃないですか」

「違くないな。友人と言えるようになったのは士官学校に入ってから、かな？」

「モニカさんのおかげですね」

「感謝するのは癪だから、言葉にするつもりは無いけどな」

「ふふっ、天邪鬼なんですから」

久しぶりに顔を合わせた幼馴染は、以前と変わらず真面目で大人しい性格のままだった。

端麗な容姿に穏やかな性格、“淑女”という言葉が実に似合いそうだ。

アスティアと会話しながらそんな事を考えていると、ふと私の周りに居る女性はどうなんだろうと思いつく。

女傑という言葉が似合うノネットさん

武人氣質なエルンスト卿

不思議系のアーニャ

自重しないメリッサ

高飛車なりリシア

モニカを含めても、私の回りにいる女性は良く言えば個性が強く、悪く言えば一癖ある連中ばかりだ。

アスティアの性格の良さが際立つのは、私のこういった周辺環境もあるのかもしれない。

……… 今後は、心の清涼剤として定期的にアスティアに連絡を取ろうと思う。

「そろそろ失礼するよ、あまり時間を取らせる訳にもいかないし」

「性能評価は終わりましたから、今は大して忙しくありませんよ？」

「主任ー、もう少しゆっくりして行きましょうよ」

「却下だ、働けよ民間人」

横暴です、と騒いでいるメリッサを引っ張って出口へと連れて行く。

アスティアとの会話は楽しいが、勤務時間中にあまり話し込んで周囲から妙な認識を持たれても困る。

それに私だけならともかく、アスティアにまで余計な影響が及ぶ

のは避けたい。

「ユーリさん、お仕事忙しいんですか？」

「本業はむしろ暇なぐらいだ、副業は年中忙しいけど」

「でも、楽しいんですよね？」

「……悪くはないかな」

私の答えにアステイア満足気な笑みを浮かべていた。

けれど、どこか寂しげな表情が混じっていたように感じられたのは気のせいだろうか。

430

「ユーリさん、今度休暇の予定を教えてくださいませんか？」

「別に構わないが、どうかしたのか？」

「少し懐かしくなっちゃって……また皆でお出かけしたいなと思
いまして」

「……そうだな、偶には4人でというのも悪くはないな。荷物持
ちは面倒だけど」

「ふふっ、男の見せ所ですよ」

士官学校時代には、よく4人で出掛けていたものだ。

男女比1対3であり、周囲からの視線が非常に鬱陶しかった事を鮮明に覚えている。

……思えば私に同性の知り合いが少ないのは、この時期の行動が原因なんじゃないだろうか。

「分かったよ、モニカには私から伝えておく」

「リリシアさんには私から連絡しておきますね。 約束ですよ？」

「分かったよ、約束だ」

小さな頃から変わっていない色白の手を差し出し来たアステイアにに応じて、こちらも手を差し出す。

お互いの小指を絡ませて“ゆびきりげんまん 嘘ついたら針千本吞ます”という言葉を唱え、“指切った”との言葉で絡めていた小指を離す。

どこで覚えたのか知らないが、アステイアは昔から約束事をする時には必ずこの行為を求めてきた。

嘘ついた時の罰が酷過ぎる気もするが、本当に針を飲ませたりはしない……と思う。

隣で首を傾げながら見ているメリッサが居るので、やはりブリタニアの風習では無いらしい。

本当にどこの国の風習なんだろうか。

「約束、破ったら酷いですよ?」

「アステティアが怖い事はよく知ってるよ」

「もう、またそういう事言っんですから」

頬を僅かに膨らませ拗ねたような表情を見せるアステティアに思わず声を出して笑ってしまう。

その行動が気に入らなかったのか、ジト目でこちらを睨んでくるが本気で気分を害している訳でもなさそうなので放って置く。

「またな、アステティア」

「……はあ、最後まで意地悪なんですな」

「昔からだろう?」

「そうでしたな……お出かけ楽しみにしてます」

メリッサちゃんを引き連れて去っていくユーリさんの姿を見送り、イスに再び腰掛ける。

髪を纏めていた白いヘアバンドを外し、表面を労るようにゆっくりと撫でる。

ユーリさんが覚えているのかは分からないけど、私にプレゼントしてくれた初めての物。

男の子からのプレゼントなんて初めてだったから、当時はとても喜んだ覚えがある。

特に高級な品という訳ではないが、その時の思い出も相まって、こうして今でも使い続けている。

ユーリさんを変えたのは幼馴染の私ではなく、突然現れたモニカさんだった。

特別な相手になりたかった訳じゃない。

けれど、1番近くに居て、1番理解しているのは私だという小さな自負があった。

だけど、私は踏み込めなかった。

チャンスは幾らでもあったのに、ユーリさんの内面に踏み込むのを躊躇してしまった。

躊躇した私と、躊躇せずに踏み込んだモニカさん。

結論だけ言えば、ただそれだけの話。

どうして私ではなくモニカさんなのか、と思わなかったとは言わない。

けれど、それは過ぎってしまった事であり、私が勇気の無さが招いた事で

そこまで考えて、その思考を振り切るように頭を振る。

ユーリさんと話した後は、どうしても感傷的な気分になってしま

う。無意識の内に、何も考えず無邪気に過ごしていた子供時代を懐かしんでいるのかもしれない。

答えの出ない考えを何時までももしていても仕方が無いので、仕事に戻るために席を立つ。

部屋から出る際に一言だけ、ここに居ない友人に向けて言葉を残す。

友人への宣戦布告のつもりは無い、だけど私の紛れも無い本音だ

から。

「あまり悠長にしていると、私が奪っちゃいますよ？ 大事な幼馴染なんですから」

幼馴染こと、“アステリア・ローグライア”のお話でした。

個人的には最後のアステリアのセリフがお気に入りに入り。

「奪っちゃいますよ？」というセリフを誰かに言わせてみたかったです。

“DTC”や“エドワード・ハミルトン准将”など今回もオリジナル設定が色々と存在します。

あまり重要な設定ではありませんので、軽く流していただけると幸いです。

今回は原作キャラが登場しないお話でしたが、近いうちにもう1度こんな感じのお話を予定しています。

もう1人の同期である“リリシア・グットウィン”、高飛車お嬢様ですね。

……決して、ちよろいキャラではありませんよ？

ご意見・ご感想お待ちしております。

「何なのよ、これ！」

仕事を終えて一息入れようと思い、ラウンジへ入室すると突然の大声で出迎えられた。

そして同時に、何かを叩きつけるような音が室内に響き渡る。

何事かと思い視線を向けると、そこに居たのは顔を赤くしたモニカとお腹を抱えて笑っているノネットさん、呆れ顔なエルンスト卿だった。

「あははは、なかなかセンスがある記事じゃないか！」

「この記事の何処にセンスがあるのよ！」

「クルシエフスキー、少し落ち着け。ノネットも煽るんじゃない」

何かの記事を見て、その内容にモニカが憤慨しているという状況で良いんだろうか。

ノネットさんは笑い転げているし、エルンスト卿は呆れているので、誹謗中傷とは違うんだろうけど。

考えても埒が明かないし、私が入室して来た事に気づいていない

ようなので直接聞いてみる事にする。

「ノネットさん、何がそんなに面白いんですか？」

「おお、ナイスタイミングだ。これを読めば分かるぞ」

そう言って手渡されたのは、過激な言葉が表紙に描かれている雑誌。

俗的な言い方をすれば、ゴシップ誌っていう奴かな。

というか、この手の雑誌を読む人、身近では初めて見た気がする。

「ユーリ！ 読んじゃ駄目！」

「まあまあ、モニカ落ち着け」

「ちょっと、ノネット離しなさい！」

「嫌に決まってるじゃないか。さあ、今のうちに読むんだ！」

「……エルンスト卿」

「適当に読めばいい、身構えるような内容では無い」

中身を見ようとするとする私に、モニカは懸命に制止の言葉を掛けなが

ら雑誌を奪おうとするが、ノネットさんに背後から羽交い絞めにされ身動きがとれなくなっている。

モニカとしては何かの記事を見られる事を嫌がっているようだけど、見るなど言われれば、逆に見たくなるのが人の常だと思う。

エルンスト卿からも読むように勧められたので、おそらくその記事があるであろう折り曲げられたページを開く。

そのページに一際大きな文字で書かれていたタイトルは

“新事実！ Twelveは皇帝陛下の愛人か！”

……何これ？

“愛人”とか“不倫”とか、ゴシップ誌が好きそうな言葉だというのは分かるけど、皇帝陛下までネタにするのか。

事実とかそれ以前に、不敬罪で捕まる可能性が極めて高いというのに……もはや勇気じゃなくて無謀の域だと思う。

「うう、読んじゃ駄目って言ったのに……」

涙声で恨み節が聞こえるが、聞かなかった事にして本文を読み進

めてみる。

要約すると、“当誌は Twelve が皇帝陛下の愛人なのではないかと疑っている”という事だった。

文章に登場する証言の全てが“くらしい”とか“くのようだ”などの曖昧表現であり、肝心の証言者も“皇帝陛下の事情に詳しい関係者”という訳の分からない人物ばかりで、どう見ても記者の想像で書きましたという感が拭えない。

加えて文章中には“モニカ・クルシェフスキー”という単語が一言も存在していない。

あくまでも皇帝陛下の側近である“Twelve”としか表現されておらず、明らかに裁判で訴えられた時の事を考慮しての書き方だ。

要するに、典型的なゴシップ記事という訳なんだけど……。

「お世辞にも、よく出来るとは言い難いですね」

「そうか？ 私としては良いセンスだと思ったんだが」

「趣味が悪いぞ、ノネット」

未だに楽しそうにしているノネットさんと、それを諷めるエルンスト卿をスルーして、床に座り込んでいるモニカの元に近づき髪をぼんぼんと軽く撫でる。

こちらを見上げてきたモニカの泣きそうな表情に、一瞬ドキッとしてしまったが直ぐにその感情を抑えこみ、誤魔化すように髪を撫で続ける。

「別に泣きそうにならなくても」

「だって、こんな記事……」

「こんな雑誌の記事、信じる奴なんて居ないだろう」

「……本当に？」

本当だから、その表情でこちらを上目づかいに見るのは止めて欲しい。

モニカのように容姿の整った女性に、そういう表情をされると嗜虐心を刺激されてしまい余計な行動を取りそうになる。

「本当だから。ほら、泣かない泣かない」

「……ユーリは信じてない？」

「信じてないから安心して」

「……うん」

未だに座り込んでいるモニカの髪を優しく撫で続ける。

その様子をニヤニヤとした表情で見つめてくる人が居るわけだが……どうしてくれようか。

「ノネットさん、原因が自分にある事を自覚してくださいね？」

「いや、すまん。それにしても、モニカは泣くと幼くなるタイプか」

それは私も初めて知った、と言いたところだけど、あの衝撃的とも言える初対面の際にモニカが取った態度も同じ部類かな。

でも、泣いた時に言動や行動が幼くなるというのは別に珍しい事では無い。

「誰かさんと違って、モニカは繊細なんですから自重してください」

「おいおい、まるで私の神経が図太いみたいじゃないか」

「……自覚無かったのか」

「ドロテア、お前まで私をそういう目で見ていたのか」

漫才じみた2人の掛け合いを見ながら撫で続けていると、さすが

に立ち直ったらしく床から私の隣のソファへと移動してきた。

大丈夫なのかと問うと頬を赤く染めてそっぽを向かれたが、小さな声で“大丈夫”という答えが返って来たので安心する。

……泣く寸前の表情を見られたのが恥ずかしかったらしく、視線を合わせてくれないけど。

「それにしても、あんな雑誌を買ってきたのは誰なんですか？」

「書店で見かけてな、興味を惹かれて私が買ってきた」

「……ノネットさんでも書店に足を運ぶ事があるんですね」

「ウインスレット、それは間違いだ」

読書とは縁遠い性格だと思っていたノネットさんが書店に足を運んだ事に驚きを感じていると、エルンスト卿が至極真面目な顔で反論してきた。

……余計なお世話かもしれないけど、エルンスト卿に真正面から真面目な顔で睨まれると若干怖い。

「間違い、とは？」

「ノネットの行動原理は、気分と直感だ」

「ああ、成程。意味があつて書店に足を運んだ訳では無いということですね」

「……お前たち、私を馬鹿にしてないか？」

エルンスト卿と揃つて、気のせいですと返事を返しておく。

私達の返事にジト目でこちらを見返してくるが、旗色が悪いと悟つたらしく何時もの表情へと戻した。

「しかし、スキヤンダラスな記事だな」

「そんな言葉で片付けられるレベルなのかしら……」

何やら呼び出しを受けたノネットさんとエルンスト卿を見送った私とモニカは、先程の雑誌を改めて見返している。

先程のモニカの記事で、それなりの衝撃を受けたのだが、他のページはもつと酷かった。

“皇子Oのロリコン疑惑！”

“皇子Sと側近の爛れた関係”

“皇女Gは現代のマリー・アントワネット”

“皇女C 真の役立たずは誰なのか”

「……よく見ると、皇族特集って書いてある」

「これ、本人達に見せたらどうなるのかしら？」

「出版社が潰れて、これを書いたライターが路頭に迷うという結末だろうな」

「リスク高いわね……少しぐらい加減してあげた方がいいのかしら」

「加減つて、何をするつもりなんだ？」

「あんな不名誉な記事を載せられたんだから、それなりの対応をするだけよ」

一瞬止めようかとも思ったが、あの記事の内容がモニカにとって不名誉なのは事実だし訴える理由としては十分だ。

ただ、モニカが告訴せずとも、この内容が皇族の目に入れば直接的な手段で潰しに掛かりそうな気もするけど……。

数日後、携帯端末の画面を見つめて上機嫌なモニカの姿を見掛けた。

何をしているのかと問うと、端末の画面をこちらに向け、笑顔で一言。

「自業自得よね」

モニカが見ていたのは、民間の信用調査会社が提供している倒産情報のページだった。

そこには、先日の雑誌を刊行していた出版社の社名が記されていた。

……モニカが手を回したのか、それとも皇族の仕業なのかは知らないが、出版社の方はご愁傷様です。

C
H
a
p
t
e
r

2
6

-

S
t
a
r
r

R
e
p
o
r
t

E
N
D

書きたかったような書きたくなかったような、そんなお話。

10年以上前に何処かの国の大統領が執務室で“不適切な関係”を持ってしまったニュースがありました。そのお相手が、モニカ・ルインスキー (Monica Lewinsky) です。

この人のおかげで、モニカが皇帝の愛人だとネタにされてたんですよ。

名前と立場からして、この人がモチーフなんでしょうけど……
皇帝×モニカなんて同人誌だけではないです。

皇族ネタ

・Odysseus オデュッセウス

(天子との結婚)

・Schneizel シュナイゼル

(カノンの「公私ともにね」)

・Genevia ギネヴィア

(皇族としての権力を振りかざすタイプだったらしいので)

・Carine カリーヌ

(ナナリーに対して「役立たずの皇女」)

ご意見・ご感想お待ちしております。

Chapter 27 - Dignity

私やモニカと共に戦争初期からE・U・戦線へと派遣されていた4人がようやく本国へと戻ってきた。

これで国外に居るのはエルンスト卿とノネットさん、それにブラッドリー卿の3人だけとなったが、現在は獲得した占領地の統治に懸命であり文官の出番はあれど武官の出番が少なくなってきたいるのが現状で、あまり出番は無いかもしれない。

「こ・ん・に・ち・は」

私とモニカ、アーニヤにアッシュフォードという珍しい組み合わせでまったりと過ごしていると、突然妙な音程で声を掛けられた。

やる気の削がれる声だと思いつつも声の方向へと視線を向けると、そこには薄い笑みを浮かべたアスプルンド伯爵と何故か顔色の悪いクルーミ―中尉の姿があった。

「ロイドさんに、セシルさんまで……どうかしたんですか？」

「いや、ちょっと相談事が有ってね」

「相談ですか、それなら連絡してくれば良かったのに」

訪れた2人と親しいアッシュフォードが席から立ち応対するが、出来ればここが何処で誰が居るのかを思い出して欲しい。

私やアーニヤは気にしないけど、この場には依然としてアッシュフォードと微妙な関係が続いているモニカが居るのだ。

決して心が狭い訳ではないが、殆ど面識の無い相手に対しては意外とキツイ一面も持ち合わせているので若干の不安がよぎる。

「君にも関係ある話なんだけど、本題はウィル君なんだよねえ」

「ウィル君？」

「あれえ、教えてなかったっけ？」

暢気に会話を続けるアスプルンド伯爵達から視線を外し、モニカへと視線を移すと何処か退屈そうな表情を浮かべながら対応の様子を見ていた。

不快感を感じている訳では無さそうなので一安心、けれど悪化する可能性もあるので訪ねて来た客を如何にかしないと。

「アスプルンド伯爵、呼び方についてはもう諦めましたが一体どのような用件なんです？」

「おや、やっと反応してくれたね。君に話して置きたい事があったね」

「用件は私だったんですか……まあいいです、此処じゃなんですし執務室に」

「別にここでも良いんじゃないの？」

モニカの事を考えて場所の移動を提案した所、その本人の言葉に遮られた。

その言葉に意外感を覚えたのはアッシュフォードも同じだったらしく、モニカに視線を向けながら小さく驚きの表情を浮かべていた。

かくいう私は驚きと同時に疑問を感じ、真意を問うてみた。

「……突然どうしたんだ？」

「そちらの方達はユーリを訪ねてここに来たんでしょう？ だってわざわざ別の場所に移動せずともここで話せばいいじゃない」

「いいのか？」

「私に許可取る必要無いでしょう、機密に値する話だったら別だ
ど」

本人は何でも無い事のように振舞っているが、普段と比べると素
つ気ない態度なので多少は無理をしているらしい。

モニカの態度に可愛らしさを感じ思わず笑みを浮かべそうになる
が、ここで機嫌を損ねる訳には行かないのでなんとか抑え込む。

「……ということなので、お2人とも中にどうぞ」

「いや、悪いねえ」

「そう思っているなら、もう少し神妙に言って欲しいですね。あ
と後ろのクルーミー中尉をどうにかしてくれませんか？」

「ご機嫌なアスプルンド伯爵の後ろでは、顔色の悪いクルーミー中
尉が立ちすくんでおり正直不気味だ。」

私の言葉に応じて、アスプルンド伯爵が声を掛けたり目の前で手
を振ってみたりと色々試行錯誤しているが反応無し。

その光景が面白かったのか、それとも退屈凌ぎに丁度良いと判断
したのかは知らないが、アーニヤが写真を取り始め、それに気づい
たアッシュフォードがその行為を咎めるが、どうして駄目なのと逆
に問われ返答に窮していた。

モニカは相変わらず退屈そうというか無関心だし……待ち惚けを食らっている私はどうすればいいんだろう。

「中々に愉快だったねえ」

「うう……申し訳ありません」

アスプルンド伯爵は相変わらずだが、クルーミー中尉は先程までの青白い表情から一変して表情を赤く染めていた。

……いきなり声を掛けられると、驚きのあまり無意識に変な声が出てしまうのは仕方無い事なだけだね。

「それで、話というのは何なんです？」

「別に難しい話じゃないよ、ただ知らせておいた方が良くかなあと思っただけだから」

アスプルンド伯爵が未だに立ち直っていないクルーミー中尉に視線を向け、その視線に気づいた中尉は胸元に抱えていたファイルを

こちらへと手渡してきた。

機体改修計画要領と題されているそれは、枢木とアッシュフォードが搭乗するKMFの改修計画に関する資料だった。

渡された資料でまず目に留まったのは、機体名。

“ Z - 01 / D Lancelot Conquistista ”

“ Z - 01 / E Lancelot Club Vanquisher ”

「 “コンクエスター” に “ヴァンクイッシャー”、随分な名前を付けたものですね」

“ Conquistista ” と “ Vanquisher ”

若干意味合いは異なるが、両方とも “ 征服 ” という意味を持つ言葉だ。

“ Air Cavalry ” 空の騎兵と “ Air Gunner ” 空の射手と命名されている現状から随分と様変わりした名称である。

「なんとなくだよ?」

「枢木に対する皮肉かと思っただんですが、違うんですか？」

私の言葉に反応してか、近くに座っているアッシュフォードの視線がやや険しくなる。

枢木の目標はナイトオブワンとなり、エリア11を自身の直轄領とする事だと聞いている。

だが、現状はブリタニア帝国の尖兵となり他国を侵略する日々だ。

そんな枢木を間近で見ているアスプルンド伯爵が、皮肉としてこんな機体名にしたのかと思ったのだが……。

「やだなあ、天下のナイトオブセブンにそんな無礼な事する訳ないじゃない？」

「貴方なら十分ありえる話だと思っただんですが……まあ気にしないでおきましょうか」

間も変わらず薄い笑みを浮かべながら否定しているが、間違いなく皮肉で命名したに違いない。

皇帝陛下の事を“皇帝ちゃん”なんて呼ぶような人が、枢木に無礼だからなんて理由を持ち出す筈が無いし。

「……ロイドさん、後でお話があります」

「表情が怖いんだけど、ウィル君の言葉を真に受けちゃったの？」

「事実だとしたら怒りたくもありません！」

「酷いねえ、僕は無実だよ」

枢木の行動を嘲笑うかのようなネーミングに納得がいかなかったらしく、アッシュフォードはアスプルンド伯爵に噛み付くが、当の本人は何処吹く風といった涼しい表情。

その隣に座るクルーミー中尉は何故か困惑した表情、そういえばこの名称を付ける時に何故止めなかったのだろう？

普段のクルーミー中尉なら物理的な手段を持ってしても止める気がするんだけど……。

「じゃあさ、“Justice”とか“Paladin”なんかだったら納得してくれる？」

「そういう問題じゃありません！」

「アッシュフォード、怒るのは後にしてくれない？ 私の用事を早く片付けたいんだけど」

「……すみません」

またもや埒の空かない状況になりそうだったので、横槍を入れて会話を中断させる。

バツの悪そうな顔をしながら引き下がるアッシュフォードを確認して、改めて渡された資料を読んでいく。

両機共通の改修点は以下の2つ。

- 1．機体出力の増加に伴う基本性能の向上
- 2．ブレイズルミナスを胸部・両脚部にも追加装備する事による
防御性能の向上

これ以外にランスロットには“ハドロンプラスター”が追加装備され高い砲撃性能を獲得しているが、機体重量の増加と機体バランスの変化に加えて反動を相殺する為にフロントユニットを用いなければならず、空中機動能力を若干犠牲にして機体を安定させる仕組みとなっている。

一方のランスロット・クラブには、直接の戦闘能力には結びつかないが内部機器の大幅な更新が施されている。

ラウンズ専用機の中で最も電子戦装備が充実しているのは、役職上部隊指揮を執る事が想定されるモニカの専用機“リゾルート”だが、ランスロット・クラブにはそれと同等のものが搭載されており、後方司令部からの支援が無くとも単独で戦場の状況を把握し行動できるようになっていいる。

枢木達のランスロットは第7世代、そしてランスロットの運用データをベースとして開発されたのが私達の専用機である為、今までは機体性能に若干の差があったのだが、今回の改修により名実共に私達の機体と同等の能力を有する事となるようだ。

「改修の内容は分かりましたけど、何故私に見せたんです？」

「最初に言ったじゃないか、伝えておいた方がいかなあと思ったって」

「……まったく言っていないぐらいに必要ないんですけど、一応受け取っておきます」

「それじゃ、用事は済んだし僕は失礼するよ」

読んでいたファイルを閉じると同時に、アスプルンド伯爵が立ち上がり出口へと足を向ける。

結局何のために来たのか分からないクルーミー中尉と少し不機嫌そうなアッシュフォードも席を立ち、アスプルンド伯爵の後を追うが、その当人がふと足を止めてこちらへと視線だけ向けて言葉を掛けてきた。

「ねえ、ついこの間まで学生やってた子が兵器開発に精を出す光景を見たら、どう思う？」

「どうも思いませんね、自分に関係無い他人がどういう生き方して

よつと興味ありません」

普段浮かべている薄い笑みを消して、感情の読めない表情で淡々と問い掛けてくる。

アスプルンド伯爵にしては珍しい態度ではあるが、この人なりに真面目な態度なのかもしれない。

「冷たいねえ、自覚が無いその子に諭してあげるとかいう考えないの？」

「有りませんね、貴方が言葉を掛けてあげれば良いじゃないですか。人を殺める道具を作ってる自覚ありますか、ってね」

「あらら、言いたい事バレてたの？」

「作ってるものが戦場で使われて初めて自覚するんでしょう。…
…実際に戦場で使われて、結果を知らされた時にその子がどういう反応をするのかには多少興味が湧きますね」

普通の国であれば、兵器開発といえども国民を守る為という理由が出来る。

けれど、ブリタニアは違う。

外への侵略を続ける国であり、作った兵器はすべからず他国を蹂躪する為に用いられる。

仕事だからと割り切れれば最善、もしくは普通の感性を捨てるというのも1つの方法か。

「悪趣味だねえ」

「自覚してます」

薄い笑みを浮かべて普段の調子に戻ったアスブルンド伯爵は、ひらひらと手を振りながら退室した。

クルーミー中尉は一度ため息を吐いた後に恐縮した様子でこちら向かって一礼、アッシュフォードは無言でその後を追って行った。

閉じられたドアから視線を外し、先程から大人しかった2人へと視線を移すと片方からは心配そうな表情を向けられたが、もう片方は視線すら向けていなかった。

そんな対照的な様子に若干頬を緩めながら、ふと昔読んだ本に書かれていた一文が頭に浮かんだ。

“自分の開発した技術には責任を持たなければならない”

責務なのか、それとも矜持なのか、技術者の1人として私も真剣に考えるべき言葉なのかもしれない。

C
h
a
p
t
e
r

2
7

-

D
i
g
n
i
t
y

E
N
D

Chapter 27 - Dignity (後書き)

機体名については放映当時から色々と触れられていた話題。

“エアキャヴァルリー” 除き、ランスロッドの名称は全てスザクへの皮肉だという意見もありましたね。

シュナイゼル殿下に拾われた後、フレイアの研究にのめり込む彼女の姿を冷やかに見るロイドさんという設定。

アニメ本編では戦術兵器ランスロッドに戦略兵器フレイアを載せる事を渋っていましたが、ロイドの美学ではフレイアのような大量破壊兵器は嫌がりそうだなと個人的には思います。

Chapter 30ぐらいからR2本編の時間軸に移行するかもしれません。

ただし、本編とは当分関わらないので内容は空白期と代わり映えしませんけどね。

更新の間が空いた理由については後日活動報告にて。

「プレゼント？」

「はい、ちょっと相談に乗っていただきたくて……」

執務室で何時ものように仕事を片付けていると珍しい客が訪れた。

良くも悪くも有名人、そして少しだけ苦手意識を持っている同僚・
枢木スザクだ。

「数日前にアーニヤも同じような事を聞きに来ただけど」

「アーニヤが？」

「珍しいとは思ったけど真面目な様子だったから、モニカに連絡を
付けてそっちに行って貰ったけどね」

相談内容は目と足が不自由な女の子へのプレゼントは何が良いか
という内容だった。

正直対応に困ったのでモニカに丸投げしたんだけど、結局どうな
ったんだろうか。

「クルシエフスキー卿……ですか」

「相談事なら私よりもモニカにした方が良い答えを返してくれそう
なんだけど…… 枢木の場合は無理だよな」

モニカやエルンスト卿は未だにアッシュフォードと枢木に対して
距離を取った対応を取り続けている。

ジノ達のように仲良くするとまでは行かずとも、簡単なコミュニケーション
が取れるぐらいにはなつて欲しいと常々思っているし実際に
に口にした事もあるのだが、2人とも聞き入れる様子がまるで無い。

エルンスト卿には“いらん世話だ”と返されるし、モニカには“
前向きに考えておく”と適当に誤魔化される。

同僚同士で仲良くしましよなんて私のキャラじゃないし、本来
ならこんな役回りをする必要も無いのだろうけど、戦場で連携を取
る可能性がある以上は、たとえ打算的な物であってもある程度の人
間関係は構築しておくべきだと私は思っている。

さして親しくないエルンスト卿は置いておくにしても、親しい人
に分類されるモニカに戦死されるのはさすがに嫌だ。

そのリスクを減らす為にも打算的であろうが、交友関係は作って
おいて欲しいのだけど……。

「仕方無い事とはいえ、避けられてますから」

「仕方無いんだ？」

「同僚とはいえブリタニア人ではありませんから仕方ないと思います。ジノ達が例外だって事は分かっていますから」

「……意外と割り切ってるんだな」

「ある程度、身を置いていけば慣れますよ」

苦笑気味に答える枢木の表情は、嘘を言っているようには見えな
い。

ブリタニア本国で暮らしていくには、これぐらい割り切って考
えないと生活していけないのかもしれないが。

「まあ、それは置いておくとして。プレゼントのお相手について
教えてもらおうか」

「……良いんですか？」

「他に相談できる人が居るの？」

「……よろしく願います」

私の言葉に何かを考えるような表情を浮かべた枢木だったが、す
ぐに苦い顔をして答えを返してきた。

自分の周囲の人間を一通り思い浮かべたのだろうか、相談をしてまともな答えが返ってくる光景を想像できなかったのだろうか。

ジノとノネットさんは間違いなく面白がって妙な物を提案するだろうし、アーニヤの場合は相談する側なのだから論外、残るアツシユフオードは浮世離れた感じが感じられるので相談事に向いているタイプではない。

……アスプルンド伯爵は論外としても、クルーミー中尉という選択肢は無かつたんだだろうか？

「要するに、アーニヤと同じ相手なのか」

「そうみたいですな」

プレゼントを贈る相手の事を詳しく聞いてみると、アーニヤと同じ相手らしい。

具体的に誰なのかまでは聞いていないが、アーニヤや枢木が関係していると考えるとそれなりに高い身分の持ち主なのかもしれない。

身分に限らず女性へのプレゼントの定番といえば“装飾品”とな

るのだけど、あれは目で見て楽しむものであり視覚に障害がある相手へのプレゼントには些か不適切だろう。

「枢木はプレゼントしたりされたり経験って無いの？ 有るなら貰って嬉しかった物とかを参考に出来そうなんだけど」

「あまりそういう機会には恵まれませんでしたね、学生をやっていた時にパーティーを開いてもらった経験はありますけど……」

「……」

「ウインスレット卿は、貰って嬉しかった物や送って正解だったと思う物は無いんですか？」

記憶にある中で、一番最初のプレゼントは幼馴染のアステアに贈った“カチューシャ”と“リボン”。

当時は子供だったので高価な物を買うことは出来なかったし、誰かにプレゼントをあげるといふ行為自体が初めてだったので無難な物を選んだ記憶がある。

それ以後は基本的に“ぬいぐるみ”“ネックレス”“イヤリング”“ティーセット”などを送っている。

逆に貰った物としては、相手によって傾向が異なっていたりする。

アステアは“ボールペン”や“万年筆”などの文房具系。

モニカから送られる物は“コート”や“マフラー”等の身に付けるもの。

リリシアからは何故か“果物セット”を送られる。

ちなみに、あまりに高価な物はプレゼントとして選ばないというのが私達の暗黙の了解となっている。

「貰って嬉しかった物といえば腕時計かな？ これなんだけど」

左腕を枢木の方へと伸ばし、手首に付けた腕時計を見せる。

見た目も機能的にも珍しいものではないが、今でも大事に使いつづけている一品だ。

「見た目は普通ですよね」

「見た目どころか機能も普通だよ、ただ貰った際の状況が特殊だったからとても印象に残っていてね」

「状況ですか？」

「そう、あまり詳しくは話せないけど色々嬉しくてね って、話が脇に逸れ過ぎてる」

つい昔の事を思い出しそうになったが、枢木からの相談という本

題を思い出しそちらに思考を傾ける。

視覚で楽しむ物は却下、つまりは聴覚や触覚などで楽しめる物に限定される。

手で触れて時間を把握する腕時計も世の中には存在するが、果たして贈られて嬉しいだろうか……。

聴覚、音……

「ああ、オルゴールが有るじゃないか」

「音ですから良さそうですね」

「本来なら目と耳で楽しむ物だから、若干魅力が落ちるかもしれないけど」

「耳は分かりますけど、目で楽しむというのは？」

「一言にオルゴールといってもシンプルな四角い外観のものから、ピアノやキャラクターを模したもので有るからな。部屋のインテリアとして用いる場合もあるんだよ」

「……詳しいですね」

「プレゼントする際に色々と調べたんだよ」

ネット上で軽く調べた後、実際に店舗まで足を運んだのは良い思

い出だ。

注文書に書いた名前に啞然とされ、大騒ぎにはなつたのも良い思
い出……では無いけど。

そういえば、私の正体がラウンズだと分かつた際に何故かサイン
を求められた。

スポーツ選手のようなサインなんて書いた事無いんだけど思い
ながら筆記体を意識して色紙に書いたのだが、店主はそれを店の外
から見えるように飾っても良いかと尋ねてきた。

何でも、“ラウンズも足を運ぶお店”といった宣伝がしたいらし
い。

商魂たくましい事だなと思いつつも、本人の目の前で知名度を
利用した宣伝がしたいと言い切つた店主に呆れと感心を覚えた私は、
苦笑いを浮かべながら承諾した。

私の知名度は他とメンバーと比べて高くないとはいえ、ラウンズ
というネームバリューは大きいらしく売上は大幅に増えたそうだ。

ちなみに、その店に行つて何かを買う際には感謝の意味を籠めて
なのか大抵2割から3割程割引いた値段で提供してくれる。

オルゴールなんて頻繁に買うものでは無いんだけど、気の良い店
主なので悪い気はしない。

「うん、オルゴールで考えてみようと思います」

「私が行ったお店、紹介しようか？」

「お願いします」

手元の小型端末から地図情報を呼び出して住所と周辺地図を枢木へと見せる。

「枢木は住所と店名だけメモしていたが、あれで大丈夫なのか少し心配。」

「まあ、タクシーの運転手なんかは住所だけ伝えても大まかな位置を理解してくれるから十分なのかもしれないけど。」

「そういえば、アーニヤとも相談してた方がいいかもな」

「やはり事前に相談しておいた方が良いでしょうか？」

「送る相手が一緒だし、どんな物を送るかぐらいは伝えておいた方がいいと思う。可能性は低いだろうけど、同じ物を贈りましたなんて受け取った方も困りそうだし」

「そうですね、ありがとうございます」

綺麗な姿勢で頭を下げる姿は、さすがは武道の国の出身というベキ礼儀正しさを少し新鮮に感じられた。

ブリタニアでは頭を下げる事をあまり良しとしない風潮があるので、珍しいと言った方が正しいのかもしれないが。

悩みが解決したおかげなのか、少しだけ表情を明るくした枢木が退室する後ろ姿を見送ると思わず安堵のため息を吐く。

以前の教訓を生かして目を合わせないようにと頑張ったのだが精神的に疲れる。

時間の経過で多少なりとも改善されるかなとも思っただけど、そんな簡単な問題でもないらしい。

……大して親しい関係では無いので枢木の周りに居る人達が頑張ってくれる事を祈っておこうと思う。

Chapter 28 - Present (後書き)

これまでの話でスザクの出番が少ないように感じられたので、急遽書き上げた話。

うちの主人公とスザクは絡ませづらいなと改めて思いました。

なるべき均等に出したいとは思っていますが、どうしても偏ってしまいます。

ビスマルクやドロデアはあきらかに登場機会が少ないんですよ…。

あえてプレゼントする相手の名前は出していませんが、さすがに分かりますよね？

小説版ではこの時期の皇女様についても触れられているらしいですが、小説版を持っていないのであまり深くは関わらない方向で。

プレゼント内容がオルゴールになったのは私の好みが反映された結果です。

でも真面目な話、送って問題の無いプレゼントがこれしか思いつかなかったというのも事実。

次の“Chapter 29”は、またもや登場となるメリッサの話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0861t/>

DIFFERENT COLOR

2012年1月9日00時52分発行